
夜月下の枝垂桜

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜月下の枝垂桜

【Nコード】

N5444Y

【作者名】

クロ

【あらすじ】

運命の止まった、終わりを迎える世界。航空都市艦・武蔵に住む少年結城は、何もかもが縛られた武蔵と自分の運命を同じものと感じていた。周りの仲間達と共に支えあっている最中で、彼は己の心の渴きを満たしてくれる何かを探していた。そんな中、世界を揺るがす日が訪れる。今までの世界を壊し尽くす境界線を目的地に、結城は己の過去と向き合いながら死地へと赴く。

第一話　能ある鷹は爪を隠す

目を瞑り、最初に目に浮かぶものは赤だった。

炎のような真つ赤な色。血のような鮮やかな色。破裂するような感情の色。思考や視線を焦がす色が、オレの原初の記憶だ。

勿論、それ以外のことも憶えている。色んな人に迷惑を掛けた下らない人生だったが、それでも楽しいことはあった。

ただ、嫌な思い出の方が多いただけの話だ。

自分の過去を形作る記憶の中で、オレは明確な区分けを持って自身を二分した。

今の自分と、過去の自分。同じ存在なくせに、オレはそれを別物だと言う。酷く矛盾した話だ。

しかしそれも十年近く続けば、当たり前のように思えてくる。

「……」

目を閉じる。

暇なときに嫌なことを思い詰めるのはオレの悪い癖だ。だから意識

を外に向けるために、オレは過去ではなく、今を感じた。

風の匂いがする。水気を含んだ、澄んだ柔らかな匂いだ。

そして風の流れに混じって、音が聞こえてくる。音は一つだけではなく、色んな音程や音色を含んでは、世界を構築している。

目を瞑り、耳を澄ませ、意識を他の感覚器官に集中させれば、視界に頼らずとも世界を感じることが出来る。

そして真つ暗な意識の中で、色が現れた。いろんな色が、情報となつて脳に送り込まれてくる。

最初に感じたのは、空だ。無限に広がる大空に、自分の身体を運ぶ巨影がある。

巨影は船の形をしており、全部で八隻存在している。

一隻一隻が都市程の大きさを持つ船は、それぞれ太い縄で連結されており、青い空の下で波を立てながら進んでいる。

そして船の上で動きがあつた。

動きは様々で、全てを感じ取れるには時間が掛かる。

人の足音。市場街の喧騒とした賑やかさ、商店街の客人や店主達の遣り取り、機関部の作業音。野良猫や走狗、溝の中にある黒藻の獣の気配など。

様々な音が、感触が、気配が、匂いが、蒼穹に蔽かと渡り進む船の

生活圈を構築している。

波と共に走る八艦連結式の白船の名は”武蔵”。

波濤な歴史を進んだ今の世界における、極東で唯一認められた移動する領土だ。そしてこの独立した社会空間を持つ航空都市艦の上で、オレは十年近く暮らしている。

オレの名は結城。

訳有って、苗字しか名乗れない、この世界では何処にでもいる”学生”だ。

/
/

武蔵中央後艦”奥多摩”の一角。

左舷住宅街には安価な家賃を持つ長屋がある。

瓦で敷かれた屋根の上、朝の涼しい微風と暖かな日差しを浴びながら、結城は堂々と日向ぼっこをしている。

腰まで伸びた黒い長髪を三つ編みに結び、黒と白を基調とした制服を身に纏う。極東式の中量級はオートクチュールの高級品で、制式なデザインとは懸け離れた、フード付きのコート様式を用いている。そして右腕には緑の腕章がつけられており、武蔵アリアダスト教導

院の校章が描かれたそれには、黒の文字で”臨時相談役 結城”と記されている。

屋根に横たわっている自分の隣りでは、長さの異なる二本の線が走っている。二メートル程の長さを持つ長い線は棒であり、外見を隠すために棒全体を白い布で隠している。そしてもう一本の短い線は剣の形をしている。黒い金属製の外装と鞘、簡素な金の装飾を持つたそれは十束剣だ。とつかのつるぎ

東洋式の両刃長直剣と白い棒を傍に置き、結城は目を瞑り、静かな朝の一時を満喫していた。

そして不意に、遠くの方、奥多摩艦首から右舷二番艦”多摩”の方へと向けて、音がした。

大気を揺らし、僅かに肌を打つような響きは爆発の破砕音だ。風の流れに沿って伝わってくるそれは、連続して各艦に響く。

空に巻き上がる砂塵と絶え間ない衝撃音に釣られて、住宅地や商店街の方から大勢の物見が出てきた。

彼らは騒ぎの監視を兼任している地元の店主達で、多摩へと渡る破砕の荒波に視線を向けては、その中の誰かが叫んだ。

「後悔通り”を艦首側に行くぞー!!」

叫び声に導かれ、結城は身体を起こした。

彼は小さく欠伸をして、ボーっとした表情で空を眺め、

「何時も通りだな……」

と、小さく呟いた。

そして、

「おお、こんなところにいたのか。結城」

通りの方、屋根の下で自分を呼ぶ声がした。

釣られて結城が視線を向けると、其処には一人の男性が立っていた。
番屋の正式装備である中量級装甲を着た、体格のいい中年男だ。

「戸塚さん……」

無精髭を生やした見覚えのある顔に、結城は軽く挨拶を交わす。それを戸塚と呼ばれた番屋の警備員は、よっ、と手を挙げて返事を返す。

「お前さんは授業に出ないのかい？ 連中、気合入って行っちゃったぞ？」

「……出席点数は足りている。今日はサボりだ」

結城の短い返事に、戸塚と呼ばれた男は、やれやれ、と頭を掻いた。

しかし彼は気を悪くしたわけでもなく、そのまま言葉を作る。

「そうかい……、ところで結城。今、暇か？」

質問に、結城は返事もせず、視線も向けない。

ただ其処に座っているだけの、動きを見せない反応を肯定として受け取ったのか、戸塚は続けて言った。

「暇なら頼み事があるんだが、話だけでも聞いてくれ。——最近、浅草と品川の方でヤクザの地上げが頻繁になっていてな、そのせいで被害届けが増えてきている。アソコは番屋の管理が薄いところだから警備が難しく、この前に魔神族が連中を仕切ってから生意気になってきてるんだ」

「それで？」

戸塚の説明に、結城が問いかけた。

短い促しだが、その反応に戸塚は笑みを浮かべる。

彼は一つ息を吸ってから、

「まあ、先日、夜警団がお前んとこの担任に、連中の品川の事務所を潰して欲しいと頼んでな。んで俺達番屋の方は、俺が代表してお前さんに依頼しに来たわけよ。どうだ？ 興味あるか？」

「……」

誘いに、結城は暫し考えた。

今、多摩表層部の商店街で破壊の音が続いている。艦首の方まで進むそれは自分のクラスである三年梅組のメンバー達だ。

朝の一時限目は体育の授業で、自分の担任はバトルレースによる実技教育を好んでいる。路線から見れば品川方面へと一直線。戸塚の言っているヤクザの件は結城にも心当たりがある。最近の被害者が自分の担任で、そのせいで教導院の壁が八つ当たりで彼女に壊されたいらしい。

個人的にどうでもいい事件を思い浮かべながら、同時に、話に乗るのも悪くはないと思う。今日は仕事の関係で午後に予定があるが、それ以前は暇だ。少し運動をするのも悪くない。

ゆえに、

「場所と人数は？」

質問に、戸塚は即答した。

「浅草第五階層の貨物区画の奥に事務所がある。人数は魔神族やその他含めて全部で100人くらいか。品川の連中より数が多い面倒な相手だが、片付ければ後は安泰だ。——援軍いるか？」

「いらん」

返事と共に、結城は傍にある長剣と棒を取った。布に覆われた棒を背後に背負い、鞘に収めた剣を左腰に携える。

彼はそのまま屋根の上から通りへと飛び降り、戸塚の真横へと着地する。

「一時間で終わる。――後片付けの準備でもしてろ」

「J u d .」

肯定を意味する返事と共に、結城は前へと歩き出した。

ゆったりとした歩調で目指すのは左舷一番艦”浅草”。品川へと向かった級友達とは逆の方向に向けて、結城の一日が始まった。

/
/

「おーい、三嶋くん。ちょっと手伝ってくれない？」

「あ、はい、今行きます」

武蔵左舷二番艦”村山”の艦首。

村山の観光街大通りの先にある場所に、一軒の番屋がある。地元の自警団と消防団が役割分担で運営している建物の中で、若い男女の声が響いた。

広いスペースを持った事務所の中、番屋の制服を着た先輩格である若い女性が、後輩の男性に色々と指示を出している。

「三嶋くん。一時間後に皆で浅草の方に行くんで、救護品や装備の準備手伝ってくれない？」

「は？ ま、まあ、別に構いませんけど。……どうしたんですか急に？ 何か事件でも？」

若い警備員、三嶋の質問に、先輩格の女性は、そうじゃないわよ、

と苦笑を浮かべた。

彼女は事務所の奥にある、装備品が納められてある倉庫の鍵を開け、
「最近、貨物船である品川と浅草でヤクザの地上げがあるのは知ってるでしょ？」

「ええ、魔神族が仕切っている組織のことですよ。連中、艦首の方で事務所立てて、力技で地主や借家人から土地を強引に”買収”していると聞いてます。横暴で人数が多い上に、管理が難しい貨物船の市場街に陣取っているため、中々手が出せないと隊長が言っていました。——それがどうかしましたか？」

三嶋の説明に、女性が、うんうん、と頷く。

装備品や救護に必要な応急品を一つずつ取り出しながら、

「そのヤクザの連中、最近生意気になってあちこちで暴れては迷惑増やしてるんだよね。多摩やうちにも被害届けがじゃんじゃん届いてさ。それで戸塚さんが頭抱えていて、でも人間じゃあ基本的に魔神族には勝てないじゃん？ 番屋は警備担当だけど、戦闘のプロとは限らない。ああいう相手とやりあうには現役が必要なんで、それで戸塚さんが助っ人を探しに行ったの。——朝早くから」

「助っ人？ 魔神族に対処できる人がこの武蔵にいるんですか？」

三嶋の疑問に、女性隊員が目を丸くした。

質問自体がおかしいと思っているような表情を浮かべ、しかし直ぐに納得したような表情に変わり、

「そう言えば三嶋くんは、瀬戸内から武蔵に帰化したんだっただね。去年から？」

「ええ、この街ではまだまだ新入りです」

「そっか、じゃあ知らないのも当然か」

女性隊員の言葉に、三嶋は首を傾げた。

その反応に先輩格は笑みを浮かべ、取り出した装備品を運ぶようにと、三嶋に合図を出す。

そして、

「少ないけどいるわよ。優秀な流体種族とサシで勝負できる人がこの武蔵に。あたしの現役時代の担任や、当時の後輩とかマジで化け物だし……、戸塚さんが頼んだ助っ人もそういう人物みたいよ。品川の事務所には多摩の夜警団が前以て誰かに頼んだそうで、浅草の方も後で片付けるとの連絡が、通神文でさっき戸塚さんから入ったわ。——」 一時間後に終わりそうだから、後片付けの準備をしておけ”って」

説明に、三嶋が眉を顰めた。

俄かに信じ難い話だが、有り得ないことではない。自分の生まれ故郷であるK・P・A・Italiaでも似たような話は沢山ある。他の国でも、教導院の役職クラスや英雄クラスの人物には、都市破壊兵器級の戦闘力を持っている者だってある。武蔵は聖連からの条約によって武装解除されており、教導院の学生にも年齢上限があって、貿易を主としている武蔵には実戦経験がない。

そしてそのような鳥籠の中で、自分の先輩は、肉体的に先天的優勢のある魔神族と渡り合える人物がいると言った。三嶋は武蔵に来て日が浅いが、自分なりにこの武蔵のことは見てきたつもりだ。

変人・奇人・怪人・異人の集まりである極東の独立領地は、毎日が賑やかで騒がしく、同時に居心地がいい。政治的立場で他国に遅れを取ってはいるが、それを物ともしない個性が、この国にはある。

しかしそんな風に考えていると、不意に三嶋は思った。

変質者揃いの武蔵の中で、魔神族を相手に出来る者はどのような人なのかを、頭の中で奇天烈な奇人怪人を想像し、思わず、うぬぬ、という唸りを上げる。

「三嶋くん。変な人とか想像してるんじゃない？——まあ、武蔵の住民には碌な奴がいないけど」

「それ、自分のこと言ってます？」

「あら？ 変人だと自覚できるまでは、あたしはまだまだ常識人だと思うな。——ほらっ、ボーっとしてないで早く手伝いなさい。そろそろ出発するわよ」

/
/

極東唯一の独立領土である武蔵。

八隻の大型輸送船を連結させた準バハムート級航空都市艦は、艦内の社会経済に対する円滑な循環性の保持のために、個別の艦に異なる役割分担を行っている。

両舷一番艦である”浅草”と”品川”は貨物船としての役割を持ち、暫定居住区を兼任した市場街や貨物運搬用のデリックなどがある。

観光・行政地である二番艦や、住居・生産地である三番艦。教導院・全艦統括指揮である中央両艦に比べて、貨物船である一番艦は作業区画や入り組んだ居住区画が多いため、治安の維持や管理が難しく、不法者の集落としては打ってつけの場所になっていた。

そんな事情のある武蔵両舷一番艦、その内の片方である左舷側の”浅草”で、一人の少年が艦首側に向けて歩いていく。

背中に布に包まれた長棒を背負い、左腰に一振りの長剣を携えたのは結城だ。

彼は貨物運搬・格納用の巨大スペースを持つ地下第五階層の巨大通路を、表層部にある横町と平行するように進む。

周りでは多くの運送業者や企業の作業員達が歩き回っており、作業用地下階層ならではの汗ばんだ賑やかさが広がっている。そんな中、制服姿の結城の足取りは軽く、そして優雅だ。偶に周りにいる作業員や業者が視線を向けてくるが、彼は気にしない。

向かう先は第五階層、艦首側の企業区画にあるヤクザの事務所だ。事前に仕入れた情報では、連中は浅草で勢力の最も大きいヤクザだ。品川の暴力団とは協働関係を持っており、左右両舷から畳み込んで貨物艦である一番艦を有る程度牛耳っている。

迷惑な話だと、結城は思う。無意味で、軽薄で、華がない。子供の我儘に似たものだ。やってることは暴力を脅迫材料にした土地財産

の強奪。強盗紛いの、悪党に為り切れない小物の喚き声。聖譜記述による歴史再現と教導院が国を管理する今の世の中で、そんな連中は何処にでもある路傍の枯葉みたいなものだ。己のちっぽけな欲望を満たすための悪行を働き、しかし本当の意味での外道には大きく劣る。

目の前を飛ぶハエが鬱陶しいように、彼奴らの所業もまた虫に等しい。そして目障りな害虫を捻り殺すのも、人間にとっては気紛れみたいなものだ。

そう、気紛れだ。

一時限目の授業は体育。これはその延長線であり、生徒会臨時相談役としての責務でもある。お膳立ては十分だ、相手がヤクザで、依頼人が番屋の警備隊長、誰も文句は言わない。

「……ここか」

と、どうでもいい考えことをしている間に、目的地へとついた。

目の前、石場街と貨物区画から少々離れた場所に、大きな空き地がある。その向こう、艦内壁側の方角に、小さな企業区画を構成する幾つもの事務所や建物がある。

今、結城の目の前には二階建ての事務所があり、彼はその入り口である正門前に静かに佇んでいる。

顔を上げ、事務所の窓や壁の構造、辺りを見回す。

そしてややあってから、結城は無言で前へと進み、事務所の入り口である扉のドアノブへと手を伸ばす。

次の瞬間。

音を立てながら扉を開いた結城の視界に飛び込むものがあつた。

目と鼻の先に一瞬で近づいたのは一面の赤。

視界の殆どを遮る、強固な赤い鱗で覆われた豪腕が、時速百五十キロと言う猛スピードで突っ込んできた。

/
/

ヤクザを仕切る、身長三メートルはある赤い巨体を持つ魔神族は、苦しい表情で息を詰めた。

突然のことに思考が追いつかず、息の通らない感覚に苦悶の声を小さく挙げた。

そして朦朧とした意識の中で疑問を作る。

自分達はこの一体の市場街と区画を仕切る暴力団だ。右舷一番艦”

品川”にあるヤクザと協働し、地上げや暴力沙汰で土地買収を行って金銭を稼いでいる。自分達は左舷艦群を縄張りに活動しており、先日、三番艦である”青梅”の一軒屋を”買収”してからは金に困ってはいない。

しかし問題なのは、その後品川の連中から知らせが届いた。今まで亀みたいに引き籠もっていた番屋の臆病虫達が、助けを呼んだそう

だ。

別に可笑しな話ではない。

魔神族は肉体的性能に恵まれた流体種族であり、並みの人間では傷一つ付けられない頑丈な身体を持っている。警備・治安維持を担当している番屋の連中でも、自分達を遥かに凌ぐ存在を前にしては手も足を出さない。だからこそヤクザとして好き放題活動でき、それを何とかしようと、番屋があの手この手を使ってきたものもある。そしてそれを全て返り討ちにして来た。

今回も同様だ。

品川のからの連絡で、番屋が自分達を駆逐するために援助を請うたのを知り、予め子分達を集めて事務所待ち伏せしていた。

数はざっと150人余り。品川からの援軍も加え、相手が来るのを待っていたが、窓の外から来た人物を見たときは拍子抜けしたものだ。

向こうはたったの一人。極東の制服を着た、黒髪の少年だ。体格は痩身に背の高さも一般的。腰に剣を持つてはいるが、魔神族である自分の鱗に、そんな細い刀身は効かない。当初は番屋の連中と一緒に

に大人数が仕掛けてくるとか思っていた分、向こうが子供一人だと言うことに皆が失笑した。

番屋の連中も、ついに頭がイカれたか。子供に頼るほどの腰抜けに街の警備を任せるなど、世も末だと思った。ならばその御厚意に甘えて、折角の客人を持て成そうと思い、自分が出た。

ドアの前に待ち伏せし、向こうがそれを開けたのと同時に奇襲を掛ける。

タイミングを計り、ドアノブが回されたのと同時に丸太の如く腕を振り上げる。右足を前に踏み込み、それを軸として腰を捻るように右から左へと回し、同時に腕を全力で前に突き出す。

地面を基点とした全身の軸運動は、接地面・足首・膝・大腿筋肉・股関節・腰・背筋・肩・二頭筋肉・肘・手首・拳の順に沿って、体内で燃やされた運動エネルギーをコンマ二秒の瞬間で連続増幅させる。

そして編み出したのは時速百五十キロの右ストレート、暴走トラックの如き勢いを持つ真紅色のハンマーの直撃に、少年の細い身体は無様に吹き飛んだ。

そうなる、筈だった。

/
/

「ぐっ……」

息の詰まった声が頭上で小さく響く。

そして同時に、結城の視界を赤の一色が埋め尽くした。

ヤクザの事務所に足を踏み入れた瞬間、こちらの脳天を叩き潰す拳は振り抜かれているが、伸び切った巨大な腕は数ミリの差で結城の眼前に止まっている。足を一步踏み出し、拳を突き出した姿勢のまま、魔神族は動かない。

そしてその背後、事務所の机を囲んだヤクザの子分達が怪訝そうな表情で視線を魔神族の背影に向けていた。赤い巨体に隠れて、彼らは結城の姿を確認できない。しかし立ったまま動かない自分達のリーダーをおかしく思ったのか、子分の一人が口を開けた。

「親分……？」

疑問が作られる。そして動いた。

動いたのは魔神族の方だ。背後しか見せない赤は、錆付いた歯車のようにゆっくりとその頭を上げて、次の瞬間、三メートル大の巨躯が宙を浮いた。

「……………！」

ヤクザどもの表情が驚愕に変わる中、魔神族の突き出された拳は力無くだらりとぶら下がり、両足が地面を離れ、空中で静止した。そしてその現象の正体と一連の動きを、壁際に立っているヤクザが魔神族の側面から覗き込んだ。

「おい……………、マジかよ……………」

眩きに似た言葉と共に、彼は見た。

視線の先で、奇襲を掛けた魔神族のパンチに対し、結城が背後に背負った長棒を右脇下から瞬時に抜き出し、攻撃が自分に当たるより早く、魔神族の咽喉に刺突をカウンターで返した。予想しなかった強烈な突きを受けた衝撃で、魔神族は息を詰め、同時に軽く意識を失う。そして布に包まれた二メートル長の棍棒が、魔神族の喉笛に突き刺さり、それを支店に結城が片手で魔神族を棒で持ち上げた。フラットとした表情で、結城はまるで机に置いてある林檎を手に取りるように、苦も無く魔神族を空中に支えている。

その姿にヤクザの思考が止まった。予想できなかった、想像するこ

とすらしなかった光景を前に、次の瞬間、

「お騒がせする」

結城の短い一言に、全員が武器を手にとった。

/

/

朝の浅草地下第五階層。戸塚を先頭とした番屋の警備隊隊員達は、賑やかな市場街の大通りに沿ってヤクザの事務所へと向かう中、遠くから響く大きな破碎音と共に、通りの向こうから素早い速度で地面を何度もバウンドして転がって、自分達の目の前で停止した赤い巨体を見た。

そして彼らは目を白くして地面に突っ伏した魔神族を無言で見ている、

「よし、先ずは要救護者第一名だ」

戸塚の軽い口調と共に隊員が担架を出して魔神族を運び、皆は事務所に向かってまた歩き出した。

/
/

碎かれた事務所の入り口を潜り、結城は事務所を出た。ゆつくりとした歩調で空き地へと進む彼の後を追って、ヤクザどもが事務所から飛び出し、彼を囲む。数は150人。手に握る武器は棍棒やバット、刃物など様々だ。そして自分の周囲を円で埋め尽くすヤクザを見渡し、結城は遣る瀬無い顔を浮かべた。

室内での戦闘は自分に有利だが、それでは運動にならないし、面倒だ。どうせやるなら全員纏めて張り倒した方が効率が良いし、広い空き地でなら後始末が楽だ。それに懸念事項である魔神族も、懸念のけの字が出る前に退場して貰った。顎と咽喉の二発と蹴りを合わせた三発で倒れるとは、魔神族も地に堕ちたものだ。

これだと嫌でも溜息をしなくなる。少しは髑り甲斐のある相手だと思っただけに、この落胆は隠し切れない。こんな肉の塊を叩くだけのような行いじゃ、弱い者虐めみたいで後味が悪い。

だから、

「気が変わった……、此処からは職務だ。武蔵アリアダスト教導院生徒会臨時相談役として宣告する。全員武器を捨てて投降しろ、今なら骨を折るだけで赦してやる。そうじゃない奴は纏めて掛かって来い、半殺しにしてから赦してやる」

「あんま大差ねえよ!!?」

ヤクザのツツコミに、結城は、ム? とした機嫌の悪い疑問系を作った。

そして彼は右手に持った棍棒の先端を強く地面に突き立て、

「おいおい、お前等のボスがあまりにも無様だから、オレが慈悲深くして命乞いのチャンスを与えてやったのに、少しは感謝の気持ちを抱いたらどうだ? 本来なら、今此处で血塗れになっても文句は言えない立場なんだよ、お前等」

警告の口調で言葉を返し、結城が棍棒を肩に担ぐ。

身構えるヤクザ達を前に、彼は視線を右から左へと送り、

「^{審判}J u d g m e n t . だ。お前等の罪は強奪と暴力、そして警備機関に承認されていない危険物の所持と使用だ。これらに基づき、臨時相談役の名において、貴様らを杖刑に処す」

判決の声に、双方が同時に動いた。

円陣を囲むヤクザの内、結城の背後に立つ一陣が奇襲を掛ける。数は8人。バットと刃物を振り上げた彼らに対し、結城の対処は簡単だった。

視線を向けず、向こうが武器を振り下ろすより早く、バックステップで自分から相手の懐へと飛び込んだ。

「——！？」

突然の行動に距離感を狂わせられたヤクザは動きを止めた。足を止め、武器は頭上に振り上げたまま。殆ど密着状態の中で、今度は結城が反撃する。

肩に担いだ棍棒をそのままに、ステップで足が地面に着地した瞬間、重い震脚と共に地面を踏み鳴らす衝撃音が響く。同時に全身の体重を背後に乗せ、腰の捻りと上半身の微かな弾む動きを相乗し、全身の瞬発力を打撃面に集積させる。背中を相手と密着させた状態で、結城は胴体と足腰の『頸』のみで、強烈な体当たりを打ち出した。

——清武田で古くから伝わる近接武術の絶技の一つ、『寸頸』を鉄山靠に上乘せした打撃技だ。

ぱあんつ、という軽快な破裂音が空間に響き、同時に8人の大人が宙を飛んだ。砲弾の勢いで突き飛ばされたヤクザは背後にいる仲間達を薙ぎ払い、そしてそのまま背後にある事務所の奥や壁へと叩き込まれた。今の一撃で間違いなく骨を何本か砕いた、脳震盪や強度な打撲、当たり所にもよるが、今吹き飛んだ連中の傷は全治一ヶ月。最もダメージの大きい精神は治療不可能だろう。立ち直れてまた悪さをさせられても困る。

「さて、……次は誰だ？」

二十人もの大男が宙を舞った光景に、全員が啞然とする。思考の止まった彼らを現実と呼び戻すように、悪魔の脅迫が響いた。

「ひ」

呻き声が上がった。

結城は棍棒を背後に背負う。

「あ……ああ……」

恐怖の喚きと共に誰かが武器を下ろした。

威嚇の一撃が即座に効いてきた、ならばこれから先は素手で十分だ。

「ま……待ってくれ……」

命乞いか？　だが遅い、今更逃げても、追いついて捕まえて骨を折って心を砕いて薙り倒してやる。

人の懇切丁寧な助言は初めから聞くものだ、生意気に粹がって、今まで好き勝手暴れてきたツケを払って貰おう。

「貴様らには、トラウマが必要だ」

/
/

数分後、事務所の前へと辿り着いた番屋の警備員達は見た。通りの奥から響いた二度の破碎音の後、続いて彼らの耳に届いたのは悲鳴だけだった。

喚き声、呻き声、泣き声、叫び声、肉体の痛みよりも、精神的苦痛が生者に断末魔を上げさせる。

「お、お、願いだあ……だ、だすけてくれええ!!」

誰かが自分達の前で、頭を垂れては助けを求める。そのような人間は様々だ。

両足を曲げられ、這い蹲ることしか赦されない者。

「ぐあ、ごうつ、があ、ぶ……っ!!」

顎を砕かれ、言葉を奪われた者。

「あ、ああ、ああああああ——！！！！」

心を折られ、狂った者。

そして、

「おい、其処の虫けら、誰が休んでいいと言った？ まだ御仕置きは終わってねえぞ」

「ひいひい！！？ や、やめでくれええええええええええ！！！！」

黒服の魔人が、彼らの襟首を掴んでは引き摺り、投げ飛ばし、殴り続ける。そしてまた誰かが逃げようとしては、彼に捕まってまた繰り返す。百人以上の暴力団が宙を舞い、壁や地面に叩きつけられては血を流し、新たな惨響を生んだ。

圧倒的な、一方的な蹂躪だ。暴力以前に、局地的天災が降臨したかのようなのだ。

その惨劇に、皆が息を飲み、佇み、無言になり、ただただ全てが終わるのを待っていた。

/ /

浅草地下階層で血の制裁が行われている中、時を同じくして、品川方面では三年梅組の生徒が体育の授業を終えて教導院へと戻る途中である。

表層部の市場街大通りから多摩に向けて、種族雑多な一団は賑やかな雰囲気で雑談しながら、担任の女教師を筆頭に帰り道を歩いている。

「にしても結城さん、結局来ませんでしたね？」

誰かに向けたものでもない質問を作ったのは、眼鏡を掛けた小柄な従士少女アデーレだった。

彼女は上目で首を傾げ、その質問に黒い軽装甲ジャージを着た担任のオリオトライが、肩越しに視線を寄越して言った。

「ああ、結城ならさつき、村山の戸塚さんが連絡寄越してくれたわよ。なんかこつちと同じで、浅草を陣取っているヤクザ張り倒しに行ったって」

「授業サボったんじゃないんですか？」

「サボってるわよ。だから暇なところを番屋の手伝いに駆り出され
たんでしょね。まあ、アイツは出席点数足りてるから、授業の代
わりに役職の責務を果たすのも良いかもね」

笑ったようなオリオトライの返事に、皆がうーん、と唸った。

そして今度は忍者帽子を被った覆面の少年、点蔵が手を顎に当てて
言う。

「しかし……、浅草のヤクザで御座るか。大丈夫で御座るうか？」

「心配するだけ無駄よ。せいぜい殺されないように、ヤクザ達を祈
って上げなさい」

オリオトライの言葉に、皆が一様に後ろを振り向いた。

視線の先には、一人の少女がいる。長身で長い黒髪、両目の色が異
なるのは浅間・智。武蔵内神社の主社、浅間神社の跡取り娘は皆の

動きに身を引いて、

「な、なんですか？」

「いや、お祈りといえは浅間の仕事だろ？ 幼馴染の黒く淀んだサ
デイズムを抜ってあげろよ」

「何時も俺達にだけズドンしてるのがいけねえんだよ、だから結城
が授業サボってヤクザに八つ当たりなんかするんだ」

「やっぱり日頃の役員生活でオッパイ成分が足りてないのか、その
辺どうにかしろよ、射殺巫女」

「なんか最後、非常に関係ない台詞出てましたけど、とりあえずズ
ドンしときますか？」

青筋立てながら弓を構えた浅間に、皆が同じタイミングで土下座を
した。

色々と愉快的その光景に、オリオトライは溜息を吐いて、

「皆、浅間をからかうのもその辺にしときなさい。浅間も、巫女が人を撃つちゃ駄目でしょ？」

「え？ あ、はい、そうですね……、巫女としては邪念を祓うのも仕事の一環ですし、ズドン気持ち良いですし、結城君もクラスの連中にやるなら容赦はいらないと言っていましたし……」

「おいおい、真ん中辺りから本音しか出てねよ、このヨゴレ巫女」

うるさいですね、と浅間が皆を睨んで黙らせる。対してオリオトライは苦笑し、視線を浅草の方へと向けた。

「東といい、ミリアムといい、正純といい、どうしてうちのまともな人間は揃いに揃って欠席かねえ。——武蔵はもうじき三河に到着するし、結城はどうするのか」

遠くで、破碎音が小さく響いた。

その音にオリオトライは息を吐く。

「無茶してなきゃいいけど」

/
/

「おじちゃんとしては、もうちょっと手加減して欲しいんだけどなあ」

溜息交じりの言葉を作り、戸塚は空き地の脇で目の前の惨状を見渡していた。

半壊したヤクザの事務所、地面を斑に染めた血の色、貨物の上や壁の穴、路上や建物の上に引っ掛かつては倒れている者達。それを番屋の隊員達が担架で運んで治療し、病院に送って行く。この様子だと手錠はいらないだろう、どうせ傷で逃げることも出来はしない。

「ちゃんと手加減してますよ？ 殺してないじゃないですか」

「物騒で極端な基準だな、おい。もう巨人族以外にお前と殴り合える奴なんていねえんじゃないの？」

「戸塚さん、真喜子のことを忘れてません？ アレくらい物騒なゴリラがいるんですから、オレだけ人間捨てたようなこと言わないで下さい」

「モンスターやってるところは否定しないんだ……」

半目で汗を掻く戸塚に、隣りに立つ結城は気にしない。

作業を続ける隊員達の姿を見ている彼に、不意に前から声が来た。

「何処の台風が通りかかったかと思えば、相変わらず化け物やってるねえ、ユツキー」

晴れやかな女性の声に、結城は何時もの半眼で視線を向けた。

その先に立っているのは、自分より背が少し低い、桜色の長髪を持った女だ。軽装甲で纏めた番屋の制服を着た彼女は、上目遣いで結城の顔を覗き込み、笑みを作る。

見知った女性の姿に、結城は眉を顰め、

「どうしてこの女がここにいますか？ 戸塚さん」

「おいおい、可憐で愛しの先輩に対して、その物言いは良くないぞ、元副長補佐」

「可憐って誰のことだ？……」

「なんだ？ 鞠禰^{まりね}。お前、結城と知り合いなのか？」

戸塚の質問に、桜髪の女性、鞠禰はうんうんと頷いた。

「この子、私が教導院で副長やってたときの補佐役で、二年下の後輩だったんだよー。私が卒業してからは臨時相談役に職変わりして、今ではあちこちで顔を出してるんだよねー？」

「オレに話を振るな。つかなんでマリが番屋で働いている？ やっぱリアレか？ 暴れ足りないか？」

「私をアンタみたいなバトルマニアと一緒にしないでよ。番屋では内勤担当だから戦わないし、でもたまには手伝いもするけどね」

「あ、そう、じゃっ、オレ帰るわ」

「ちょっと待ちなさいよー。久しぶりに会ったんだから、元パートナ―として色々話すこととか有るんじゃないの？」

回れ右の結城の右腕を、鞠襦は抱きしめるように掴み取る。それに対して結城は舌打ちしてから、邪険な表情を彼女に向ける。

彼は空いた左手で髪を掻き、

「あのな、オレはこれから用事があるんで、構って貰いたいなら他をあたれ、今はノーサンキューだ。つか腕を谷間に埋めるな、年頃の女性がけしからん」

「おやおや？ 氣遣ってくれてるの？ お姉さん嬉しいなあ。ほれほれ、こんなのがいい？」

「この淫乱ピンクが、張り倒してやろうか……」

先程より密着してくる鞠襏に、結城はこめかみに青筋を立てながら拳骨を掲げる。

その動きに鞠襏は気にせず、笑みのままで言う。

「まあまあ、冗談だよ。可愛い後輩に会えてちよつといい気になってみただけ、ユッキーには既にお似合いの幼馴染がいるもんねー」

「ばっ！ 智とはそう言う関係じゃない……！」

「あれー、そうなの？ おかしいなあー、ムムム……」

「何がムムムだ……」

首を傾げる鞠襏に、結城は強引に腕を剥す。

そして彼は背後に背負う長棒を担ぎ直し、今度こそ現場を離れようとする。

「もう行くの？ 少しは見物して行ってもいいのに」

「午後に正純と一緒に酒井学長を三河まで送るんだ。その前に学長を迎えに行かなければならない」

「正純って、今の副会長だよな？ 去年に武蔵へ転校して来たと聞
いてるけど」

「その正純だ。今の総長連合には副長がいないから、オレが代表に
選ばれた。行つてすぐ帰るといふ気楽な仕事だが、形だけでも誰か
がやらなければいけないからな」

「ふーん。昔に比べて様になって来たじゃない。いいぞ、ユッキー、
格好いい」

何を訳の解らんことを、と結城が呟いた。

そして彼は市場街へと向かう道へと進み、その後姿を、今度は戸塚
が呼びかける。

「結城！ 今回は助かったが、次は病院送らないで済む程度で頼む
！！ 医者に一々説明するのも面倒なんぞな！！」

言葉に、結城は軽く手を振った。表層部へと向かう道程を歩き、そして外では、既に空が白く染まっている。

農村などの生活地域上空を通る武蔵が、情報遮断ステルス航行へと入ったのだ。それが示す意味はたった一つ。もうじき、次の目的地である極東代表国・三河へと到着する。

そしてそれは、この先の世界に掲げる、絢麗な宴の始まりの合図でもあった。

設定補足&前回との変更点（ネタバレ少々）

第二話投稿前の、本作に対する説明です。

ネタバレ要素があるため、見なくても構いませんが、見た方がキャラクターに対して理解し易い部分があります。原作や葵三葉を読んでいる方が見たら解らない部分もありますが、余り気にする必要はありません。

で、先ずは主人公から…

●結城・XX

皆さんご存知の主人公。愛称はユッキー。字名は”酔姫^{すいき}／鬼”。実況通神での名前は酒姫^{さけひめ}。前回と比べてやや好戦的になっているが、本質的に変わりはない。

外見：男女共に取れる中性的な風貌、女顔とも言う。可愛い、綺麗と言うよりは凜々しい印象。三つ編みの黒長髪で青い瞳、吊り上った半眼が特徴。身長はやや高め、瘦躯で華奢だが、貧弱なイメージは無い。女装フラグ……。

人間関係：馬鹿姉弟、アサマチとは幼馴染。正純とは転校当初から世話をしていたため、他の連中より親しい。外道クラスの一員としては、物理的で一番ぶつ飛んでる人。ゆえに梅組（99%は某全裸馬鹿）のストッパー役としての役割を働いている。大部分の級友

と同じく、小等部からの古参メンバーだが、古参の中では新参扱い。役職上、武蔵の重要機関に顔が知られており、外交・観光を担当する二番艦（村山、多摩）ではそれなりに有名人。クラスの騒ぎに対して心労が絶えない後片付け役の一人であるため、似たようなポジションである正純や里見・義康、守銭奴コンビや麻呂とは仲が良い。ちなみに人間的に相性が悪いのは立花嫁や毛利・輝元。そしてアサマチや喜美、アンヌ・ドートリツシュのような保護者には頭が上がらない。

ストライクフッカー

戦種：近接武術師。基本的には体術や武器による近接戦闘を好むが、集団戦・遠距離戦もそつなくこなす。葵三葉の渡る苦悩と違って、今回はスピードファイターからマルチアタッカーに変更。基本ポテンシャルは一言で言うならば、某第四次聖。戦争での黒ファンと同等。体術・柔術・剣術・槍術・棒術・忍術・手裏剣など、武芸全般を修めた、所謂達人モンスター。経験と技を至上とし、チート的な能力が無い分、安易な小手先は通じないが、技量重視の武者の例に漏れず、性能が自分より上の相手は苦手。例として無敵能力を持つルイ・エクシヴ、自分より実戦経験の多い本多・忠勝など。

術式1（ネタバレ）：契約しているのは浅間神社主祭神の配祀であるオオヤマツミ。山海の神、酒神として信仰されているオオヤマツミの酒の力を体現し、『酔い（＝狂い、酩酊、極度な集中）』を奉納することによって人間大の器で天変地異の破壊力を生み出すことが出来る（片手で魔神族を軽々持ち上げるなどがその例）。酒は古来より国家の重要な祝祭において、神に捧げる神聖な飲み物であり、中国でも殷代で製造された青銅器の多くは酒器である。神道でも身を清め、神との一体感を高めるために酒（＝お神酒）を飲む事はある（wikipediaより抜粋）。オオヤマツミとの上位契

約は極度な集中力、或いは興奮、高揚状態が高ければ高いほど、強力な力を発揮するが、限界に達した精神は人を錯乱させ、狂気を生むため、術式の制御には理性と本能の絶妙なバランスが必要。なお、奉納に必要な『酔い』は敵味方の精神状態も含まれているため、乱戦では双方の士気が高いほど加護の力も増す（基本的に神は祭り好きのため、尚且つオオヤマツミは武神・軍神としても信仰されているからである）。

術式2：神社の基本術式である楔系統の術。アサマチが普段から使用しているものを近接戦に特化したもの。メジャーでシンプルだが安価で安定性が高く、障壁・結界破りや対魔・対霊的加護など、汎用性は高い。結城の場合、練度はアサマチに及ばないが、酒神の術式と併用して出力と効果、そして有効範囲を強化することが出来る。これによって武蔵のメインイージスシステム二号機へと昇格。

武器：十束剣、及び布に包まれた二メートル長の棍棒。結城家が自作した神格武装だが駆動能力は封印中、今は強固な一般武装として機能している。剣と棍棒はセットであるため、二つで一つの武装である。

(↑)

解らない人、少し勘違いしている人がいるようなので少し説明。

十束剣の十束は長さの単位で、『拳10つ分の幅の長さを持つ剣』という意味で、一つの剣の固有の名称ではなく、長剣の一般名詞として使われています。

境ホラの前作である終わりのクロニクルでは十拳^{とつか}という同名の武器が登場していますが、本作における十束剣とは一切関係がありません。

(一)

特技：一人暮らしであるため家事全般は得意。及び契約している神が酒神であるため、奉納の一環として酒量が異次元クラスなまでに高い。

その他：結城の正体について念のため説明。結城は襲名者ではなく、あくまで某史実人物をモチーフとした同姓同名のオリジナルキャラクターだけです。この先原作で同じ名前のキャラクターが登場しても、本作品では違う方向で解釈して行きますので、御諒承下さい。

次。一部原作キャラの、本作での主人公との関係と立ち位置。

●浅間・智：巨乳ヨゴレ巫女少女アサマチ。原作ではトリー依存症患者で側室候補の一人。本作では結城の介入で好意のベクトルが主人公向けに。ヒロイン一号。

● 本多・正純：ヒロイン二号。本作での結城依存症患者。片思いだが自覚が無く、ある意味第二主人公。

● 葵・トリー：原作主人公。本作では少しだけまとも（？）なキャラ。ホライゾンの死と自殺未遂の件で結城に負い目を感じている。陰で結城が武蔵に居続けられる要因を十年間作り続けてきた人物。

——ヒロインじゃないよ？

● 葵・喜美：賢姉。結城の理解者兼天敵一号。馬鹿と一匹狼な二人の弟を温かい目で見守る（？）エロスの代弁者。基本原作同様。

● ホライゾン・アリアダスト：ホラ子。葵三葉を読んだ方々なら解る、結城と最も因縁深い人物。ホラ子救出篇以降の結城との遣り取りが鍵。

● 本多・二代：まだ書いてもないのにパートナーフラグがビンビン立っている侍娘。ステレオ本多をハーレム要員にしろと言ったその君、ちよつと廊下で土下座して来い。

● 立花夫妻：葵三葉でライバルフラグが確定した二人。主に立花嫁アルマダ海戦後に仲間になるため、所謂一面ボス扱いという可哀想な二人。——虐めじゃないよ？

● 酒井・忠次：左遷男。結城の恩人であり、被監護者。結城と武蔵

さんの気苦労要素の一人。何気に結城の切り札解放に役立つ人物。

● 五大頂：結城と因縁深い魔境軍団、ボスフラグ確定。

● ルイ・エクシヴ＆毛利・輝元：ラスボス予定キャラ。物理的性格的にも結城と相性が最悪な二人。歴史再現上、必ず敵対するキャラ。

● アンヌ・ドートリッシュ：原作では惜しい人。結城の本気を促すおかんキャラその一。

以上、後半辺りから訳がわからない感じですが、今後の予定とか含めた説明（？）です。

質問があつたら感想欄に書いてください。時間が有ればお答えします。

第二話　騒がしい昼休み

side　暴れた後の虚しさ（配点：相談役）

時刻は四時限目の授業が終わる前、日の光が人々の真上に登った中で、オレは空を見上げた。

場所は奥多摩表層部。艦首の墓地へと渡る道程の上、ステルス航行下の、仮初の白い空で、武蔵は三河に向けて飛ぶ。時間としては一年。この広大で小さい神州を一周し、再び自分達はこの場所に帰ってきた。

自分達の居場所である、この武蔵を支配する者がいる土地へ。

……松平・元信……

極東代表国・三河の当主にして、実質的な極東の国主でもある男。他国の極東居留地が、そのまま他国の暫定支配下に置かれた今、聖連に唯一認められた独立領地である武蔵の所有者でもある彼は、しかしその正体は聖連の極東管理における傀儡政権の権化に過ぎない。

十年前、聖連に半脱退したP・A・ODAとの正式同盟を結んだ三河は、聖連やP・A・ODAとも鎖国状態となり、家臣団や住民の人払いを含め、P・A・ODAへの献上物として、中心部である名古屋に大型地脈炉である”新名古屋城”の建造等という国策により、

今では三河は地脈の乱れによる怪異の多発によって天外魔境と化している。

その場所に、オレは午後に降りることとなっているが、今年も多分、名古屋には入れないだろう。

自分は、生まれが少々特別な人間だ。訳有って、三河中心地である名古屋に足を踏み入れることが赦されない。以前にも何度か三河に交渉して、どうにか名古屋に入れないのかと頼んでみたが、一度も許可が通ったことはなかった。

今年は、酒井学長の三河時代の旧友が、十年ぶりに連絡を寄越したのを契機に、番屋への書類手続きと護衛を兼ねて、オレと正純が行うこととなったが、それでも過去の例に漏れず、三河郊外への同伴のみとなった。

「……ちっ」

思わず舌打ちする。待ちに待っていたクリスマスプレゼントが前にあり、ワクワクした気持ちで箱を開けてみれば、中身が空っぽであるような喪失感だ。よく思えば、オレはずっとそんな期待と空虚の狭間で行き渡っている。昔、思い出したくも無い思い出の中で、子供頃の自分は後悔と失意の最中にいた。それは今でも自分の中にあるもので、たとえ十年の時を経ても、その感情の苛烈は治まることは無い。

折り合いを付けられずに、この心は現在と過去を二分することで、その苦痛を耐えてきた。その切欠もまた、自分にとっては思い出したくも無いものだが、その御蔭で今の自分がいると思うと、矛盾した気持ちにもなる。

逃げていた。それと同時に向き合いたい気持ちもある。そのために、オレは名古屋にいかねばならないというのに……

「……結城？」

「ん？」

呼び声に、空を仰いだ視線を前へと向ける。周りをよく見ると、何時の間にか墓地の方へと辿り着いていた。走馬灯よろしく、嫌な赤色の記憶に浸っていた意識が、白天に照らされた死者の庭園によってようやく現実へと引き戻された。そして同時に、コンマの差を経て、オレは縦列に並ぶ墓標の中で見知った顔を見つけた。

その瞬間に、自分の息が詰まるのを自覚する。

目の前に立つ人物は二人。一人は男子制服を着込んだ小柄な黒長髪。子供のようないけなさの残る顔立ちでオレを見るのは、午後の予定に同伴する副会長の正純だ。

しかし問題なのはもう一人。

正純の隣に立つのは白い長髪と人工生態パーツで身を包んだ自動人形の少女。無表情な顔の下で、こちらを見る青い瞳に、オレの思考にノイズが走った。

どうしてだ？　今の自分には、自動人形がまったく違う人間に見えるてくる。

スラリとした黒い長髪と、宝石のような青瞳。透き通るような肌を持つのは、今とは姿形の違う幼い少女。顔立ちが自分と何処か似ているのは、昔の自分か、それとも今まで逃げてきた後悔か。

ざり、砂を踏むような感触が脳に響く。何処か悲しいような少女の表情に、熱い汗が首筋をなぞる。やめる、やめてくれ、そのような顔でオレを見るな。懺悔に似た悲哀と嫌気が、無自覚に暴れまわる。二分した自分を、また一つに纏めてしまうような感覚に、オレは自己のアイデンティティーを見失いそうになる。

しかし、

「どうかしたのですか？　結城様」

他の誰でもない、自動人形の声に、オレは我に返った。

ノイズだらけの世界に色が走り、五感が摂取する情報は正常だ。やばい、まさか白昼夢を見てしまうとは。目の前で、P-01sが首

を傾げており、その横で正純が心配そうな目線でオレを見ている。
気付けば、汗を流しているのは気のせいではない。

「大丈夫か？ 結城。顔色が悪いぞ？」

「あ、ああ、平気だ。少し日を当たり過ぎたようだ」

「結城様。よく日向ぼっこをしておられるようですね？ 夏も近い
のですから、身体にお気を付け下さい」

言葉と共に、自動人形ことP・O1sが空を見た。

その動きに、オレも正純も釣られて上を見る。すると視線の先で、
空が裂けた。ステルス航行の白い空が、カーテンのように左右に広
がり、その上で、青い色が一気に周囲を覆う。

情報遮断ステルス航行が解除された。それが意味することは一つ。
武蔵が三河に到着するのだ。

「もうすぐ三河か。——あれから一年、また色々と変わっている
だろう」

感慨めいた正純の言葉が響く。コイツは元々三河の住人だ、一年前に転校してきたのだから、そういう気持ちがあるのも無理も無い。対して自分には、そのような懐古的な気持ちや居場所も無い。武蔵で自己完結している身にとっては、この小さくも巨大な船だけが全てなのかもしれない。此処にいる住民の中にも、武蔵で人生の全てを歩き終えるという考えを持つ奴がいるかもしれない。

自由な鳥籠だ。

矛盾した言い方だが、こう言う言葉が似合っているとオレは思う。オレは武蔵生まれの人間ではないから、そういう考えに理解は出来ても、共感は出来ない。

嘗ての自分と同じように、武蔵を通過点として、また別の何処かへと去ってしまうという気持ちもある。今までがそうだったし、これからそうなるもおかしくはない。羽を休める時間が早すぎて、つい十年も寛いでしまっただけなのかもしれない。本当の自分には、ただ其処にいて良いだけの居場所なんてないのに。

「……」

哀愁だ。昔のことを考えると、つい気弱になってしまふ。悪い癖だ
と思い、しかし追い討ちをかけるように、それが来た。

頭上。奥多摩艦首の前方、中央前艦武蔵野の上空を抜けるように出てくる影がある。準バハムート級の武蔵と比べたら赤子みたいな大きさを持つのは、一隻の航空客船だ。

客船は非戦闘状態下の空域では、規則違反になる高さで武蔵と擦れ違うような操鑑を行っている。普段なら撃墜や警告が入ってもおかしくないのだが、その行動に武蔵側からの放送がないのは、

「……三つ葉葵の紋章」

陽の逆光の中、客船の側面に暗くも自己主張しているのは、三河松平家の家紋だ。つまりそれは、

「あの船に、元信公が乗っているのか!？」

正純の言葉に、オレは心の中で頷く。

松平・元信は、P・A・ODAとの正式同盟を結んでから、三河の中立的立場を証明するために、武蔵への乗艦を聖連に禁じられている。

前に武蔵に降りたのは十年前、武蔵が改修される直前のことだ。今

こうやって客船で此処に来るのは、あの男のサービス精神に基づいた御出迎えだ。

そして、

『——やあ、久しぶりだ武蔵の諸君。先生の顔を憶えているかい？』

武蔵全体に、男の声が響いた。

外部拡声器から作られるそれと同時に、目の前の空に巨大な鳥居型の表示枠が展開される。同じ状況は艦内のあらゆる場所で起きており、そして誰もがその光景に目を奪われているだろう。

しかし、

『毎度毎度、私が、——三河の当主、松平・元信だ。先生と呼んでくれて結構だとも』

画面の中、眼鏡を掛け、学帽を被った男の姿に、オレは背を向けた。

/

/

side 未熟者の空回り（配点：副会長）

斑な雲に飾られた空の下で、放送が流されている。三河松平の家紋を持つ客船から展開されている表示枠の前に、私は極東の主である男の声を聞いていた。

『——として、聖連の指示により、武蔵住人は三河に降りることが出来ない……』

話の内容は、今回の三河貿易に関する注意などだ。相変わらず、三河に関する現状の説明はなく、それが当然と言えば当然だとも思う。

『だから皆、社の地脈通神やコネクションを使って三河と交流して欲しい。出来れば先生も知りたい。君達がどんな生活をしているかと、これからどうしたいのか……』

元信公の言葉が続く中で、不意に、背後で動きがあった。砂埃の覆いかぶさった地面を擦るような音と共に、私の背後にいた結城が背を見せた。

「どうしたんだ？ 結城、三河当主の放送だぞ？ 見ないのか？」

「いいんだよ。——武蔵全体でやっている放送だ、見なくても耳には届く」

それはそうだが、何やら様子がおかしいな。

目の前の男、武蔵の臨時相談役である結城と私は、私が転校当時の知り合いだ。クラスの皆との付き合いが短い中、どうしてか、この男だけとは普通に接してられる。

去年の生徒会選挙で自分が副会長に任命され、会長が総長を兼任している葵・トリーに立候補された中で、自分は周りと距離を置いてしまっている。私は武蔵に来て日が浅く、より武蔵を理解している彼が会長に選ばれたのは致し方ないことだが、芸人気質な葵の言動は人々の支持を得ても、それは実務的なものではない。

アイドル人気のような、聖連の暫定支配下に対する諦めのような感覚に、私は周囲との距離感を憶えているのかもしれない。それが祟って、私は学費を稼ぐためのバイトと、副会長の仕事に漬けっぱな

しでいた。付き合い方の差が広がっていく中で、しかし結城だけは、何時も通りに接してくれていた。

よく考えれば、この武蔵で友人と言えるのは、彼しかないだろう。だから、

「どうかしたのか？ さつきから様子がおかしいが……」

「否……」

後姿の結城の返事に、私は彼の表情が見えない。しかし低い声から聞くには、気分が優れないのは確かだろう。

参ったな、普段は自分から世話になっている分、逆の立場になると気遣いが出来ていない。これでは友人失格なのではないのか？ そしてそんな自分の悩みに対して、元信公の放送は御構い無くに続ける。

『夜に、三河の方を見てみるといい。ちよつとした花火を用意しているからね。では——、今日の授業はまずこれまで！—』

言葉と共に、通神が消えた。

そのことに、結城が一瞬だけ視線を空に向けたのを見逃さなかった。どうやら、放送か、元信公のことが気になっているのかもしれない。しかしここでそれを確かめるのは果たして正しい判断か、そう考えている中で、結城は顔を私の方に向けた。

こちらを凝視し、眉を浅く顰めた彼の表情に、私は思わず緊張した。少女然とした整った容姿にドキリとした自分の気持ちは悪くないよな？　ともあれ、何事かと思い、とりあえず質問を試みたが、

「な、なんだ？」

「あれ……」

指を私の背後に指すその動きに、私は遅れて後ろを振り向いた。

そして視線の先、通りの脇に立っているP - 01sに、私の目は固定された。当然だ、頭上の空を通り過ぎる客船に向かって、こちらに背を向いているP - 01sが手を振っているのだ。

その動きは客船が艦首を三河の方に向け、帰途への道を取るまで止まらない。思わずえ？　という疑問詞を作り、私は好奇心のあまり聞いた。

「お上がりの観光客のようなことをするんだな」

「Jud、船の方から、こちらに手を振っている方がおられましたので」

艦橋の方からだろう。自分には見えていなかったが、P-01sも相手が誰だか解らないだろう。自動人形は人の助けになることを行動原理としているため、それを基準に手を振っているのかもしれない。

しかし、

「こちらを見て、笑っていました」

その言葉に、背後で結城が遠ざかっていく音がした。しまった、どうやら逃げられる隙を作られてしまったようだ。

慌てて振り返ると、既に彼は木陰通りの方へと向かっている。そして同時に、教導院の方角から鐘の音が響いた。

四時限目を終え、昼休みに入る音に、私はただ、友人の背中を見送ることしか出来なかった。

/ /

side 白昼下の告白会議（配点：馬鹿）

「何やってんだ？ お前等」

昼休みの最中、既に三河の武蔵専用陸港に停泊した武蔵の上、奥多摩艦首の墓地で正純とP・O・I・Sと別れた結城は、今、目の前にある光景に疑問を作った。

場所はアリアダスト教導院前、校舎二階へと続く橋の下、一番下の階にある階段で、見覚えのある面々が集っている。

笑ったような目と茶色の髪を持った少年を中心に行っているのは、三年梅組の生徒達だ。クラスの大半が生徒会と総長連合の役員である彼らは、リーダーである総長兼生徒会長の葵・トリーを筆頭に、ある議題を進めていた。

それは、

「ああ？ 見て解らねえのかよ、結城！ 俺の心のブラザーであるお前とは電波で繋がっていると思っていたのに、悲しすぎるぜ！」

「オレが何時電波系になってお前のブラザーになったのかは全く身に覚えが無いが、とにかく説明しろ」

結城の素っ気無い促しに、茶髪の少年、葵・トーリが額に手を当てて、あちゃー、という感嘆と共に言った。

「そうかそうか、聞いてくれるのか、マイブラザー。——ならば単刀直入に言おう、実は俺、明日、コクリに行くんだ」

「よし解った。死刑判決だ。罪状はうら若き乙女の人生に対する物理的脅威と精神的脅迫だ。つまり死ね」

「おいおいおい、まだ告白が成功すると決まった訳じゃねえのに、何そのラスボス発言。それに裁判はウツキーの担当だろ？」

やかましい、と結城が吐き捨てる。

彼はおもむろに長棒を引き抜き、肩へと担ぐ。その動きに周囲五メートル圏内にいる生徒全員が十メートル程退却し、木々や遮蔽物に身を隠す。

それに対して結城は気にせず、ムスツとした表情でトリーに言った。

「お前の悪巧みは計画段階から周りに迷惑を掛けているんだよ。ことが起きたときには既に遅い。――一応冥福は祈ってやるから、その危険な告白を受ける相手は何処の誰だ？ お前が死んだときに自分のせいだと自責させないように、オレが代わりに説明してやる。」
「貴女の御蔭で武蔵の日常が守られました」とな

「あれ？　なんか朝から本気モード出してね？　ちよつとまって、人生ロード。おかしいな、俺何処で選択肢間違えたんだ？　結城の攻略は一番最後に取っておく積もりだったんだが……」

「よしっ、決めた、今此処で死なす！！　現代アート風味な愉快なオブジェに変えてやる！！　ピンク色のクリームムース宜しくみたいな奴に！！」

両腕で棍棒を頭上に掲げた結城を、皆が一斉に押さえつける。華奢

な体格からは想像できない怪力で暴れる彼を前に、トーリが愉快的な表情で言った。

「まあまあ、落ち着けよ結城。別に迷惑になることは無いと思うぜ？　なにせお前も知っている相手だからな」

「その台詞はこの一週間聞いた中で最もおぞましい台詞だぞ？　誰だ？　後戻りは利く相手なんだろうな？　つかトラウマにならないよな？　主に相手への」

質問に、トーリは大丈夫だって、と手を振りながら言う。

彼は少し間を置いて、息を吸い。結城に聞こえる程度で、はっきりと言った。彼が告白する相手、それは、

「ホライゾンだよ」

告げられた名前に、結城の動きが止まった。

彼は硬直し、目を見開き、しかしややあってから、掲げていた棒を下ろした。そして力の抜けた結城の動きに、皆が手を離す。対して

トーリは階段に座ったまま、ただただ笑みのまま、己の親友の動きを見ていた。

結城は目を伏せて、溜息を一つ吐く。彼は何時も通りのゆっくりとした歩調でトーリの前へと進み、軽く手をトーリの肩に乗せて、

「気の毒に、思いつきりフラれて来い」

断言された言葉に、トーリ以外の全員が地面に突っ伏した。

「おいおい！ 何で此处でお前が俺の台詞を奪うんだよ！？」

「お前もフラれること前提かい！！？」

皆のツツコミに、トーリは何処吹く風。彼は笑った目のまま、目の前の結城に溜息交じりの口調で言う。

「あのな、結城。此处は普通、新たな青春への第一歩を踏み入れる長年の幼馴染に対して、何処か助言とか、祝いの言葉を送るのが先

じゃねえの？ まあ、視聴率考えて、俺がフラれた方が面白いけど。その辺はちゃんと俺たち心で通じてるんだな！！」

「とりあえず、その愉快的舌はいらないよな？」

今度は左腰の長剣を引き抜こうとした結城を、またも皆が宥める。同時に皆がトーリを睨んで黙らせ、各々が階段に座りなおしたことで、結城を交えた会議が再び始まる。

「で？ 馬鹿が人の身内に手を出すのは非常に勘弁ならないが、トーリに恥をかかせるための準備は出来ているのか？ 書記のネシンバラ君。説明どうぞ」

言葉に、目の前の表示枠を操作している眼鏡少年が答える。彼は何処か詰まらなさそうな表情でズレた眼鏡を掛け直してから、結城の質問に答えた。

「議題そのものが不真面目なこの会議に、どんな期待を込められると思う？ 結城君」

「つまり点で駄目だと言うことだな。でも少しは何かやっているんだろう？ 三河に降りる前に、少しはオレに暇潰しのネタとかを寄せよ」

「結城君、色んな意味で最悪だよな」

二人の会話に、横で誰かが手を挙げた。

忍者帽子に覆面という格好をしたのは、”第一特務 点蔵・クロスユナイト”という腕章をつけた少年だ。結城が視線を寄越した先で、点蔵は先ほどの結城の質問について説明する。

「結城殿。実は先ほど、告白の練習として、”手紙作戦”を提案したで御座る」

「……手紙作戦って、あれか？ ラブレターか？」

問いに、点蔵はJud・と答えた。

そして、

「事前準備として、とにかくどうして相手のことが好きかを書き込むもので御座る。直接口で告白してトチるよりも、その方が双方に恥をかかせずに、迷惑もかけないかと」

「やっぱり常識人は貴重な要素だな、生贄的な意味で。――で？その問題の手紙は何処に？」

「何か今さらりと物騒な発言が……」

気にするな、と結城が言う。そして同時に、反対側にいるトリーが手元にあるノートを結城に見せた。

中身は、先ほど言っていた手紙作戦におけるトリーが書いた内容だが、

「頭悪い内容だな。なんだ？ この後半辺りからのオッパイ論議は？ まあ、馬鹿だから仕方が無いか」

「そうだろ！？ 結城もそう思うだろ？！ こんな好き嫌いな感情表現するのは上手く言葉に出来ないじゃん！！？」

「論点がズレてるが、まあいいか。——しかし確かに、これは初心者には難易度が高いな。点蔵は失敗経験豊富だから好として……」

「ちよっ！？　さらりと痛いこと言っただで御座るよ、この御仁！！
最悪で御座るよ！！」

「うつせーなあ。この前、テメエの告白の準備に一緒に一夜漬けになって、結局お前がフラれたことでこっちの労働力が損になったことを忘れるなよ？　お前、貸し一つな？」

告げられた事実には、点蔵が地面に跪く。それを皆が無視し、しかし今度は、結城とトーリの後ろから声が響いた。茶色の長い髪を靡かせているのは、“葵・喜美”の名札をつけた少女だ。

「フフ、そんなこと言っで。じゃあ、結城。そういう貴方はこのようなことに對して経験とかは？　可愛い顔で偉そうなこと言っで、それで何の答えも無かったら駄目じゃない？」

喜美の言葉に、皆が結城を見た。

そしてやや離れた場所。近くを通る生徒の間で、ひそひそと声が届いてくる。

「結城先輩の色恋話！？ やだ、私超知りたい」

「武蔵で貴重なクーデレキャラの恥ずかしい話……！ 去年の女装ネタは今でも伝説だと言うのに！！」

「酒姫まじ戻って来い！！」

話題に、結城が鋭い眼光を飛ばす。それだけで生徒達はそそくさと校庭を通り過ぎて行き、同時に喜美が背後からノートとペンを結城に渡す。

「とりあえず、愚弟の道標として何か書いて見たら？ 何でもいいから」

「は？ オレ、そんな相手はいないんだけどなあ……」

言葉に、背後の校舎三階の窓で動きがあった。

茶道部の活動に使われている教室の窓から、巫女少女の浅間が思いつきり手を振っている。ジェスチャーからして、”私！ 私が練習相手が良いです！！”とか言っているようだが、背を向けている結城には当然伝わらない。

しかし浅間の動きに気付いた皆の内、黒い三角帽子を被った金色の六枚翼少女が代わりに言う。”第三特務 マルゴット・ナイト”の腕章をつけた彼女は、笑みの顔で結城に提案する。

「ナイちゃん思うに、アサマチとかどう？ ユツキーとは幼馴染で、日頃の感謝を含めて一言とか？」

言葉に、校舎側で浅間が親指を立てた、対して結城はと言うと、

「え？ 智？ ——うーん、どうだろうか。智とは家族みたいで、そんな風に見たことは無かったなあ……」

校舎側で浅間が涙目で頂垂れる。しかしそんな彼女に御構い無しに、今度は黒い六枚翼、”第四特務 マルガ・ナルゼ”が言った。

「じゃあ、手始めに総長のことを書いてみたら？　その方が面白いし」

「ナルガ。お前ホモネタが欲しいだけだろ？　——でもそうだな、野郎相手には気遣いもいらないか」

●笑った顔が非常に腹立つのでどうにかして欲しい

●いい加減全裸ネタにはもう飽きたからどうにかして欲しい

●今もオレの隣りで脱ごうとしているのが鬱陶しいのでどうにかして欲しい

●e t c.....

「こんなもんか？」

「こつちも箇条書き！！？　しかもスラスラ書きまくっているで御座るよ！！」

「仕方ねえだろ？　コイツの印象がインパクト過ぎるのがいけねえんだ」

「なんか俺の告白作戦から結城の桃色話題攻防戦になっているようにだけど、結城ってそんなに俺のこと見てたんだ？ 照れるなあ」

「うん、コレ、殺意の裏返しだから」

現在進行形で全裸になろうとしている馬鹿を冷たい目線で睨む。そして結城はペン先でノートを突付き、その後ろで喜美が再び問う。

「まあ、愚弟に対する嫌味はともかく。結城、貴方も好みの女性の一人や二人くらいいるでしょう？ 妄想でもいいから、それについてのコメントくらいあっても良いじゃない？」

「お前達って本当にこう言うの好きだな。いい加減本題に戻れよ」

- ムツツリ系キャラの恥ずかしい反応が面白くて堪らない

- 自爆発言が可愛くてつい虐めたいのが堪らない

- 長着の隙間から見える谷間がエロくて目のやり場に困るのが堪らない

● e t c ……

内容に、皆が一斉に校舎側を見た。視線の先では浅間が耳を赤くして両手で顔を隠しているのが見える。そして御構い無しに、結城はペン尻で頭を掻きながら言った。

「語呂悪いな。書き直すか？」

「フッフ、流石は我らが臨時相談役ね。その無自覚なSには惚れ惚れするわ」

うーん、と唸る結城の背後で、喜美がノートとペンを取り上げる。

そして、

「つまり今の状況で、結城も愚弟も大概だということが解ったわ。
——やっぱり男は皆オパイ好きよね!!」

喜美の高らかな発言の横で、御広敷が首を横に猛烈に振っているが、

誰も気にしない。

そして今度は、階段の二段下に座る巨軀が言葉を作った。強固な外殻に覆われたのは半竜のウルキアガ。彼は腕を胸の前で組みながら、結城に問う。

「なるほど、拙僧はてつきり、結城も拙僧と同じく年上粹だと思っていたが……、まさか巨乳粹だったとは誰も思っまい」

「おい、其処のトカゲ。人の人格が疑われるような発言は止せ。オレはどちらかと言うと正常な範囲での雑食だ。男は含まない」

「見境無しかよ!!」

言葉に、皆が一様に突っ込む。しかし結城はそっぽを向き、横にいるトリーに言葉を作った。

「まあ、なんだ。——改めて言うけどよ、こう言うのは気持ちの問題だろ？ お前はそれに余計なものが付いて来るから迷惑なんだ。たまにはネタとか芸風捨てて当たって来い。そうすればどうにかなる」

「おお、今日聞いた言葉の中で一番ツツコミ難いな、コレ。——
成程、余計なものは必要ない、真正面からかかれと言うことだな？」

「？　なんか微妙にズレているが、まあ、そう言うものだろう」

結城の返事に、トーリがガッツポーズをする。彼は相変わらずの笑顔で両手を結城の肩に乗せ、

「有り難う、結城！！　これで次の練習にも精が入れるぜ！！」

「？　……何のことだ？」

「モミングの練習だよ！！　明日の告白の前に、ホライゾンのオパ
ーイを疑似体験しなくちゃならねえのさ！！　なんだか近頃、ソム
リエとしての誤解が広まってんだ。キャラ立ちというのが有るだろ
う！！？」

「オレに触るな糞虫。——　つか十二分にキャラ立っているだろ。
そもそもお前はなあ……」

「——あら？ 皆さん、こんなところで何してるんですの？」

結城の言葉を遮るように、階段の上から声が響いた。皆が一様に振り向くと、校舎の入り口から二つの影がやってくる。

一つは、煙管を咥えた猫背の中年過ぎ男性。その姿に、結城が腰を上げた。彼は猫背に向き直り、その名を呼んだ。

「酒井学長……」

呼び声に、酒井が、よう、と手を挙げる。そして彼の横では、ボリウムサイズの大きい銀色の髪を持った少女がいる。獣のような黄色の瞳を持つ彼女は、”第五特務 ネイト・ミトツダイラ”という腕章を付けている。己の背丈ほどある革製バッグを担いだミトツダイラは、階段に陣取る皆を見て、首を傾げた。

その反応を余所に、横にいる酒井が結城に言う。

「そろそろ時間だ、結城。正純君は見なかったか？」

「待ち合わせは村山の昇降口だろ？ さっき墓地の方で会ったが、

多分先に行ってると思う。——で？　ナイトも一緒に降りる訳？」

尋ねられた質問に、ナイトが首を小さく横に振った。

そして、

「今回、武蔵住民は三河に降りることが出来ませんのよ？　それに松平分家を預かる騎士の私が、P・A・O・D・Aへの献上物を作る三河に行くわけがないでしょうに。酒井学長には、分家の権利関係に必要な証書を求めただけですわ」

返事に、酒井が頷いた。

そして今度は、トーリが笑みのまま酒井に問う。

「学長先生、三河に降りるのかよ？　左遷されたのによく許可が出たな」

「昔の仲間からの呼び出しでね。——あれから十年、色々変わっている处もあるだろうし、酒飲んだら直ぐに帰って来るよ。最近の三河は物騒だから、あまり寛いでいると聖連が煩いしねえ」

酒井の言葉の横で、誰かが背後から結城の肩を叩いた。

その反応に、結城が振り返ると、其処には一人の男性と少女が立っている。”会計 シロジロ・ベルトーニ”と”会計補佐 ハイディ・オーゲザヴァラー”の腕章をつけた二人の内、シロジロが結城に向けて言う。

「結城、少し頼みごとがあるのだが」

「……なんだ？」

「金を使わない程度で頼む。序でいいから、三河の流通を見てきてくれないか。——妙なことに、今年の三河は武蔵から何も買っていないかずに、売りに徹している。さっきも入港前に大量の売り込み提示が来たんだ。御蔭で貨物区画では運送業者が倉庫の取り合いをしている」

「成程。まあ、オレは郊外の方で引き戻してくるから、帰りに番屋で見てきてやるよ」

「助かる」

シロジロの礼に、結城は軽く手を振った。しかし今度は、横にいるハイデイが言葉を作る。

彼女は目の前に表示枠を展開し、一列の数字が記されたそれを結城に見せた。

それは、

「で、ここから悪いけど、とりあえずユッキーにはここに書かれた金額を予定の日付前に払って欲しいの。理由は解っているよねー」

「今朝に浅草の貨物区画を吹っ飛ばしたからな、覚悟はしているが……この数字ちよっとおかしくない？　こんなにかかるのかよ、あのオンボロ区画」

「ちゃんと色々と計算して出した値段だよ？　お金で解決できる内は、ちゃんと払って欲しいな。あとここにサインしていてね？　ユッキーが借金張り倒すのは有り得ないと思うけど、一応念のため」

色々馬鹿げた数字に、結城が眉を寄せるが、ここで難癖つけても意

味は無いと思い、素直にサイン枠に指を押した。軽快な音と共に、契約成立の文字が浮かび上がり、ハイデイが笑顔でまいどありー、と答える。

そしてその背後で、皆との会談が終わったのか、酒井が階段の方で結城を呼んだ。

「おう、結城。時間もそろそろだ。行こうか」

「ああ、解った」

先に前へと進む酒井の背後に続き、結城が足を踏み入れようとした時、またも結城を呼ぶ声がした。それは階段の方、皆の中心に座るトリーからだ。

「結城」

「なんだ？」

「頑張れよ。——名古屋には行けねえけど。お前の望みは何時か叶うと思っぜ」

その言葉に、皆が身を固くした。誰もが気遣いの視線を結城に向け、しかし結城は気を悪くした訳でもなく、何時もの感じで答えた。

「お前、何を根拠に……」

「お前の昔話は難しすぎて、俺には解んねえ。——けど、お前のことを解ってくれる人が、この武蔵にはいるだろ？ 浅間やセージユンみたいに、ちゃんとお前のことを祈ってやれる奴がいるなら、お前の望みはきっと叶うさ」

言葉に、結城は苦笑した。そしてそのまま視線を校舎の方へと向ける。開かれた三階の窓で、幼馴染の少女が微笑みでこちらを見ている。そしてそれは、目の前にいる皆も同じだ。どうやら、三河と元信の事で、皆に余計な心配をさせたようだ。

そのことに自然と結城も笑みをこぼし、ややあってからトリーに言った。

「駄目男のくせに、決まり具合だけは上等だな」

「俺は不可能だからな、だから万能なお前が、背中を押してくれるんだろ？」

「プラスマイナスで両方有能ってことか。だったら、どうにかしてでも名古屋に行かなくちゃならねえな」

言葉に、結城が振り向いた。酒井の後を追うその動きに、トリーは手を振ろうとしたが、

「あつ、そつだ。ちょっと待ってくれ」

「？ 今度は何だ？」

急な呼び掛けに、結城がまた足を止めた。

そしてトリーが何かを思い出したかのように、また言葉を作る。

「実は今夜。八時に明日の告白の前夜祭としてここで幽霊探しするんだけど、結城も来るか？」

「またお前は妙な悪巧みを……、って、幽霊探しか……。確かに近頃は末世や怪異とかで色々騒がしいから、時期的には丁度いいか」

「セージュンにも聞いて来てくれ。人数多い方が楽しいだろ？」

「目的と手段を間違えてね？ まあ、解ったよ。時間が間に合えばオレも参加するけど、正純の方は知らないぞ？」

「ああ、結構だ」

返事に、今度こそ結城は教導院を後にした。目の前で酒井が自分のことを呼んでいるのが解る。そして、徐々に遠ざかっていく彼の後姿に、トリーは笑みのまま、皆に言う。

「いよしっ！！ んじゃあ、俺も張り切って告白の練習をするぞ！
！ ネイト、さっき言った協力の話、本当に良いんだな？」

「え、ええ、勿論ですよ。——騎士として、約束を違える訳がありませんことよ」

日の下で、騒がしくなっていくクラスの動きに、誰もが思った。

何時もと同じ、変わらない朝、変わらない風景。こんな平凡で、しかし何処か違った日常が続けばいいと。

例えそれが、最後の日常を迎えるだけの静けさでも、人々はそう願わずにはいらなかった。

第二話　騒がしい昼休み（後書き）

ようやく出来ました第二話。

東辺りとか、正純辺りとか、アサマチ辺りとか色々欠けているが、これからもしゃんじゃん書いていくよ。

あと、最近奥州組が気になって仕方ありませんクロです。結城が成実や政宗と対面したらどうなることやらと、想像という名の妄想が止まりません。

では皆さん、また次回。

第三話　事後の告白

山道。武蔵から降りて、東の山系を通る回廊の上で、三河郊外に向かつて歩く人影が三つある。

横に並んで会話をしながら先に進むのは、武蔵アリアダスト教導院である副会長の本多・正純と、煙管を咥えた猫背の中年、酒井学長だ。政治や今の御時世を笑いながら語る二人の後ろでは、数歩離れた距離で、臨時相談役の結城が着いて来ている。

彼は二人の会話に混ざることなく、護衛としての責務から安全距離を保っている。用心深いとも言いが、三河に近づくに連れ、結城はどうしても気が重くなってしまう。しかしそれと同時に、気を紛らわそうと辺りを観察する中で、あることに気付いた。

下り道である山道の先、遠くに見える関所の前に待機場がある。貨物の受け取りなどを行う広場には、手続きを待っている貨車が何台か停められている。その殆どが空で、荷物を積んでおらず、それが意味することは一つしかない。

……シロジロの言う通りだな、三河からの買い付け発注がない。どういうことだ？

疑問を表情に浮かべ、眉を顰める。同じ事に気付いたのか、先を進む酒井と正純も、似たような表情をした。

そして、

「三河の”人払い”で、物資の需給が減ってきているのか？　しかしそれでは、自分達から物資を武蔵に送るのは……、結城、どう思う？」

「へ？　ああ、そうだな……」

質問されることを予想してなかったのか、結城が僅かに口籠る。その反応に正純が何処か心配そうな顔をしたが、とりあえず結城が今の問題に言葉を返した。

「まあ、どうだろうな。ただでさえ三河は鎖国状態で、武蔵や他国とも距離を置いているんだ。そういう隔絶的行動にも、国主である松平・元信の思惑があるのかもしれない」

「そうだが、しかしこれでは死ぬ前の形見分けみたいじゃないか。一方的な物資の売り込みなんて、他の関所では見たこと無いぞ？」

形見分けという言葉に、結城は自分の得物を見た。戒めとして外見を包んだ棍棒と長剣も、自分にとっては形見みたいなものだ。死に

行く者の行動や思いなんて、結城は幼い頃に嫌というほど見て来た。自分の人生には死が付き纏い、そして自分が生きてゆく中できっと誰かが死んでゆく。

正純の言葉に、結城は嫌な予感がした。武術を極める者として、勘と言うものは時に鋭く、あらゆる理屈や言語よりも真実を探り当てる。そして直感や感覚について、結城のそれは長年の修練の中で、最早術式に等しい能力を発揮している。戦闘では役立つが、今としては、その予感に外れて欲しい。

そしてそんな思いに耽っている中で、空が曇った。

思わず顔を上げると、頭上に大きな影があった。それは、

「船隊か」

東の山岳回廊の真上を、数隻の艦船が通る。そして同時に、反対側である西の空にも、一隻の巨大な白船があった。

頭上を通る艦船の二―三倍はある大きさを持つ艦を、結城は知っている。それは、

「聖連代表国、K・P・A・Italia所属。教皇総長インノケンティウスの持つ同国の旗艦、ヨルムンガンド級ガレー船”栄光丸”レイニョ・ユイト

”か。上にいるのは三征西班牙の警護艦隊だろう。旧派首領がわざわざP・A・ODAの息がかかっている三河に来るとは、やはり噂は本当か？」

「Jud、P・A・ODAが浅井攻めに集中している今を狙って、ロイズモイ・オフロ教皇総長が新型の大罪武装を無心に来たって話だな。この世に八つしかない都市破壊級個人武装。七大罪の原盤とされる人間の八想念をモチーフにした武装で、使用者は世間では”八大竜王”と呼ばれているな」

正純の説明に、結城は心中で頷いた。

先史時代。六世紀最後の旧派教皇で、問答者グレゴリウスと呼ばれていたグレゴリウス一世は、人なら誰でも持つ原初の大罪を七つに纏めた。

四世紀のエジプトの修道士、エウアグリオスが自身の著作で提示した八つの「枢要罪」、つまり今で言う八想念を原盤としているのは、ガストリマル・ヌネア罪に対する厳しさの順で暴食、淫蕩、強欲、悲嘆、憤怒、嫌気、虚フィラルジャ栄、驕り。そしてこれらの内、虚栄は驕りに含まれ、悲嘆と嫌気はオリジイ怠惰として一括された。そしてその中に嫉妬を追加して七つ。アーケディアケノド
クシアハイペリファニア
フノートス

大罪武装とは、この典故を基にして、三河中心地にある地脈炉”新名古屋城”を使って、松平・元信が開発したものだ。

十年前、P・A・ODAとの正式同盟が迫られている中で、松平・元信は聖連と敵対状態にあるP・A・ODA以外の聖連所属国に八

つの大罪武装を送り込んだ。

それらは今では各地の戦争で使用・活躍され、その原典でもある聖譜顕装を超えるアドバンテージを持っている。

人の大罪を持つて、相手の罪を思い知らせるための武装。しかし結城の目から見れば、それは人の罪を助長しているようなものだ。手段と目的が違っている。抑止力である筈の大罪武装が、何時の間にか被害そのものと化している。その上、大罪武装には必ず付いて来る噂がある。

それは……

「——大罪武装は、人間を部品に使っている、か……」

/
/

関所前の広場。歩行者優先用に区切られた歩道を進みながら、酒井は隣りと背後に着いて来る若者に言った。

彼は口に咥えた煙管を吸い、煙を吐いてから、

「二人はこれからどうする？ 正純君は書証を取ったら帰って遊んでも良いけど。結城は一緒に郊外まで行くんだよね？」

「Jud。」

酒井の問いに、二人が肯定を意味する返事を作る。しかし次の瞬間、正純が何かを思い出したように、酒井に向けて言葉を作った。

「あの、酒井学長。松平四天王だったら知っているかと思いますが、もし同じ四天王である本多・忠勝公の御息女にお会い出来たら、宜しく言うておいて下さい。私、三河では同級生だったので」

「言われて見ればいたなあ、そんな子。……まあ、会ったら代わりに言うておくよ」

「有り難う御座います」

礼に、酒井は軽く手を振った。

そして二人を余所に、結城は何時の間にか、先に関所の方へと進んでいた。

彼の後姿を前に、ふと、正純はあることを思った。

それは、

「結城は、毎年三河に降りる際、名古屋へ入る許可を申請しているようです。酒井学長は何か知っています？」

「ん？ そうだねえ。俺から言えることは少ないけど、結城は元々三河生まれの人間なんだよ」

「へ？ そうなんですか？ 私はてっきり、彼が武蔵生まれだと思っていました」

言葉に、酒井は煙管を咥えなおす。彼は関所へと入る結城の後に続き、彼に聞かれない程度の声で、正純に答えた。

「結城は、十数年前に武蔵に移住したのさ。実家が色々と訳ありで、アイツは子供の頃から武蔵で一人暮らしをして来たんだ」

「それは、初耳です。——彼、あんまり自分のこととか話さない

から……」

「そうか？ クラスの皆や王様は知っているけどね、結城の昔話。正純君は武蔵に来て日が浅いから、知らないのも無理ないけど。――まあ、正純君もこっち側に来て見れば、少しは解るかもしれないよ？」

「それは……」

言葉に、正純は首を傾げた。

酒井の言う、こっち側というのは、

「人にはそれぞれ、口では言い難いことがあるのさ。言わない限りは普通の付き合いだけど、それが笑っていえるようになって、初めて距離が縮まるものさ。俺の場合、左遷の話になるけど、その辺正純君は知ってる？」

質問に、正純は言葉を失った。酒井の言う、彼の左遷のことは、三河住人ならば誰でも知っていることだ。

それは今から十五年前の話。三河当主である松平・元信公には妻が

おらず、その下に跡取りである嫡子がいなかった。

松平・信康。後に解釈によってその名を襲名したのは、松平・元信の弟であったが、当時、魔王信長の襲名者がいないP・A・ODAとの同盟を拒んだ三河は、聖譜記述を”拡大解釈”で切り抜けようとした矢先に、P・A・ODAの武装包囲によって強引に暫定同盟を結ばされた。そのときのトラブルに対する責任問題として、三河はP・A・ODAに対する恭順の証として、弟公の自害を迫られた。

そして当時の信康公の後見人が、松平四天王の一人である酒井・忠次であり、酒井は信康公の自害を止められなかったことで、武蔵に左遷された。

資料には載っている、調べれば誰でも解ることだが。人の生き死に関することを、容易く口に出れない自分は、やはり未熟なのだろう。

そんな風に考えると、この話で疑問に思うことがある。それは酒井が言っていた結城の過去に関する話で、同時にさっき言っていた”こち側”に対する意味。

それは、

「結城の過去にも、そういう人の命が関わっているのですか？」

「どうだろうねえ。俺は結城が武蔵に移住したときに、手続きとかやってあげただけなんだけど、それ以前の結城がどのように生きて来たのかは知らないよ」

「そう、ですか……」

人の過去を詮索するのは良くないことだが、正純としては、やはり知りたい思いがある。

正純も、他人に知られたくない秘密はある。

十年前の三河の家臣団に対する人払いで、自分は襲名手術を受ける最中でそれに巻き込まれ、襲名の道を失った。しかし政治家の道を諦められない自分は、三河で勉強を続け、しかしその中で虐めや差別を受けたものだ。

苦い思い出だ。幼い頃に、父は武蔵に暫定議員として渡り、母と共に暮らす正純には、努力を続けるという道しかなかった。後に母が神隠しに遭い、一人武蔵に来た今でも、それは変わらない。

何も得られなかった喪失感に、しかし諦めきれないのは何故か。政治家を目指す自分に、同じ政治家である父は何の祝福も与えてくれなかった。

クラスの皆とも距離を置き、正純は、世界でたった一人になったような感覚を覚えた。

しかし、

「結城だけ、当たり前のように話しかけて来るんです。——」お前は賢い馬鹿だ。危なっかしくて見てられん」とか言って、何時も背中を押してくれる……」

「アレは、昔から良く出来た子だからなあ。毎年の年明けでも、浅間神社の方で手伝いをしているし。武蔵の外燃拝気貢献量もダントツで一位だ。あの献身的精神の裏では、本人としても色々と考えがあるのだろっ」

言われて見れば、正純の記憶の中で、結城が暇を得たことは殆どなかった。

臨時相談役は各生徒委員会、武蔵各機関、暫定議会と武蔵王、そして総長連合と生徒会という、武蔵の重要機関同士の橋渡し役である。

他の国では臨時相談役委員会の下で、複数人単位で活動しているそれを、結城は一人で全てこなしている。一度だけ彼の週間スケジュールを見せたことがあったが、初日を見た時点で正純は後悔した。そして同時に、その余りにもオーバーワーク気味なスケジュールに、彼の身体が持つかどうか心配した。

しかし、

「鼻で笑われましたよ。」金稼いでいるくせに行き倒れされている

お前に心配されたくない”って。それで何時も通りに仕事をこなすんですから、全く頭が上がりません」

「ああ、それ、俺も解るわ。アレって実は分身術を使ってるんじゃないかって時々思うわ。アイツ忍術の方もそこそこ使えるしねえ。ホント、こういうスペックしてるんだか」

謎だらけな友人だ。自分勝手にマイペースで、しかし迷惑にならない範囲で、他人に気遣い出来る器用な男。そして何時の間にか、正純は結城のそのような神秘性に惹かれているのかもしれない。そう考えると、余計に彼のことを知りたいと思い始める。

そして不意に、こちらの考えを読んだかのように、酒井が言葉を作った。

それは、

「まあ、結城の話は本人に聞いてみるといいけど。――さっき言ってた”こっち側”と俺の左遷についてだけど、一ついいかい？」

「え？ まあ、何ですか？」

「弟公が自害したのは政治的要因だけど、殿先生の身内のことで、

続きがあつたら、どうする?」

「続き……、ですか?」

質問に、酒井がJud・と答える。

元信公の話、それは元信公に妻と嫡子がいないと言うことで、それにどのような続きがあるというのか。思わず首を傾げそうになる正純に、酒井が間を置いてから言う。

彼は、口から煙を大きく吐いてから、

「その話、実は殿先生に、内縁の妻がいて、外に子供が居たとしたら?」

「……へ?」

告げられた言葉に、正純の思考が停止した。

話題の切り替えもそうだが、今の情報がこの場で出てくることが理解できない。そしてなによりも、いきなり聞かされた情報のスケールに、脳の処理が行けず、しかし正純は強引にも口を開いた。

「え？ そんな……。待つて下さい。もし、本当にそんな子がいたら……。——その子は今、どこで何をしているんです？ ……どうして今まで、表にでないのですか？」

「だからさあ。ここで最初の話題に戻るわけよ」

戸惑う正純に、酒井は言った。

道標ともなりうる言葉、それは、

「知りたいのなら、こっち側に来なよ。——俺、正純君が俺や結城の方に来ると、面白いと思うんだよね」

/
/

日がやや傾き始めた午後、三河北部にある専用陸港に停泊してある武蔵の上、観光・外交艦である右舷二番艦・多摩の表層部商店街は賑やかな雰囲気満ちている。

旧派首長が三河に新型大罪武装の開発を交渉しに来たこともあり、南西側の一般陸港からはK・P・A・Italiaや三征西班牙の学生達が武蔵に観光に来ている。そして武蔵の上空では、聖連の監視が一時的に解かれた中で、運送業者や航空系の者達が、模擬戦やレースを始めている。

そんな活気に満ちた船の中、商店街の大通りの上を、幾人かの少女が両手に荷物を抱え、談笑しながら歩いている。

先頭に行くのは巫女服姿の浅間で、その背後には右手が義腕の女・直政と、眼鏡を掛けた小柄な少女アデーレ、そして前髪で目を隠した鈴がついて来ている。

彼女達は明日のトーリの告白の祝い、その打ち上げに使う料理の食材を買出しに来ていた。そして皆が全身に荷物を吊るしている中、作業用の大型レンチのみを担いだ直政が、先を歩く浅間に言った。

「えらく買い込んだものだねえ。男子の方も買出しに行ってるんだから、流石にこれは買い過ぎなんじゃないさね？」

「うーん。でも、うちのクラスは結構食べる人が多いですし、主に結城君やミトがエンゲル係数の大半を占めていますから、これくらい丁度いいと思いますよ」

「ミ、ミトツダイラ、さん。よく、お肉とか、た、食べるもんね」

狼だからさね、と直政が鈴の補足に頷く。横でアデーレが苦笑し、そして続いて浅間に問うた。

「にしても、浅間さんもお疲れです。神社の仕事、今は色々大変ですよね？」

「春先は契約関係の仕事が多いですから、カウンター業務が忙しくて……例年は結城君に手伝って貰っているんですけど、今年は機関部の整備点検や議会と武威王との業務で手が貸せないらしくて」

言葉に、直政がニヤついた顔を浮かべた。

彼女は左手を顎に当てて、

「悪かったねえ、未来の夫との楽しい協働時間を奪ってしまって。埋め合わせしようか？」

「な！？ 何言ってるんですか、マサ！！」

顔を赤くした浅間に、照れなくてもいいのに、と直政が宥める。

二人の遣り取りに、横でアデーレが不思議そうな顔を浮かべながら質問した。

「相談役って、よく浅間神社で手伝いとかするんですか？」

「何？ アデーレ知らないのかい？」

傍で首を傾げるアデーレに、直政は笑みで視線を超越した。彼女の疑問に、直政は、そうさねえ、と前置きしてから答えた。

「結城は、契約している神が酒神のオオヤマツミでね。オオヤマツミは浅間神社主催祭神の配祀だから、奉納の一環として、よく浅間神社で献身活動をしてるのさ。んで、それがアサマチにとっては都合が良くて、コイツったら何時も神社で祭事とかイベントとか仕事とか有ったら、必ず結城を誘うわけよ。御蔭でアサマチに代わって結城が逆に押しかけ女房やってる訳さね」

「マサ、余計な事言わないで下さい！！」

「何さね？ アンタのオドオドしたアプローチは見てて歯痒いのさ。昼休みでの遣り取りだって一緒に騒いでいればいいのに、アンタ茶道部の方でムツツリしているから要らん事を書かれるんさね。オッパイとか可愛いとか」

「あーあー！！ 聞こえません！！」

惚けた反応に、皆が揃って笑みを吹いた。

浅間はムスっとした顔を浮かべ、そっぽを向きながら言う。

「結城君が鈍感だからいけないんです。少しは人の気持ちを察してくれてもいいじゃないですか」

「アサマチ。アンタそれで誰かに気付いて貰おうなんて、マジで笑わせるね。昨年文化祭だって、弓道部の人間射的に、道場からマジ逃げた部員までズドンしたさね。そんで景品の殆どを孤児院に渡したのはいいが、残りは結城へのプレゼントにしたけど、後で弓道部からの苦情が結城に殺到したのが祟って、一時間くらい結城に叱られただろう？ アレ、手段と目的を間違っちゃいかんさね」

「だ、だって、アレは部員が悲鳴上げて外に出ようとしたのが悪いんですよ？ 皆に迷惑掛けますし、あと加速術式入れてない人間なんて遅すぎて撃つてくさいと言ってるようなものですよ。それにズドン気持ち良いですし……」

「アンタ、さり気なく箍が外れるからやり難いんだよね」

後ろで溜息を吐く直政を無視し、浅間は空を見た。

義眼”木葉”が眺める青空では、レース組が悠々と空を駆け回る。中にはナイトとナルゼの姿も確認出来、ふと浅間は、あることを思った。

「皆、夜には教導院の方に集まるんですね？」

「まあ、あたしは泰造爺さんに夜番の休みを取るから。他の連中も、昼間の内に仕事とか終わらせちゃって、夜には集合するんだろっさね」

「あ、自分も、模擬戦用の従士槍持参しますんで。術式付きで」

「わ、私も、行きます」

皆の返事に、浅間が眉尻を下げて笑った。

今朝から色々あったが、何だかんだと、皆はトーリのことを気にしている。そして同時に思う、自分の幼馴染は、結局彼に祝いの言葉を送らなかったけど、それはどうしてか。

「結城君って、本当は反対なんじゃないでしょうか……。トーリ君がホライゾンに告白することを」

呟きに似た一言に、直政達が言葉を失った。

しかし、ややあってから、

「……それはどうさね。——今時世間じゃ、P・A・ODAだの末世だので騒がしいし、武蔵もこう言う複雑な御時世で空を飛べるのも奇跡みたいさ。そんな中で、馬鹿一人の告白が通るかどうかな……。正直言って怖いさね。トーリの馬鹿も、よくやる気になったもんだ。結城も、多分考えが決まっていなくても知れないさね」

「ゆ、結城君。ホライゾン、のこと、だ、大事に、してた、よね」

鈴の言葉に、浅間はやや俯いた。

それと同時に思い出す。子供の頃、家の神社の前で、よく一緒に遊んでいた四人の子供。幼い自分と、元気のある二人の姉弟。芯の強い、何時も笑顔を持った黒髪と青い瞳を持った少女。

少年は、何時も青目の少女と一緒にいて。幼い時間の中で、多くのものを共有した。そしてそんな中で、彼が現れたのだ。

悲しい目をした、少女とよく似た少年、子供の頃の結城が。

その日から、きっと皆の運命が変わったのだろう。彼の出自は、後で知ったことだが、それを抜きにしても、彼と幼い日のホライゾン
は仲が良かった。あの時の自分達は、ただ仲の良い兄妹を見ている
みたいで微笑んだけど、本人達は、きっとそれ以上の複雑な気持ち
を抱いていたに違いない。

だって、それは、

「あの二人は、血の繋がった本当の兄妹ですからね……」

事実に、場の空気が静まった。

そして彼女は足を止めた。なぜなら、この先は、

「こ、この道、って…」

「ああ、何時もトーリや結城が通っている軽食屋がある。そんであの子もいるさね。今の時間じゃ、午後の墓参りだろう」

「……よく知ってますね、マサ」

「まあ、皆知ってるんじゃないさね？ 多摩や村山辺りで、外殻の非常階段で一服してると、決まった時間に聞こえてくるんだよ」

「それって……」

浅間の言葉に、直政が先に行く。青雷亭へと向かう道程の上で、彼女は話を続けた。

「通し道歌。昔、よく皆で一緒に唄いながら遊んでいたさね。結城だけ輪の外で見ただけで、今思えば、あの時の結城は、まだ自分と折り合いがつけていなかったのだろうさ」

「彼もホライゾンも、生まれが大変な人ですからね……。まあ、それを知ったのも、ホライゾンが亡くなってからですが」

「そうさね……。丁度そんな時からかね。馬鹿なトーリと、結城が変わってしまったのは。片方はどんどん馬鹿になって、もう片方はどんどん人間離れしていつてしまった。あの二人、一体全体何を考えているんさねえ。前向いているのか、後ろを振り向いているのか、さっぱり解らない」

直政の言葉に、浅間は目を細めた。

思っているのは、幼馴染の少年二人。

奇天烈で人望のあるトーリと、剛毅で気遣いのある結城。少女ホライゾンの存在に人生を変えられた二人は、まるで鏡みたいだと。

「そう言えば、トーリ君って、あれから一度も”後悔通り”を歩いたことはありませんよね」

「Jud、そしてその代わりに、結城は毎朝必ず登校前に後悔通りを歩く。通れない親友の代わりに、自分が親友の後悔を見守ると」

「ゆ、結城、くん。何時も、朝練の、最後に、た、立ち寄る、よね。せ、石碑の、前を」

「ああ、アレ、追弔しているんですね。十年間、一日も欠かさずに」

そのことは、浅間も知っている。毎朝、日が出てきた時間で、必ず彼が其処にいるのを。だから自分も、朝のランニングでは、必ず最後に教導院前を通ることになっている。

気にはする、見守りたいと思う、だから解るのだ。結城にとって、ホライゾンという存在は救いであり、己の罪でもあると。

トリーはずっとホライゾンから逃げて来たけど、結城はずっとホライゾンで自分を責めていた。互いが死んだ者の人生を背負って、ただただ、時の流れが傷を癒してくれるのを待っていた。

だから、記憶の中に確かに刻まれたあの日に、二人はそんな約束をしたのだ。

「皆、知っていますか？ トリー君と結城君。中等部の頃に、約束をしたんです」

「約束？」

確認するような直政の疑問に、浅間は頷いた。

彼女は、Jud、と前置きしてから、息を吸って、

「結城君は言っていました、”お前がその後悔にケジメをつけるまで、オレは決して自分の名前を名乗らない”と。そしてトリー君も言いました、”なら俺がお前の罪を洗清してやる、そのためには、オレは必ずホライゾンに報いてやる”って……」

「勝手な都合さね。……まあ、それも明日で何もかもが決着をつくんだらうけどさ。そのためには……」

間を置き。直政は教導院の方角を見た。今頃、後悔通りと教導院を繋ぐ階段に居る姉弟二人を思いながら、

「あの馬鹿には、後悔通りを通って貰わないといけないさね。そんなで結城にも、早く三河から帰って、一緒に騒いでくれないとね」

言葉に、浅間は頷いた。

明日を過ぎれば、きっと皆の中で何かが変わる。その先で、何時も通りの、誰もが願う平凡が続くようにと、祈るしかなかった。

/
/

三河へと続く山肌の中、各務原の麓にある木陰道の上を、結城と酒井は歩いていた。関所での手続きを済ませ、正純と別れた二人は、三河郊外へと向かう道程に行く。

そんな中で、酒井は自分の横を歩く結城に言った。

「んで、正純君がねえ、”後悔通り”を調べたいって言うんだよ。その辺どう思う？」

「さっきからぎゃあぎゃああ煩いなあ、もう。調べさせれば良いじゃないかい。減るもんじゃないし」

「冷たいねえ、結城は。俺は単に、才能ある若者の踏み出す新たな一歩を祝っているだけなんだよ？ 少しは気遣ってくれてもいいじ

やない」

「酒井学長。アンタ、正純に余計なこと吹き込んでないだろうな？」

質問に、酒井が肩を竦めた。

彼は口に咥えた煙管を離し、

「人聞きが悪いねえ。俺は何にも言っていないよ？ 結城の昔話とか、恥ずかしい話とか、何にも」

「今滅茶苦茶腹立つたぞ？ 同窓会の前に精神教育いる？ 死にたい？」

「うん、さり気なく剣を抜こうとするのは止めてくれる？ 冗談だよ。本当に何も言っていないから。ちょっとこっち側に来ないか誘ってみただけだから」

「それを余計な事と言ってるんだよ……、後悔通りとか、こっち側とか、別に面白いものじゃないし、知ってて得になるようなもんじやないよ。武蔵では大半の人が知っていることだしな」

吐き捨てるような言葉と共に、結城は足を速めた。

そして自分の先を歩み、後姿のままの結城に、酒井は言う。

「お前は過保護な奴だな。——しかし立ち止まっている焦燥を抱えている人にとっては、先に進めるチャンスは麻薬だよ？ 誰もが
お前さんみたいに、何もかも背負って生きて行ける訳じゃないのさ」

「解ってるよ、そんなことくらい」

「ならいいけどさ。——しかし、正純君、お前のことよく気にか
けていたよ？ 結城、正純君の友達だろう？ 見て解るような煩惱
を浮かべるのは武芸者としてよくないね。正純君が先を進みたいの
も、ムツツリなお前が有能過ぎるんだよ」

「説教になってるぞ、学長」

指摘に、酒井は、む？、と目を丸くした。

そして歳は取りたくないものだねえ、と言いながら、しかし次の瞬
間、二人は同時に足を止めた。

それは、

「お出迎えか」

言葉に、前方、左右に広がる木々の陰から、三つの影が現れた。遠くにある三河の町並みを背景にしているのは、二人の中年過ぎの男性と、彼らの背後に控えている少女だ。

その姿を確認した後、結城の後ろにいる酒井が微かな笑みで言った。

「松平四天王の内、榊原・康政と本多・忠勝か。御本人が出迎えては、俺も捨てたもんじゃないってか？　で？　井伊はどうしたよ？　四天王が一人欠けては、何か気分が来ないね」

酒井の質問に、眼鏡をかけた初老の男性、榊原が身体を前に出した。

「それがな、酒井君、井伊君は……」

「井伊については他言無用だ。忘れたか、榊原」

榊原の言葉を、横にいる体格のいい男性、本多・忠勝が止める。

その動きに、結城と酒井が微かに眉を寄せるが、それに続いて、忠勝は結城の後ろにいる酒井を見ながら言った。

「連れがいるとは予想外だが、まあいいか。——見せろ」

同時に、忠勝の影に隠れていた少女の姿が消えた。

それに気付かず、酒井はやや首を傾げながら答えた。

「は？ 待ってくれよダっちゃん。——ダっちゃんの言う”見せろ”って大抵ろくなことじゃ……」

台詞が終わるより早く、目の前で動きがあった。

二つの円運動。互いに長い黒髪を持つ若者の軌道が交差した。

「――！」

驚嘆の表情を示したのは果たして誰か。四天王が見る手前、風を切る速さで突進する少女の動きに、結城は片手だけで反応した。

空気抵抗に抗う低姿勢での瞬間加速。恐らく術式の加護を受けた少女の奇襲は鋭く、無駄が無く、そして的確だ。得物は腰に携えた二本の刀。白砂代座製の黒い木柄を持った長刀は、初動である加速と同時に振り抜かれている。

地面を蹴る動きに続いて、彼女は距離五メートルの位置から既に攻撃動作に入った。両手で刀を横に振りきり、動態運動と全身の瞬発力を、コンマの瞬間の中で腰と手首の微かな捻りのみで、最も破壊力を持つ剣先に集中させる。

迷いの無い、手加減容赦ない殺すための一撃だ。そしてこの時点では、結城も酒井もその動きに反応出来なかった。

酒井は距離が離れており、結城と忠勝によって少女の初動を確認出来なかった。そして結城は、少女の初動に気付いていたが、彼女の目標が誰なのかを見極めていなかった。

酒井と自分、どちらかを先に仕留めるかで、結城の対応は変わって来る。

……どっちだ？

思考の中。視線を忠勝と榊原に向けたまま、結城の直ぐ隣りで動きがあった。少女の圧倒的な加速に、結城の目は追いつかないし、気付かない。それほどまでに少女の速度は凄まじく、隙が無い。

しかし、結城には解る。今、自分の右横スレスレを突き抜ける空気の流れに減衰は無い。もし少女が自分を狙うのなら、少なくとも一メートル先でブレーキを掛ける筈だ。背後を狙うにしても、トップスピードのままでは小回りが利かないため、どうしても近接戦闘系は間合いに入った瞬間に、速度を攻撃に転換する。

ようするに、速度を維持したまま結城の背後に突き進む少女の狙いは酒井だ。結城の武装を用心してか、少女は対処の難しい、長棒を背負っている結城の右側から回り込んだ。例え反撃を喰らっても、棍棒より小回りの利く刀なら迎撃も容易だ。的確な行動だと、結城は内心で評価した。しかし果断で迷いが無く、命令した瞬間に動く少女の行動力は、事前に準備をしている証拠だ。忠勝の言葉から察するに、向こうは酒井が同伴者を連れて来ていることを想定していない。

それでも一心不乱に酒井を狙うのは、

……馬鹿正直な女だな！

だから動いた。自分の右後ろ。あと数瞬で酒井に迫る少女の後姿に対し、結城のカウンターもまた一瞬だ。

既に身体の半分を通り過ぎた少女に、結城は左手を左腰に携えている長剣の柄頭に当て、そのまま左下へと強く引いた。同時に左足を半歩引いて、背中を少女に向けるように左側へと回す。

左半身に徹底した動きの中で、腰を軸として、シーソーのように片方を押された長剣は、速射砲の勢いで鑑かんづを少女の顔面に向けて打ち出す。

目の前で突然跳ね上がった鞘の先端に、しかし少女の対応も早かった。大きく横に引き抜いた刀を、素早く眼前に引き戻す。脇を締め、両腕を胸の方へと引いた動きを利用して、少女は剣の柄頭で鑑を上弾いた。それと同時に、加速の動きを途中で遮断された少女の周囲で、青白い光が散った。術式を中断され、無効化された際に発する流体光だ。

そして、

「――！」

同じ瞬間に、少女が目を見開いた。

術式が破られたこともそうだが。それより危険な要素が迫っている。その理由は背後。鞘の一撃目が前から来たのと同時に、逆方向から二撃目が打ち出された。初撃を捌いた隙を狙って、結城が右手で背中中の棍棒を引き抜いては、少女の後頭部目掛けて棍棒の先端を叩き

付けたのだ。

バトンのように片手で背後に振り回された棍棒は、数ミリのズレも無く、殺人的な遠心力を持って少女に喰いかかる。

そして迫る二発目の砲弾に、少女はまた動いた。鎧を弾いたために自分の両肘は上がっている。今は刀を左肩に担いだ姿勢だ。少女はそのまま強引に膝を落とし、つんのめるように上半身を地面に向けた。

ヘッドスライディングの体勢で、少女は身体の高さを更に低くすることの後方からの攻撃を凌いだ。結果、棒の先端は頭上スレスレの位置を通り過ぎ、後頭部で結んだ少女の髪を掠るだけに終わった。

そして少女は地面を蹴り、無理にでも結城との距離を開かせるのと同時に、低空での前転跳びを持って着地する。そのまま彼女は、三撃目に対する警戒として背後を振り向く。

視線の先には結城があり、互いの距離は三メートル弱。二連撃の隙を狙って、少女が反撃として刀を構えようとするが、しかし彼女は見た。

腰を落とし、術式の展開で加速段階に入る矢先に、既に向こうは攻撃していた。

……早い！

反撃の糸口を見せないのは、銀色の剣先だ。少女の着地と、振り向

く瞬間にタイミングを合わせ、結城は身体を傾かせた姿勢のまま、左手で十束剣を引き抜き、彼女の鳩尾に向けて剣を投擲した。

三発目の射撃。

結城の一連の動きから、少女は向こうも自分と同じ近接武術師だと判断した。それは結城も同様であり、だからこそ、少女は近接系戦士としては先ずありえない行動に瞠目する。

……得物を投げ捨てるとは!!

しかし舌を巻く暇すらない。空気を切り裂く突進力を持った長剣は、間違いなく自分の急所を狙っている。だが少女は見切った。相手は得物を二つ持っている。先ほどの挟撃と同じように、本命の棍棒が投擲の後に潜んでいる可能性は高い。長剣は目くらましで、トリである四撃目が危険だ。そして事実、少女の思っている通りに、結城は確かにそうする積もりだ。

故に、少女は勝負に出た。術式の発動シークエンスを続行させ、剣を弾いたのと同時に加速する。彼我の間合いは三メートルだが、瞬発力ではこちらが上だ。懷に潜り込めば、その先は自分のテリトリとなる。

だから、

「っ——!!」

激突する。黒い刀と、黒い長剣が衝撃と共に火花を散らす。

飛来物を弾く際、弾かれた物体が身体を切らないようにするため、斜め上方向に流すのがセオリーだ。人間の正面から見た空間では、肩より横上の空間が広いため、その方が二次被害を受け難い。

そのため、少女も同じように、十束剣を弾こうとしたが、

……重い！？

衝撃力が半端無い。今までの訓練で、少女は弾き防御や攻撃の受け流し訓練は何千何万回も繰り返してきた。剣戟の応酬は双方の質量の相対速度のぶつかり合いであるため、剣士は見た目以上の衝撃力と破壊力に対処しなくてはならない。その点に関しては、少女は常に体格や腕力が自分より優れている父で慣れているが、今の一撃は明らかにその十倍はある。

骨が軋むような重圧が、少女の両腕に一気に押し掛けてくる。しかし退けない。一瞬でも退けば、銀色の切っ先が己の体を貫く。死と隣り合わせの刹那に、少女は強引にでも両足を踏ん張った。

身体感覚が極限に引き伸ばされる中で、術式の発動が迫っている。その前に剣を弾かなければ、術式加護の奉納に必要な初動を取れなくなり、術は不発に終わる。そうすれば相手に隙を与えてしまう。

そうしたら終わりだ。

武士の娘として、安直な敗北は赦されない。だから少女は振り絞った。全力で、懸命に、齒を食い縛りながら、強引に突き進む銀の尖端に抗い、そして、

「ああ——！！」

吼えるような叫びに、剣が軽快な金属音と共に宙に舞った。

だが、

……しまった！！

力を力で押し返した反動が、致命的な空白を作る。強烈な剣戟同士の衝突により、十束剣を弾いた少女の上半身が僅かに仰け反った。そして両腕は大きく上に掲げられ、腰も少しだけ浮いている。

術式発動の準備は完了した、しかし今の体勢で初動を踏み入れるのは最低でもコンマ2秒は必要。このような絶命的ミスを見逃すほど、向こうは甘くない。

その証拠に、来る。

「――！」

右足を前に踏み出そうとするこちらの前で、既に結城は長棒を振り抜いた。

彼は右手で棒の末端を握り、右半身を前に出すことで射程を限界にまで伸ばせた。棒の全長は二メートル程。繰り返すが、両者の距離は三メートルだ。つまり結城は、一メートル程度の短距離を進めば攻撃を届かせることが出来る。そしてその短い距離は、棒を振りぬく遠心運動に全体重を乗せたチャージには事足りる距離だ。

少女の足が地面に着くより早く、断頭台のギロチンを思わせる棒の末端が彼女の脳天に落とされた。容易に頭蓋を打ち砕く一撃に、少女は理解した。

たったの四撃。一瞬の内に雌雄を決した攻防は、しかし自分が思っているようなものではなかった。一つ一つの動きに駆け引きを持ち出した自分と違って、向こうは最初から必死なのだ。陽動と思っていた剣の投擲も、実際は陽動ではなく、本当にこちらを殺すつもりで投げ出された。

こちらの算段や思惑を正面から蹂躪する。

少女は知った。この男には小細工は通用しない。象を相手するのに、蟻がどれだけ手を尽くしても無駄なのと同じように。

そして少女は思った。今までの自分の戦い方を根本から否定するその力に、この瞬間、少女は懂れたのだと。

/
/

「……」

振り抜けた棒の先端を、結城はジッと見ていた。

手応えは無い。それは攻撃がその効果を作用していないことであり、つまり棒の先端は少女の頭蓋を砕かずに終わった。

当然だ。振りぬかれた棍棒は、少女の頭上数ミリの高さで停まっている。本気でけしかけて来たのは向こうだが、態々日の当たる時間で殺し合いをする必要も無い。勝負が決した時点で、これ以上の決め手は野暮なものだ。

その上、己の背後では、榊原も忠勝も動く気配を見せない。つまり最初からこちらを試すことを目的として少女を遣わせたのだろう。或るいはこちらを教材にして、少女の実力を試すために出させたのか。どちらにしても、結城としては大差ない。

考えと共に、結城は棒を少女の頭上から引き戻した。その動きに、少女は啞然とした顔で結城を見ている。

何故とどめを与えなかったかのような表情に、結城は可笑しな気持ちを抱いた。

……リアル侍だな、コイツ。

真面目とも言つ。愚直さが残るその仕草に、しかし悪い気はしない。行き成りの奇襲に呆れはしたものの、結城は内心で少女の腕前を評価した。彼は長棒を背中に背負い、弾かれて地面に刺さった剣を回収しながら、少女に言う。

「良い動きだな。でも正面から突っ込み過ぎだ。性格が次のモーシヨンに映っているから、それだと技量のある相手に読まれ易い。もっと頭空っぽにした方が良いんじゃない？」

「え？ あ……、J u d .」

遅れた返事に、結城は少し苦笑した。身内にも、似たような反応をする人がいて、思わず親身的になったものだ。どうやら、武蔵以外にも、トーンの通じる相手がいるらしい。

思わず笑みをこぼそうとした考えの中で、ふと、結城は気付いた。少女が、やや頬を赤くしてこちらを見ていることに。

「？」

今の手合わせで、何処か具合を悪くしたのかと思い、結城は眉を寄せた。相手が本気だったので、こちらもつい殺る気モードで挑んだため、それで何か不都合があつたら面目無い。

とりあえず、大丈夫か、と氣遣つてやろうと思い。結城が口を開けようとしたが、しかし、

「！？」

言葉を作るより早く、少女が素早く動いた。

彼女はそのまま両膝を閉じながら地面に落とし、臀部をかかとの上に載せ跪座となる。そして両手の五指を揃え、膝の前の地面に人差し指をくっ付けるように置いた。前かがみの上半身はほぼ地面と平行しており、その余りにも隙の無い座礼に、結城は啞然とした。否、一歩引いた。

そして、次の瞬間。少女は顔を上げ、

「拙者。極東、三河圈新名古屋城教導院三年所属、兼三河警護隊総隊長。同所属である特殊予備役副長、本多・忠勝が娘、本多・二代と申す。——恐縮ながら、貴殿の御名前を教えて頂けぬでは御座るうか？」

「え、あ、うん……、武蔵アリアダスト教導院三年、結城。臨時相談役……」

向こうの畏まった質問に、つい自分も所属と役職を教えてしまった。流石に名前は姓しか名乗れないが、少女、本多・二代はそれに気にせず、小さい声で、結城殿、とか呟いている。

一体どうしたのかと、結城が首を傾げているが。酒井や背後の榊原と忠勝を見ても、こちらと同じ反応をしている。

そして次の瞬間。結城は未だに正座状態の二代の発言に、言葉を失った。

それは、

「拙者。武芸に明け暮れて十八年。何時か父と同じ高みに辿り着こうと修練を重ねており申した。実戦経験を持たず、手合わせの相手は父と師の鹿角様のみ。故に、先ほどの結城殿との戦闘には多くの

ものを教えて貰いました。その見事な棒術捌きと戦術、この本多・二代、心から感服致し申す」

ですから、

「拙者。結城殿の迷い無き戦い方を身近で見習いたいで御座る。宜しければ、その……、——不束者ふつつかものですが、この本多・二代を、嫁にして貰えぬで御座ろうか？」

「……………え？」

第三話〈事後の告白〉（後書き）

原作基準でどうかしたい今の気分。

大罪武装も殿先生の妻子の話も、キーワードだから飛ばせないよう
（涙）

三河決戦後にも臨時生徒総会という難関が待っていますし、やっぱり戦闘描写は楽だな、適当に書いて。

で、まあ、原作第九巻が中々手に入らない中、かなり鬱な気分のク
ロです。

そして続けて投稿した第三話。タイトルで変な事を考えたその君
は間違いなく負け組です（笑）

では皆さん。また次回〈

第四話　赤色に染まった無情

「よう、チビ姫さんよ、何見てるんでい？」

赤い色に染められた大地の前で、姫と呼ばれた幼い少年は静かに地平線を眺めていた。

赤く燃える大地、黄金色に照らされる空、黒く焦げる大気。あらゆるものを蹂躪する破滅の匂いに、可愛らしい少女の面影を持つ少年は、頭上から響く声に面を上げた。

「……勝^{かつ}——どうして勝達は、人を殺すの？」

質問に、声の主である勝は答えなかった。

感情の籠っていない結城の問いは、心の奥底から生じた単純な疑問であることを、勝は知っている。自分達が焼いた野原と町並みに対する哀傷や空しさは無く、少年はただ、どうしてこんなことをするのか理解できないでいる。

だからこそ、勝は心の中で言葉を選んだ。空虚と白紙な心しか持たない少年に、正しい色を与えるために。

「そりゃあ、チビ姫さん。これは戦争なんだ。俺達は生きて行くために、人を殺さなきゃならねえ」

「……じゃあ。——人を殺せば、生きられるの？」

新たな質問に、勝は考えた。

生きるために殺す、それとも殺すために生きるか、と。

前者は手段であり、後者は目的だ。命を奪うという究極の略奪に対して、目の前の幼い命は、どうしてこうも残酷な疑問を抱いたものか。目の前の朱色に対する裏返しか、それとも、少年に血の色しか見せなかった自分達に対するあてつけか。そしてその何れも、自分達が招いた結果に過ぎない。

しかしだからこそ、勝は答えなければならない。目的であろうと、手段であろうと、自分達が殺すことに妥協したのは事実だ。それについて嘘をつくことは赦されず、そしてその理由を持ってして、勝は少年に自分達の思いを伝えなければならない。

「チビ姫さん。——チビ姫さんは、俺が嫌いかな？」

「うっん。嫌いじゃないよ。——勝、おつきくて、角生えて、面白^{ミッチーとし}い人だから。光や利達、仕事で忙しいから、勝しか遊んでくれないもん」

「そつか……。じゃあ、そいつらのことは嫌いかな？」

問いに、少年は暫し考えてから、首を横に振った。

その上で、少年はこう言った。

「皆、遊んでくれないけど、良い人達だよ。ミッチー、何時も御土産買ってくれるし、利もまっちゃんと一緒に色んな話をしてくれる。あと……」

「ああ、いいよ、その辺で。よく解った」

言葉を遮られた事で、少年は不思議そうな表情で勝を見た。例え仲間に相手にされなくても、我儘を言わずにそれを解ってくれる少年に、勝は似合わない微笑を浮かべた。この子が此処に居ることは間違^ミいだ^ッが、その間違^ミいに、少年は自分達を否定しなかった。ならばそのことに、勝は感謝しなくてはならない。自滅の道しか辿れない自分達や、少年を孤独にさせてしまったあの男の意図に、何時か罰^{ツケ}

を払わなければならないと覚悟し、

「じゃあさ、チビ姫さん。何時か俺達が、もう姫さんと会えなくなったら、どうする？」

「え？」

問い掛けに、少年は目を見開いた。

客観的に別離や破滅を見てきた幼子は、一度もそのことについて主観的になったことはなかった。だからこのとき、少年は初めて考えた。

角の生えた陽気な父親役である勝。忙しくても必ず笑みを向けてくれるミッチー。何時も仲が良くて、たくさんのことを教えてくれる利とまっちゃん。他にも色んな人が居り、皆と一緒にいる時間は楽しいものだ。それがもし、消えてなくなるのなら、

「勝は……、何処に行っちゃうの？」

「今じゃねえけど……。何時かはな……」

「……何処に？」

「さあな。——遠い何処かか、或いはその辺かな」

曖昧な返事に、少年は俯いた。翳りのある表情に、勝は苦笑しながら、その大きな手を少年の頭に乗せた。何れこの場所を去る自身の運命に、しかし勝は後悔も不安も無く、少年にこう告げた。

「嫌か？」

「……うん」

「そうか。——ならば、それがチビ姫さんの最初の質問への答えだ」

言葉に、少年はまた顔を上げた。やや涙ぐんでいるその大きな瞳は、どういう意味？ というジェスチャーを含みながら勝を見ている。そんな彼に、勝は未だに赤く燃え盛る地平線を見ながら、静かに語った。

「いいか、チビ姫さん。——俺達は何時か消えちまうものだ。聖譜記述や歴史再現、末世や襲名者なんかが生息に旗上げている世の中で、この国は必ず滅びる。つまり、バッドエンドが最初決められているんだよ、この国は。そしてそれは多分、決して避けられない運命だ」

淡々と作られる言葉に、少年は耳を傾ける。近くから感じる勝の温もりにも安堵を覚え、しかし破滅を述べる話の内容に心が冷めていく。

「だからまあ。それだからこそ、俺達は限られた時間の中で、強く生きていかなきゃならねえ。他人に舐められず、奪われず、見下されずに、誰よりも強くに、だ」

破滅は必然。ならばどのようにその破滅を迎えるのかは、自分達の自由だ。最後を花々しく飾るような空しい最後ではなく、誰にも忘れられない華麗な生き様こそが、自分達の生きた証なのだ。

「戦うことは、己を示すことだ。そして俺達は、無闇に自分を失わせないために、世界に己を示す。——誰もが認める本当の自分を、皆に解らせてあげるんだよ」

「本当の、自分……」

「ああ、だから殺す。殺して、自分が強いと示す。——しかし……、殺すだけが、全てじゃねえ」

それは哀愁は、それとも後悔か、もしくは自嘲か。

闘争に生きる身の上で、勝は初めて自分の生き方に妥協した。可憐な小さい命に、世界の残酷さを思い知らせる前に、本当に教えるべきものがある。

それは、

「気が合った奴と一緒に笑って、喧嘩して、暴れて、惚れた女と一緒にイチャイチャして、恥ずかしい思い出を作って、幸せになることだってある。——俺達は馬鹿な大人だから、殺して皆に解らせることしか出来ねえが、チビ姫さんには、他にも色々出来るもんがあるだろう。世の中何も、赤一色とは限らねえからな」

可能性の話だ。

汚れきつた大人達^{じぶん}には遅すぎた、青臭い夢の話。今の自分に満足しているからこそ、勝は少年に別の道を示したのだ。何も解らない少年に、破滅だけの生き方は余りにも詰まらない。それを教えてあげられる者には、それを教えただけの責任がある。若い命に対する責任に、勝は無聊な人生を吹き込むという粹の無い真似事はしない。

強く、楽しく、好きに生きる。

それが勝が見出した。限られた自分の運命に対する挑戦だ。

「強く、生きる……」

「ああ、そうだ。——そしてそう出来るように、チビ姫さんには色んな色を憶えて欲しい。流星に赤ばっかりだと、何時か飽きちまうだろう？」

「……うん」

頷きに、勝は陽気な笑みを浮かべた。

納得はしてくれなくても、解ってくればそれでいい。たとえこの先、互いが同じ境界線で交わらずとも、この遣り取りの中で、勝は確かに本当の自分を少年に示せたのだから。

「強くなれよ、チビ姫さん。——チビ姫さんが自分に納得出来たその時には、姫さんを置いてきぼりにした親父さんにギャフンと言わせてやれ。そして嫁の一人や二人を貰え、孤独はクールで格好良いかもしれねえが、一人ぼっちだと暇で詰まらねえからな。ダチや女房と一緒に遊んでいた方が楽しいのは当たり前だからな。そんな時は、俺も誘えよ。一緒に騒いでやるからよ」

「……うん。——ありがとう、勝」

「いいんだよ。——”秀康”」

/
/

「……き、……おい、結城」

朦朧とした意識の中で、結城は聞き覚えのある呼び声によって我に返った。はっ、と目を見開き、顔を上げた彼の目に映るのは記憶に新しい背景と人物達だ。

場所は三河郊外にある一軒の食堂。二十畳程度の大きさを持つ店の

中で、結城は畳敷きの部屋の一角に座っている。窓際の席に腰を下ろし、右手側には酒井がいる。そして料理や酒の出された机の向こうでは、榊原と忠勝がおり、その横に二代を控えさせている。酒井の古い友人である松平四天王との対面と、その挨拶代わりである二代との手合わせと彼女の求婚から数刻。自分達はゆっくりと話を出来る場所を探してこの店に來たのだが、会話の途中から結城はつい過去の記憶に浸ってしまった。

「大丈夫か？ さつきからボーっとして」

「あ、ああ……、すまん。ちょっと考え事して……」

返事に、酒井は怪訝そうな表情を浮かべるも、黙り込む結城にける言葉は見つからない。

そんな二人の前で、今度は向かいに居る忠勝が言葉を作った。

「なんだあ？ 二人ともそんな辛気臭い顔をしておって。縁談話の最中なんだから、少しはテンションを上げたらどうだ？」

「おい、誰のせいでこんなことになってると思っていやがる？ 首押し折るぞ、ジジイ」

「まあまあ、少し落ち着けよ、結城。ダっちゃんが頭おかしいのは何時ものことだけど、昼間から人をバラすのはよくないでしょ？血塗れで武蔵に帰っても、皆にドン引きされるだけだよ？」

「ちつ、それもそうだな……」

「お前等、なんか論点がズレてるぞ？」

張り合いの無い遣り取りに、しかし結城は何時もの調子を取り戻した。頭の中で昔の光景が残滓のようにこびり付く中、彼は忠勝に向き直り、

「で？ アンタ等はどうするつもりだ？ 先に言っておくが、初対面で行き成りプロポーズしてくる女に、はい結婚しましょうとか御免だぞ、オレは」

「なにい？ お前、私の娘じゃ不服だとも言いたいのかあ？」

「問題そこじゃないでしょ？ ダっちゃん。——結城も、そんなに率直に断らなくてもいいじゃない」

「己の人生の一大事に対して、そう簡単に締め括られてたまるか。
——そんなことより、二代って言うんだっけ？ アンタはどういうつもりなんだ？」

「え、あ、……Jud。」

話が自分に回って来たことで、二代は姿勢を正した。彼女は結城と目を合わせるように向き直り、やや身を乗り出した。

「拙者は、三河を出たことが殆どありませぬ。幼少の頃から武芸の鍛錬をこなして来ており申ししたが、そのが果たして確かな力となっているのかということに、不安を感じているで御座る」

言葉に、皆が静かに聞く。二代としても、この話は既に父と話し合っていることだ。武家の娘ではなく、同じ一人の武者として、更なる高みを目指すのは至極当然のこと。スポーツ選手的な気質の中で、心身の強さを求めるのが己の目的なのだ。だからこそ、二代は井戸の中の蛙になりたくはない。

焦燥はある、だから先ほど、向かいに座る酒井から武蔵に行くかどうかと誘われたときは心が躍る想いだった。貿易船として各地を転

々とする武蔵でなら、より多くの物事を見聞きする機会がある。昔の級友である正純もそこにいるし、何より武蔵学長である酒井の誘いだ、フォローは万全だろう。

しかし、それ以前に、

「結城殿の技には、今までの拙者には無いものを感じ取ったで御座る。武芸を習う者として、それが何であるかを確かめたいで御座る」

でも、

「ただ見るだけでは、学ぶだけでは足りないで御座る。武術は、人の心と生き方を表す。結城殿の戦い方には、流儀に縛られない個性があり申す。——拙者、結城殿のその果敢さに心を惹かれたで御座る」

未知とは、恐怖と期待を併せ持つものだ。その未知に対して理解を得た瞬間。人は始めてそれが脅威か希望かと把握出来る。そしてその何れも等しく、人にとっては人生の宝だ。

三河という檻に育った二代に対して、結城という存在はまさしくそれだ。同じ生の時間を歩んでも、自分と彼との実力の差は歴然のも

のだ。それだけで、二代は世界の広さを実感した。

強ければ誰でも良いという訳ではない。先ほど自分が言っていたように、目の前の少年には、既知に囚われない自分の生き方がある。そしてそれは、きつと自分が長年求めていたものだ、と、二代は確信出来る。それが何であるかを知るためにも、もっとこの男に近づきたいと。

「今すぐ返事を返すとは言いません。だがせめて、結城殿の御傍にいられる機会を与えてくれぬでは御座るうか？」

頭を下げて、そう願う。誠心誠意なその態度に、しかし結城の答えは、

「やだね」

即答された否定の言葉に、二代は硬直した。いきなり告げられた言葉に、彼女は遅れてからその意味を理解し、そして、

「え？　　そ、それはどうしてで御座るか！？　　やはり、拙者が未熟

者ゆえ……」

「ちげえよ」

慌てた反応を見せる二代に、結城は彼女の言葉を遮る。彼は机に頬杖をつきながら、何時もの半眼でこう言った。

「お前は何か勘違いをしている。改めて婚姻を断る前に、これだけは言っておく」

それは、

「お前はオレを買被りすぎている。オレが強いとか、自分が未熟だとか、そんな的外れで対等ではない考えでオレとお前の立ち位置を決め付けている——いいか？ オレは武蔵の学生だ。聖連の暫定支配下にある、戦う力を奪われた国の住民だ。実戦経験を言うのであれば、オレはお前と同じで、人を斬ったことはない。戦える技術を持って、それを戦うことに使えないオレもまた、未熟者だ。」

だからオレとお前は対等だ。自分を卑下して、私は弱いから、強い貴方の傍にいさせて下さい的な発言は無しだ。そんなのは、強くな

りたいと願うお前自身と、勝手に持て囃されたオレへの侮辱だ。武芸を学びたい、知りたい、先に進みたい。それは結構だが、しかしそんなのでオレと一緒にいたいのは単なる憧憬だ。そんな履き違えた想いに、オレとお前の人生をかける積もりは無い」

強く、楽しく、好きに生きる。

そう言ってくれた人のことを思い出し、結城は淡々と言葉を紡ぐ。悲劇に囚われた今の自分には、もうあのような生き方を選ぶことは出来ないが、決して赤色だけの人生を歩まないという約束だけは、今でも憶えている。そしてだからこそ、結城は縛られたくない。縛られるような考えや生き方を見たくはない。

「だからこの縁談。オレは受けられない。——気持ち嬉しいが、安易に妥協して、お互いの価値を下げるような真似はしたくない」

「……そうで、御座るか」

答えは明白だ。そしてこちらの考えも、明確に伝わった筈だ。向こうは残念な表情を浮かべているが、目には力が宿っている。それでいいと、結城は思う。

目の前の少女は、一人の侍だ。しかしそれ以前に、一人の女でもあ

る。自分の知る異性達は、どんな時でも自分を示すことに精一杯だった。夢を追うのと同時に、決して自分自身を見失わない。だからこそ、一時の熱で掛替えの無い青春を天秤に載せることを、結城は良しとしない。そしてきつと誰も、そんなことを望んではない。

「もつと自分を磨いてくれ。オレより強く、魅力的な男を惚れさせるほどに、自分を生きてくれ」

「己を磨く、で御座るか……」

「ああ、そうだ。——年頃の女は、高嶺の花みたいに自分を咲かせておけ。綺麗に咲き誇れたら、そんな時はオレの方から嫁に貰いに行くかも知れねえぞ？」

「え、あ……、それはそれで、いいかもしれないで御座る、かな……」

机の向こうで、愛嬌よく首を傾げる二代に、結城は苦笑した。やや説教臭い話し方だが、互いに納得がいくようならそれで良しと、結城は内心頷いた。

そして場の空気が落ち着いた時、不意に出口の方から足音が響いた。誰かがこちらに近づいているという物音に、皆が音のする方向に視

線を向ける。

「なにやら騒がしいですね、皆さん」

「げえ……！」

現れた人物に、何故か横にいる酒井が声をあげた。

狼狽したその反応に結城は片方の眉を釣り上げ、座敷の上がり口で足を止めている人影を見た。長身の侍女服を身に纏い、黒い角型の感覚器を持った女性の人型は自動人形だ。

「鹿角様」

「Jud」

二代の呼び声に、自動人形、鹿角は返事を返す。そして彼女は半眼の視線で全員を見て。最後に酒井を見据えてから、こう言った。

「どなたかと思えば、酒井様ですか。左遷からのこのこやって来て、未来ある若者を前にサービスもなしで昼間から酒飲みとは、大した大人ですね。——二代様、早く御屋敷にお戻りを。このままでは駄目親父の菌がうつってしまいます」

辛辣な発言をする自動人形に、酒井が難色を示す。そんな彼の隣りでは、結城が新鮮な表情で鹿角見て、酒井に問うた。

「何この女？ 学長に対する話し方が武蔵さんみたいでメチャクチャ好感持てるんだけど」

「あ？ 結城、お前の目は節穴か？ あの刺々しい態度の何処が良いんだよ？」

ヒソヒソとした二人の会話に、鹿角は視線を結城に向ける。侍女としての佇まいを崩さずに、彼女は結城に一礼し、

「自己紹介が遅れて申し訳ありません。本多家御用兼三河所属自動人形統括である鹿角と申します。お気に召されて光栄です、結城様」

答え、しかし結城は自分の名前を呼ばれたことに怪訝な表情を浮かべた。

「あれ？ オレ名乗ったっけ？」

「Jud、制服の腕章に書かれていたので、お呼びさせて貰いました」

「ああ、成程」

左腕につけられた腕章に視線を寄越し、結城は軽く頷いた。しかし傍にいる酒井は相変わらず顔を顰めており、向かいにいる忠勝に質問した。

「……ダっちゃん。十年前と同じで、相変わらずこの女、ダっちゃんどこ？」

「ま、まあな。女房の料理とか剣筋とか、コイツしか再現出来ねえからな。礼儀作法とかも、人に教える分にはちゃんと出来てるし……」

…」

「Jud、現在は、私が二代様の基本師範を務めております。二代様も年頃の女性ですので、生活に対するケアを怠けてはいけません。なのに忠勝様ときたら風呂に入ろうとか焼き肉屋行こうとかかなり駄目ですので。——情けない」

「まあな、昔からダっちゃんとかは駄目人間のダだからねえ」

言葉が出た瞬間。酒井の眼前に黄色の尖端が突きたてられた。右目の正面数センチの位置に浮かんでいるのは、焼き鳥を刺していた一本の竹櫛だ。持ち手のいない竹櫛は宙に浮かんでおり、しかしその延長線上では、鹿角が右手を肩と同じ高さに掲げていた。

自動人形の種族としての基本機能である重力制御。その力を使って、彼女は竹櫛を浮かばせている。

「幾ら駄目でも、忠勝様は当家の主です。愚弄はお止め下さい」

「なあ学長。うちにも何体かあいつの欲しくね？　そうしたらオレと武蔵さんの心労も軽くなるから」

「おいおい、冗談よせよ。なんで俺がピンチになっているときに、護衛のお前が余所でお茶飲んでるんだ？ 手助けしろよ」

言葉に、結城が、いやいや、とんでもない、と手を横に振る。その仕草に、鹿角がJud、と会釈した。

「立派な付き人をお持ちになりましたね酒井様。——主の悪いところに対する矯正に手加減が無い、良い心掛けです」

「コレ、付き人っつーか単なる目付役。——て言うか、本当に何しに來たの？ 鹿角」

「Jud、今年の三河警護隊の隊長は二代様ですので、そろそろ警護艦が出港する時間です。——忠勝様、二代様。出発の準備をお願い致します」

説明に、結城は、成程、と頷いた。

他の停泊地と違って、極東代表国である三河は毎年、武蔵の出港の安全を約束する露払いを行う。安芸まで先に先行し、山岳回廊の安全を調べるための部隊を遣わせる。そしてその部隊が、俗に言う三河警護隊だ。

極東諸国は聖連の暫定支配下において、戦闘能力が大きく削られているが、しかしその中で、三河警護隊は防衛的対外闘争が認められている。三河はP・A・ODAとの同盟で鎖国状態にあるが、聖連所属国であることに変わりはない。中心部に大型地脈炉”新名古屋城”を持つこの地は、大罪武装を始めとする開発技術のせいで、聖連諸国のターミナルポイントとなっている。中立的立場を主張するのであれば、IZUMOに似通る部分も有るが、政治的立場として言えば、やはり極東代表国の肩書きの意味は重いだろ。

何せ聖連からしてみれば、三河を牽制するだけで、極東の大半を掌握したみたいなものだ。そして何れ起きるP・A・ODAとの相対を前にして、三河の兵器開発技術は必要なものだ。同時に、そんな三河を<ruby><rb>覬覦</rb><rp>(</rp><rt>きゆ</rt><rp></rp><rt>する国も当然ある。しかしそんな輩に対して、聖連諸国が牽制するための余分の兵力を持ち出す訳も無い。だからこそ、こんな時のためにある三河警護隊だ。

「——では、我はここまでだ。この先、しっかりやれよ」

「結城殿。先ほどの話、勉強になり申したで御座る。機会があれば、また手合わせを」

/ /

去って行く三人の武者を見送り、遠く離れていくその後姿に、酒井はテーブルに肘をつきながら言った。

「唐突に求婚された分、随分とあっさりと終わっちまったな」

言葉に、結城は軽く肩を竦めた。

元々今回の主役は自分ではないのだ。プロポーズもアクシデントみたいなもので、一時の熱に流されるほど、自分は子供ではない。

それに、

「女は情が熱くて苦手だ、うちの連中も少しは柳のように静かになつて欲しいものだ」

「期待するだけ無駄だろ。にしてもダっちゃん、食い逃げ？」

「私、麦茶だけですの」

「右に同じく」

質問に、今まで黙っていた榊原が答え、結城が続いて頷いた。

二人の返事に酒井は髪を掻きながら、参ったねえ、と溜息し、

「にしても榊原、結局井伊はどうしたんだ？」

「井伊君は……」

「待ってくれ」

二人の会話に、しかし遮るように結城が手を小さく挙げた。

その動きに酒井は眉を軽く寄せ、対して横にいる若者は直ぐに言葉を作った。彼は向かいに座る榊原に向き直り、

「この先、重要な話か？」

「……ええ、ある程度は」

「そうか、じゃあ、部外者であるオレは席を外すでしょう。——
ここは三河だ、内政に関する可能性があるのなら、ここは学長に任せ
ておくよ」

「俺は別に構わないが。お前はどつするんだ？」

「この辺りを見てくるよ。物資の流通とか、まだ色々と気になるこ
とがあつてね」

「そうか、と酒井が会釈した。座敷の上がり口に足を運ぶ結城を視線
で追つて。彼は最後に一つだけ聞いた。

「俺、連絡手段無いけど。帰りはどうすんだ？」

「関所で合流だ。なんなら先に帰つてもいいぞ？」

Jud、と酒井が頷いた。その言葉を最後に、結城は店を出た。

向かう先は三河郊外から東に向いた方角。中心部である名古屋に一番近い、住宅地のある場所だ。

/ /

武蔵アリアダスト教導院前の橋上で、正純は非常に遣る瀬無い表情をしていた。

理由は一つ、酒井と結城の二人と三河に降りた正純は、関所で書類の手続きを済ませた後、そのまま武蔵へと戻ってきた。そして当初の予定通り、後悔通りの調査のために奥多摩へ来たのはいいが、そこで思いがけない事に出くわしてしまった。いや、ある意味それこそが、本日の自分の課題でもあるのだが。

……色々聞かされたが、それでも解らないことの方が多いな。

先ほど、後悔通りで父である正信に出会った。商工会の役員と共に、馬車で奥多摩の組合所に向かうところを。そしてそこで聞かされた、後悔通りの意味を。

葵・トリーの後悔。

少女ホライゾン・アリアダスト。

松平・元信の内縁の妻子。

酒井学長の言っていた、こっち側の意味。

より多くの情報を知っても、帰ってくるのは更なる疑問だ。この武蔵が抱えた、十年にも渡る重みは、一つの命の喪失。そしてそれを、今では一人の少年が背負っている。取り返しのつかない後悔を、ただ静かにその小さく狭い背肩で。

「それでも、解らない……」

喪失という名の苦痛は正純にも解る。襲名が失敗し、母を神隠しで失い、一人この武蔵に渡ったとき。自分は胸が裂けそうな思いだった。

なのに、

「どうしてお前は、笑っていられるんだ……、葵」

理解できない。

父達は、ホライゾン・アリアダストは葵が殺したと言っていた。ど
ういう意味かは解らないが、彼はそのことで後悔しているのは確か
だ。悲しいはずだ、苦しい筈だ、逃げ出したいはずだ。なのに、彼
は何時も通りに笑っていて、悪ふざけをして、さっきだって、手持
ちの荷物を強引に持って行った。いや、アレは元々葵苑の品だから
問題はないが。内容が些か不真面目過ぎる。

「夜にここで騒ぐと言っていたしな。——————」
「まったく、少しは働け」

総長兼生徒会長にあるまじき人格の持ち主だ。しかしそれでも、皆
彼を支持し、彼についていく。自分の知る武蔵の人間の大半がそう
で、例え理解出来なくても、それが彼の独特の人望を雄弁に物語っ
ている。そしてその中には、あの男も含まれている。

「結城は、どうして……葵についていくんだ？」

不意に、そんな疑問が浮かんた。自分の友人の、何語も言わぬ背影
を思い、正純は考えた。

能力も、態度も、知識も、才能も、経験も、何れを取っても結城と
言う人物はバランスを取れており、そして優秀だ。もしトップの座

を求めるのであれば、彼もまた総長か生徒会長に相応しい人材だ。誰かに尽くすことがあっても、誰かを導いてもいい筈だ。

以前、気紛れに他の皆や武蔵の住人に聞いてみたが、皆一様に結城の能力を肯定したが、彼がリーダーになるという可能性だけは認めなかった。そしてその理由を、正純は最初は理解できなかったが、彼を見ているうちに納得した。

あの男は、己自身を肯定せず、周りの物事に価値を見出す人だ。

気遣いはあるが、同時に己に無頓着。自身の能力と才能を必要値として捉え、決して成長することに意義を見出さない結果主義者。彼は自身が定めた『目的』のためには、己の経験や技術、そしてそれらを培ってきた努力すらも道具として切り捨てることの出来る男だ。日頃の外道な佇まいや話し方、容赦のない制裁や威嚇も、全てがその『目的』のために必要な要素に過ぎない。

……自己限定の現実主義者。

究極の利他的。結城という名の戦う家畜は、決して己自身を過大評価しない。自身の性能を商品のように計り、そしてその手綱を握られるのは、彼がその価値を認めた者達だけ。そしてそれはこの武蔵全体であり、彼の存在意義は全てこの船にある者達のためにある。千のために一を投げ捨てる。それは正純が武蔵に転校してきて一年で得た、結城という人物に対するたった一つの真実だ。

己に対して無感情で、非道になれる。しかしその犠牲を他者の安寧と幸福に遣わせる。そのためには芝居や打算も出来る人間。見返り

を求めない献身的な姿勢は最早狂人の域に達しており、己を殺しえる痛々しい姿は苦行に浸る求道者そのものだ。他の国では十数人単位で動く臨時相談役委員会を、この武蔵でたった一人仕切っていることが何よりの事実だ。

何が彼という人間を其処まで壊したのかは、正純には解らない。他の皆に聞いても、自分達には言えないと返される。そう返事をしたときの、皆の苦虫を噛み締めたような表情を、正純は忘れない。あんな顔をされては聞きたくても聞けなくなる。しかしそれが葵・トリと、ホライゾン・アリアダスト、そして彼の過去に関っているのは解る。そしてそれもまた、先ほど父から教えられたことなのだ。

……アレは主を失った獣だ。主人の死を受け入れられずに、未練がましく墓穴を守っている狼だ。何れ自壊し、己の愚かさに溺死する、哀れな道化だ。

父の言葉に、正純は何も言えなかった。武蔵に来て一年しか経っていない新参に、何か言えた義理か。結城は暫定議会とも交流のある人物で、父も結城も、互いの人格を理解しているし、共に何度も仕事した仲でもある。そんな父があのように結城を評価したのは、父なりの感慨があるのだろう。

どちらにせよ、正純には解らない。

後悔通りのことも、葵・トリのことも、結城のことも、この武蔵のことも、何一つ理解できていない未熟者だ。そんな無力な自分に、思わず泣き出したくなる。

「泣くとは、見つとも無い話だな」

嘆きのような呟きに、正純は空を仰いだ。乾いた目からは何も溢れることなく、しかし確かな涙が流れているのは、心の慟哭か。

何時もなら、くよくよしている自分に、結城が横から飛び出して檄の一つや二つを飛ばして来るのだが、そんな彼は今、此処にはいない。

今は遠い三河にいる友人を思い、正純はただ静かに、夕焼けに近い空を見上げた。

第四話　赤色に染まった無情（後書き）

なんかグダグダ感が拭えない第四話で済みませんでしたのクロです。

頭が鬼柴田の背影を前にフリーズしていたので、思わず英国篇での利家登場時に結城がどうするのかを妄想（計画）していました。

あと、いよいよデスね。三河決戦もうすぐ目前、もう色々飛ばしたいや。なげやりでもバトルシーンを書きたいこの衝動、まさしく愛だ。

アルマダ海鮮書きたい、三方ヶ原書きたい、おっぱい母ちゃん苛めたい、立花夫婦はトイレで反省している。あと成実くれ、ウツキーはもげる。

とまあ、投稿時点で何か色々と壊れているクロですけど、ちゃんと創作時はまともですよ。

なんか愚痴っぱい後書きになってすいません。

では皆さん。また次回……

第五話　祭り前の喧騒

草木も眠る逢魔の刻。夕色のカーテンに遮られた空は炎の残光を引き摺り、地平線から覗かせる真紅色の天体は本日分の労働から解放されようとしていた。

そんな夕方の三河街道の上を、オレは静かな足取りで闊歩している。古来より環境神群の加護を得てきた土地は、過去の栄光に未練がましく縋りつくような哀愁感を漂わせ、今の時代に生きる人間に説明の出来ない違和感を与えている。コンクリートによって舗装された国道はぞっとするような冷やかさを漂わせ、伝統的な建築構造を持つ民家や建物との間には拭いきれない時代差がある。

そしてなによりも人の目を引くのは、タイムトンネルの如き町並みの最奥に佇む、巨大な四角形の箱だ。中身を包み込む四方の壁に”NEW CASTLE of NAGOYA ATELLIER on MATSUDAIRA.”という表示を示すそれを、オレはただ見詰めることしか出来ない。冷色系の塗料に覆われた四基の地脈炉と一基の統括炉を内包したパンドラの箱には、あの男がいる。

松平・元信。極東代表国・三河の国主。三河松平家の当主。都市破壊級個人武装・大罪武装の生みの親。航空都市艦・武蔵の主。自らを先生と自称して憚らない、聖連の傀儡。今の世界を作り上げた元凶の一人に思いを馳せ、しかしそこから得るものは何一つ無い。

そんな結論と共に、オレは進む足を止めた。背中から当たる斜光の暖かさを感じつつ、右手前に聳え立つ道路標識に目を向ける。中心部である名古屋を指す案内の文字に、オレの心身は楔を打たれた。

——この先にはもう進めない。そういう決まりだ。例え進めたと

しても、どうして進むのかと問われる。そしてその答えを、オレは持っていない。

「……寒いな」

季節は春だ。

それでも寒く感じるのは、もうすぐ夜になるからだろう。自分が冷え性であるのも原因の一つだが、最大の要因は、この心の落胆によるものだろう。

「まったく……、寂しがりやな子供のようだな」

そんな感傷はとっくの昔に捨ててきた筈なのに、それでも暗く感じるのは、やはり人としての性か。——いかな、夜に皆と一緒に教導院で騒ぐと言うのに、こんな気持ちでは駄目だ。少しは楽しいことでも考えなければ。

「オレは武蔵の人間だ。——もう、こことは関係ない」

三河の血を引いても、オレは三河を知らない。だからこそ、オレが思うのは、今の自分を取り巻くことだけだ。

そんな考えと共に、不意にそれを想像した。

今頃、学長は旧友と大事な話を終わらせ、関所に向かっている処だろう。時間的に考えれば、自分も合流に向かわなければならない。そして二人で武蔵に帰り、番屋のあんちゃん達と軽く挨拶を交わしながら、村山の賑やかな表層部上がる。その頃は既に夜になるだろう。そのまま教導院に向かつてもいいが、ついでに多摩にも寄って見よう。今日は花火があると聞いている。真面目な正純のことだ、皆と騒いで近所迷惑をするより、多摩で花火を見るのが性に合っているだろう。細かいところで律儀な奴だ。——そうだ、多摩なら、ついでにP - 01sとも挨拶を済ませた方がいいだろう。折角の三河来訪だ、帰りに御土産を買ってあげるのも良いだろう。最近読書を嗜んでいると聞いたから、本がいいか。どのジャンルが好みかは知らないが、あの子のことだから、どれでもいいのだろう。——
——そして待ち合わせの時間に皆と合流し、その後は幽霊探し。主催者はトリーだから、どうせ碌でもないサプライズを用意しているのだろう。皆の呆れる顔が簡単に想像できる。

予定に無い被害に頭を抱えるシロジロ。それを横で微笑みながら金勘定するハイディ。愚痴を言いつつ、指示を飛ばすネシンバラ。騒ぎの中で、皆にあれこれパシリされる点蔵。横で笑いながら、しかし自分も暴れているウルキアガ。溜息をこぼし、でもトリーの言うことには逆らえないネイト。無口で面倒な顔を浮かべながら、しかし一緒にイベントを楽しむノリキ。そんな中で、ネタ探しに余念がないナルガと、真っ先に先頭でムードを上げるナイト。その後ろで

は、相変わらずのマイペースで、しかし幽霊が怖くて縮こまっている喜美。仕事のついでに、何時の間にか自分が楽しんでいる智と、それを傍でビクビクしながら鈴とアデーレがついていく。そしてそれを、マサが呆れながらも見守っているだろう。外野では、個性とは裏腹に、置いていかれた者達をフォローするのはペーヤんとイトケン、そしてネンジ。腹を鳴らしている休憩組に、御広敷とハツサングがカレーを配っている。表層部での騒ぎにイライラしながら、何時の間にかミリアムが様子を見に来るかもしれない。それをトリーの馬鹿が引き摺り回して、また愉快な連中が輪の中に入る。もし余がいるなら、多分皆についていけず、横でソワソワしているだろう。

そして余りにも騒がしいため、最後は麻呂が何時もの不機嫌な顔で現れて全員に説教し、それを遅れてきた学長が暢気な顔で宥める。今日の夜番は真喜子だが、どうせ自室で酒飲んで倒れているだろうから、それを麻呂に見つけられて皆と一緒に校庭で反省の土下座し、その後は三河の花火を痺れた両足と共に見ながら、そのまま解散。

ああ、そうだ。それが日常だ。何時も通りの、誰もが当たり前と願っている幸福だ。そしてそれを容易に思い浮かべられるほど、オレもこの幸福に浸っていたのだろう。ならば、それ以上のものを望むこともない。帰る場所があり、帰りを待っている人たちがおり、その居場所を守りたいという思いもある。真つ当な人間としての、そうあって然るべき要素を持っているのだから、それ以外の余計なものはいらない。

だから、

「諦めてもいいはずだ」

もう、あの日の真実を求めなくてもいいはずだ。

日が沈む空を背に、オレは踵を返した。それと同時に、目に映るものがある。西の空を、幾つもの船が擦れ違うように交差する。

三河の警護艦と、三征西班牙の審問艦だ。

蠢く世界の舞台裏で、オレは日常に戻るための道程に行く。強く、楽しく、好きに生きる者達の傍へと。

/
/

三河南西にある一般用露天陸港。K・P・A・Italia旗艦である”栄光丸”に遅れて入港した三征西班牙の審問艦の上では、厳粛ながらも賑やかな雰囲気が漂っていた。教皇総長の護衛として派遣された護衛艦三隻と、政治的による牽制を担った審問艦は待機命令を下され。自由時間を与えられた学生達は次々と船を降りては、心身を休ませるための観光や貿易に勤しんでいる。

そんな中、多くの学生と擦れ違うように、二人の男女が船から港へ降りた。艦首下に巨大な懸架台を持った黒の長方艦から堂々と歩み出たのは、三征西班牙の主教導院、アルカラ・デ・エナレスの制服を着た三年生だ。

男子の方は金色の短髪を持った長軀で、女性はその傍に付き従い、そのシルエットは遠くから見てもやや大きい。両腕が巨大な義腕である黒髪の少女に、金髪の男子は笑みを向けながら質問した。

「やつと三河に着きましたね、？さん。まずは何処へ遊びに行きましようか？」

「私達は遠足に来たものではありませんよ、宗茂様。自由時間とは言え、15分以内に帰艦出来る範囲内で活動しなければいけません」

「解っていますよ、？さん。長い時間、船の上にいたから、気晴らしに言ってみただけです」

「ならいいのです」

少女、？の淡々とした返事に、宗茂が苦笑する。彼女の生真面目な反応を楽しみながら、彼は遠くにある三河の方角と、武蔵のある北の方角を交互に見た。

「今日の三河は色々賑やかですね。まさか武蔵の入港日と鉢合わ

せするとは」

「T e s 、 向こうは恒例行事でしょう。我々は教皇総長の新型大罪武装の交渉に同行させられただけです、何事もなければ、それで好かと」

「八大竜王が二人も同じ場所にいるのであれば、嫌な憶測も増えるでしょうね。それに私、アレはちよつと苦手ですね」

宗茂の言葉に、？は彼の視線の先にある三河を見た。苦手なアレという意味を考え、？はその結論を出す。

「新名古屋城のことですか。宗茂様、また先ほどの話を引き摺っているのですか？」

「そついう事ですかね」

？の問いに、宗茂は肩を竦める。先ほどの話というのは、入港前に二人で確認した、今回の三河来訪と大罪武装に関する話だ。

都市破壊級個人武装である大罪武装には、決まってある噂がある。

人間を部品として作られていると言われるそれに、宗茂は複雑な思いを抱いている。西国無双として名高い自分は、立花・宗茂とガルシア・デ・セヴァリオスの二重襲名者であると同時に、大罪武装”悲嘆の怠惰”^{リビ・カクスリブシ}を扱う八大竜王の一人だ。国の代表として、曰く付きの力は人々の疑念を集まらせるものにあると、宗茂は考えた。罪を破壊の力として具現した技術に、人なら誰でも眉を顰める筈だ。

「松平・元信公と新名古屋城それを成し遂げた。一体何を考えているのでしょうか、あの男は。こんなものを作り出して……」

嘆きのような宗茂の言葉に、？はやや俯いた。気持ち解らないわけではないが、解らないことに悩むことを？はしない。自分にとって、宗茂の居る場所が世界の全てであるため、？は何よりも宗茂を優先させる。だからこそ、何よりも大切な彼の悩みもまた、自分の悩みだと、？は思う。しかし、今の宗茂の疑問に答える術を、？は持っていない。

ならば、

「そんなこと、元信公ではない私達が考えても詮無きことです。——宗茂様。夜は花火と祭なのですから。今の内に見晴らしのいい場所を探しましょう」

「……そうですね。考えても仕方の無いことです」

答えが出ないのなら、それで良いと思う。煩惱は人の性だ。時には煩惱を持つて前向きに考え、先に進む剛胆さを求められるときもある。だから？は考えない。考えることを諦めるのではなく、答えが出るそのときまで、悩むこと以外の生き方をしてもいい筈だと。

「じゃあ、先ずは何処へ行きましょうか？ 祭ならやっぱり、屋台とか出るのでしょうかね？」

「……宗茂様。やっぱり自分が遊びたいだけなのは？」

/
/

「元信公。——そろそろ時間です」

朱色の残光が尾を引く町中で、声が響いた。

眼前に鳥居型表示枠を展開して連絡を取っているのは、侍女服姿を

した自動人形、鹿角だ。彼女は遠くへ散っていく気配を感覚器で感じながら、画面の向こう側にいる人物と会話をしている。

『ご苦労だ、鹿角。忠勝も最初の現場に向かっているし、これだと祭がバレルのは予定通り八時過ぎになるだろう。懸念事項はないな？』

元信の質問に、鹿角は「Jud」と答えた。しかし彼女はややあつてから、返事を取り消すように、こう言った。

「一つだけ報告が遅れました。元信公。——一人、イレギュラーが三河に居ります」

『それは？』

問いに、鹿角は間を置いた。記憶にある人物の姿を思い浮かべ、そして彼女ははっきりとした声で告げた。

しかし、

「Jud、——若様が、三河に戻っておられました。如何致しますか？」

『……』

確認を取る鹿角の報告に、元信は答えない。画面の中では、彼は考えるかのように目を細める。しかしそれもまた、何時も通りの表情に戻り、だが明らかに先ほどとは意味の違う口調で、彼は言う。

『今夜の祭に、賓客を招待した憶えはない。——解っているね、鹿角』

「……Jud。」

短い返事と共に、表示枠が閉じた。そして無人の静寂の中で、鹿角は西の地平線を見る。世界を相手にした三河最後の祭を前に、彼女は静かな足取りで、やがて訪れる宵闇へと潜り込んでいった。

/
/

「……戻って……ない？」

「Jud、夕刻前の登録データに該当人物はない。——まだ三河にいるんじゃないか？」

各務原の関所内で、オレは啞然とした表情で受付のカウンター前に突っ立っていた。それを受付のあんちゃんと年上のお姉さんが笑顔で返してくれる。いや、其処まで清々しいスマイルを向けられたら、こちらは顔を引き攣るしかないだろう。

とはいえ、参ったことになった。三河郊外辺りの散策を終わらせ、貨物の流通や三河で多発している怪異の痕跡を調査し終え、関所まで戻って来たのはいいが、どうやら酒井学長がまだ帰宅していないらしい。時刻は既に七時過ぎだというのに、今武蔵に戻らないと、関所が閉まってしまう。そうなったら一晩三河にお預けだ。明日の午前に出港する予定だから、時間的に猶予はあるが、後で武蔵さんが煩い。

「あのプーターローめ……、何やってるんだ」

御蔭でこれからの予定がメチャクチャだ。最悪、オレも三河に残る

かもしれない。花火や祭があると聞いてはいるが、生憎、特等席を独り占めする気はない。つか明日の相談役の会議書類がまだ残ってる。どうしてくれるんだ、あの白髪。今度禿にしてやろう、うん、そうしよう。

「如何なさいます？ 先に港へ向かうのであれば、手続きを申し込めますが」

受付の姉ちゃんの問いに、オレはうーん、と唸った。こんな遅くになっても帰らない学長も学長だが、護衛のくせに職務放棄したオレにも責任がある。ていうか、マジで何処へほつつき歩いているのやら。

「流石に手ぶらで帰るわけにもいかない。——少し探しに行ってくるわ」

「門限は八時ですので、その前によろしくお願いします」

はいはい、と手を軽く振って会釈し、早足で関所を出る。ここから三河に戻るには少し距離があるが、それでも行くしかないだろう。こついうことになるんだったら、加速系の術式を祈願すればよかつ

た。バランス重視の末に速度を抑えて来たが、そろそろそつち系の技能も欲しい。今度智に頼んでおこうか。とまあ、夜道は急げだ、分厚い硝子で出来たの自動ドアを潜り、オレは又一度、東南へ向かう道に行く。しかし関所からやや離れた時に、不意にそれが目に映った。

「……？」

視界の隅。山岳回廊の東側の山溪から黒い煙が昇った。位置的には三河郊外と名古屋を一望できる番屋がある場所だ。聖連が三河の監視として設けたもので、関所とは別働として機能しているが、

「狼煙ではない……、なんだ？ あ煙は……」

祭だからといってキャンプファイヤーでもやっている……、わけないか。今期の監視は三征西班牙の担当だ、統制が取れている真面目な連中が哨戒を余所に騒ぐ筈もない。だとしたら、

「火災か……っ！？」

その時、オレは確かに聞いた。思考を遮るように五感に響くのは震動と微かな音響。余人では感じ取れない小さな反応が、オレの脳に警告を訴えている。その情報に、オレは反射的に視線を其処へ向けた。

南。三河のある方角で、それがあつた。遠くに映る中心部である名古屋で、光があつた。何故だ？ 三河は人払いで、住民は全て郊外に移住した筈、なのにどうして光がある？ 祭の準備に、自動人形が何かしたのか？ 違う、遠目から見える光は遠近効果から逆算してもかなりの規模を持っている。さっきまであんな光は無かつた。

それに、

「今の震動と音は……」

爆発だ。確信はないが、あの燃えるような光が爆発によって生じられているという予感がする。幼い頃、何度も見てきた暴虐の陽炎が脳に浮かび上がる。その上、未だに煙を昇らせている番屋の方も余計に気が障る。流星にあれが花火だといわれても、誰も信じないだろう。

「……どうなっている？」

昼間までは、何事も無かった。なのに今、何かが起きている。学長もまだ三河にいるし、番屋の方も気がかりだ。それによく見ると、三河の光はかなり奥の位置にある。

「名古屋なら、オレにはどうこう出来ないが……」

そうでなくても、オレ一人では何も出来ない。

しかし、

「出来ないからといって、何もしないのも気が引けるな」

うむ。やる気はある。面倒事は嫌いだが、首を突っ込まない程度に野暮用を済ませればいい。となると、先ずは番屋に向かおう、距離的にはあそこが一番近いから、状況を確認次第、三河に直行だ。あれだけ派手な爆発なら、学長も既に三河から退散しているだろう。そうなれば、無駄足にも価値があるものだ。

「単なる事故であってくれば、良いのだがな」

言葉と共に、全速力で山道を走る。希望的観測を抱くとは、オレらしくないな。ともあれ、御節介は心労が絶えないのが、世の理というものだ。

/
/

「ハア、ハア……、——最悪です」

夜空の下で、少女の声がした。その周りでは、時間と場所的にとても宜しくない喧騒がざわめいている。武蔵アリアダスト教導院の前で、多くの学生や見慣れた住民達が騒いでは休み、術式を放っては避けている。特に騒動が激しいのが校舎内部で、間隔を持ちながら爆発や震動が校庭と橋上に響いている。そんな場違いな破壊を現在進行形で眺め、しかし休憩組である学生達は一向に止める素振りすら見せない。

そして体力切れで地面に突っ伏している者達の中で、息絶えた浅間が湿ったタオルを顔に被せながら、仰向けに倒れている。その横では、鈴がハンカチを扇子代わりに彼女の顔を扇いでいる。

「なんでまた、幽霊探しの途中からバトルしてるんだか……」

と、呆れたような言葉を吐いたのは、直政だ。彼女は右の義腕を腰に当て、息を上げている浅間に苦笑しながら言った。そしてそれを、反対側にいるアデーレが従士槍を杖代わりに身体を支えながら頷いた。彼女は、視線の先にある学生達と白いコスプレ集団を見据え、

「あれって、商店街の皆さんですよ？ —— 総長、また個性的なキャラ集めて……、これじゃあ、後で相談役の御仕置きが怖いですね」

「そう言えば、まだ結城の姿が見えないさね。 —— まだ帰ってないのか？」

「さあ……、時間前に、浅間さんが連絡を取ってみたんですけど、通神が繋がらないらしいので。多分、まだ武蔵に戻ってないのでしょ」

「ふーん」

気の抜いた直政の返事に、少し間を置いてから、浅間が身体を起こした。彼女は傍で自分を介抱してくれた鈴に礼を言いつつ、左舷の方角を見る。未だに姿を現さない幼馴染を思いながら、浅間は表示枠を開いた。

通神履歴に登録された新しい記録は結城宛だが、其処には圏外と記されている。時刻は七時。つまり一時間前に、結城は武蔵に戻っていないこととなる。

……おかしいですね……

結城は時間に煩い人間ではないが、遅刻をするような人でもない。少なくとも、用事があってイベントに参加できないときは、自分から連絡を寄越してくるのだ。その相手は大抵はトリーか浅間だが、稀に他の級友と連絡を取ることもある。

……今回は珍しいですね。

圏外ということも有るが、それは個人通神に限られた話だ。地脈通神を使えば、連絡手段なんて幾らでもある。なのに未だに消息が掴めない状況に、浅間は一種の歯痒さを感じていた。自分でも気付かない心の奥にある焦燥に、自然と眉尻が下がる。そんな浅間の落胆したような表情に、横にいる鈴が首を傾げながら問うた。

「だ、大丈夫？ も、もういち、ど。結城君と、れ、連絡、してみ、る？」

「え？ いや、どうでしょう……、用事で忙しいかもしれませんし。結城君のことだから、そのうち行き成り顔を出してきますよ……」

「……そう、かな？」

確認を取るような鈴の質問に、浅間は、きっとそうですよ、と笑みを返す。その小さな遣り取りに、不意に彼女は、はっ、と気付いた。今回のイベントの主役はトリーだ。明日の告白に対する前夜祭なのに、自分は祭の雰囲気余所に結城のことばかりを考えていた。

……い、いけませんね。これは……

何がいけないのかは解らないが、自分でも驚くくらいに、今日の浅間は彼のことを気にかけている。普段は手の届く場所にいる結城も、毎年誓って、三河に来るときは疎遠に感じてしまうのだ。言葉に出来ないその距離感が浅間にとっては怖くて、だからこそ、春先の神社の行事には何時も結城を誘っている。毎年半ば強引な手段で彼を引き込んでいることに負い目を感じながらも、本人は一度も嫌な顔をせず、神社の仕事を手伝ってくれた。何時の間にかそれが当たり前のようになってきて、浅間はたまに、自分が彼に依存している

かのように思えてくる。そしてそれを証明するかのように、彼の存在を感じ取れない今の状況に、浅間は微かな不安を抱き始めた。

「やっぱり連絡……、とつてみましょうか……」

はつきりとしなない、掠れたような口調で、浅間は表示枠を操作した。三河との地脈通神を選択し、神社の仲介を経て、結城へアクセスする。画面内に記された、通神接続中の文字を見据えながら、浅間は落ち着かない気持ちになっている。僅かな待ち時間が酷く長く感じ、周囲に響く騒がしい人声や震動が耳に障る。そんな息苦しい空白を待つこと数秒、新しく表示された文字に、浅間は姿勢を正し、しかし、

「通神……失敗……？」

という簡潔な四文字に、浅間は眉を顰めた。画面内には、地脈の混雑によって連絡対象との通神接続が出来ません、という情報が表示されている。

……通神祈願に優れているうちの神社のアクセスが利かない？

国家間の情報コミュニケーションの基盤である地脈通神を使っているのに、それが接続不可能という結果として返って来たことに、浅間は疑問を隠せない。そして眉間を寄せた浅間の表情に気付いたのか、直政とアデーレが彼女の背後に回り、共に表示枠を覗いた。

「なんさね？ これ」

「地脈通神が不通だなんて、今まで一度も遭ったことないですね」

即座に違和感に気づき、二人は浅間と揃って首を傾げた。背後で開かれているイベントとは真逆な雰囲気の中で、しかし不意に、大きな声が響いた。

「一体何の騒ぎだこれはあー！！ 麻呂の町でこの狼藉とは！！」

叫びに、空気が沈黙した。爆撃を受けた校舎も、ざわめきで覆われた橋上も、賑やかに満ちた校庭も、呆れて溜息を吐いている学生や住民達も、皆が一様に声の主のいる方向に振り向いた。

「全くもってけしからん！！ 誰だこんなことを始めたのは！！？
出てき賜え！！」

視線の先にあるのは、一人の王様だ。トランプのキングをそのまま引つ張り出したかのような格好をした男性は、静まった騒ぎを前にもともと厳粛だった表情を更に不愉快に歪ませた。そんな彼、武蔵王ヨシナオの矯正を求める言葉に、皆が頷くが、

「ああ？ なんだよ、皆、いきなり静かになっちゃって……、まだパーティーは始まったところだぜ？」

「また貴様かあー！！！！」

見計らったようなタイミングで、校舎最上階の窓から馬鹿の声が響くのと同時に、ヨシナオ王が叫んだ。それに気付いたトリーは、何時もの笑った顔を浮かべ、大きな声でこう言った。

「あ？ なんだ、あれ？ —— おい！ 皆見ろよ！ あそこに麻呂のコスプレをしている馬鹿がいるぜ！」

「何を戯けたことを言っておる、総長兼生徒会長！！ 此処にいるのは真正正銘、真の武蔵王ヨシナオ公であるぞ！！ —— 貴様こそ、早く降りてきたまえ！！ この騒ぎは一体どういうことだ！ 降りてきて麻呂に説明しろ！！」

「おいおい、偽者の分際で自分を麻呂呼ばわりだぜ、アレ。 —— 知らねえのかよ？ 麻呂は友達いないからこんなところには来ねえよ。オリジナルは今頃、部屋で伝纂器^{PC}開けてマインスイーパーやってんだぜ？」

「貴っ様ああー！！」

高度差10メートルを隔てた国のトップ同士の遣り取りに、皆が冷めた視線を向ける。ああ、またか、と誰もが溜息を吐き、しかしともあれ、武蔵王が出て来た時点で、今回のイベントは終了したようなものだ、と心の中でそう結論付けて、皆が小さい動きでその場を退散しようとする。トリーがヨシナオの注意を引いている間に、先に一足逃げようとしているのだ。しかし、ヨシナオを背に、中腰で退避しようとしている学生達の中で、不意に動きがあった。

それは、

「……あ、れ？」

足を止め、疑問の声を上げたのは鈴だ。彼女は左舷の方角、東にある各務原の山溪に顔を向け、そのまま動かないでいる。そんな彼女の動きに気付いたのか、先を歩く浅間が首だけ振り返り、鈴を見た。

「どうかしたんですか？」

「……うん。——あ、あそこ」

質問に、鈴は各務原の方を指差した。それに釣られて、浅間は視線を遠くにある山に向ける。夜の三河、明かりのない凹凸の地平線は底無しの暗闇に包まれており、湿った空気の匂いだけが風の流れに沿って伝わってくる。

「？」

なんの異変もない漆黒の空間を前に、浅間は首を傾げた。横では、鈴が各務原の方向を見ては視線を離さない。一体あそこに何があるというのかと、浅間が考えたそのときだ。

闇の中心で、光が灯った。

遠くから見て、まるで蠟燭の炎が点けられたかのような光は、不規則な揺れを持った炎だ。各務原のサン山峰に、炎が燃えた。

「おい、なんだあれ？」

「火？ どうして山の真ん中で燃えてんだ？ 爆発？ それとも火事か？」

「あのあたり……、聖連の番屋があるところだろう？ 下にいる連中、気付いてないのか？」

退却する人達の中で、異変に気付いた者がいた。そして遅れて、皆が足を止めては、東の方角を見る。遠くに見える炎は時間が経つに連れ勢いを増しており、それに呼応するかのように、人達の疑問や不安もまた、徐々に大きくなっていく。どうした、と。何があった、と。答えを求めようと、帰ってくるのは更なる疑問だけだ。

そして、

「……っ、結城君」

ざわめきの中で、浅間はまだ表示枠を開いた。通神回線を開き、連絡を取るのは勿論、武蔵の臨時相談役だ。突発事項に対して、彼の判断力は頼りになる。同じ考えを持っているのか、他の生徒達も浅間の動きに注目する。

しかし、

「っ……、駄目です。やっぱり繋がりません」

接続不可。焦りを含んだ浅間の声に、追い討ちをかけるかのように、遅れて声が続いた。

「三河の商工団とも連絡が取れない。———どういうことだ？ 自動人形がない筈無いんだが」

言葉を作ったのはシロジロだ。彼は無数の表示枠を眼前に展開し、様々な情報を呼び出しては閉じていく。何かが起きている、という確実な異変に、浅間は三河を見据えた。

未だに姿を見せない少年と、その因縁の土地に不穏な予感を感じな

がら。

/
/

「どういうことか、説明してくれるか？」

砂埃の被った道の上、民家や屋敷が照らす人工の光の傍で、酒井は目の前にいる人物に問いかけた。人気のない三河の町中では、一つの動きがある。それがなんであるかを確かめるために、彼はその答えを持つ者を見据えた。

そして考えた、午後の食事の後、忠勝と結城が先に席を立った食堂で、酒井は残された榊原と話をした。内容は姿を見せないもう一人の松平四天王、井伊・直政のことと、去年、突然三河に乗り込んだ自動人形、P-01sのことだ。対話の後に色々と解ったことはあったが、それでも疑問に思うことが幾つもある。そのために、更なる詳細を求めて、榊原が今夜に纏まった資料を自動人形に渡してくれると言ったが、現実は事情が違った。待ち合わせの場所で八時近くまで待ち、ようやく伝言役である自動人形が現れたのはいいが、まさか渡されたのが白紙の束というのは流石におかしかった。堅物で生真面目な榊原に限って、こんな意味の解らない行動をするはずがないと思った酒井は、急ぎ三河郊外にある彼の屋敷に来たのだが、そこには榊原の姿はなかった。

あるのは、

「榊原が消えた。——部屋に二境紋が残されている。”公主達”
によって、神隠しに遭った。一体全体、何がどうなっている？
だ
っ
ち
ゃ
ん」

「お前は老けたな、酒井。——グランヘット大総長も既に過去形か」

そして己の問いに、声の主、本多・忠勝は不敵な笑みで嘆きの言葉を
送った。正式装備である鎧を身に纏った彼は、武者の気迫と共に
酒井の前に立ちはだかっている。そしてその隣りでは、侍女服姿の
鹿角が無言で付き添っている。合戦前の静けさを漂わせる二人に、
しかし酒井が気になるそれではない。頬を伝う熱い汗が示す焦りと
疑念、そして不安の矛先は二つある。

一つは、

「神格武装”蜻蛉切”。こんな時間にそんなものを持ち出して、槍
の修行とかじゃないよな？」

言葉に、忠勝は笑みを作った。彼は右手に握る長大な槍を地面に突き、酒井にこう言った。

「これから殿の御遣いでな、少し準備をしてきたところだ」

「……準備？」

「ああ、あれだ」

眉を顰める酒井に、忠勝は顎で北西の方角を示した。其処にあるのは、三河を監視するために聖連が設けた番屋がある。山の上で黒い煙を昇らせ、炎を噴き上げているその光景に、酒井に身構えた。右手を腰の後ろに忍ばせ、短刀の柄を握る。

「連中の対応が生温いんでな、予定より早く済ませてきた。そんでついでにお前の顔を見に来たわけよ」

「……何故だ？」

何故このようなことをする、という意味を含めた質問に、忠勝は地面を見た。その仕草に、酒井は懸念しているもう一つの要素に意識を向ける。

それは、

「気付いているだろう？ 酒井。地面の奥底から伝わるこの響きが」

言葉と共に、突然、大気が揺れた。空間全体を大きく長く、しかしゆつくりと圧迫してから浮き上がらせるような震動に、酒井は唾を飲んだ。

知っている。地殻と、その上に構築された地面を波が打つように揺らすそれを、酒井はよく知っている。血管の鼓動のような定期を持つのは脈だ。人体に流れる命の音と震動を、何千、何万倍というスケールで引き伸ばしたのは地脈の響きだ。

「地脈が揺れている……、どうなっている？」

「そんなに驚くことではねえよ。——地脈炉を暴走させているんだからな。さっき三つ目がイっちゃったから、ようやく此処まで来たって事だ」

告げられた言葉に、酒井の思考が止まった。

地脈炉の暴走。確かに聞こえたその一言に、今まで燻っていた酒井の熱が一気に冷めた。そして信じられないかのように、啞然とした表情を浮かべた酒井に、忠勝が答えた。

それは、

「今、新名古屋城では膨大な量の流体が蓄積されている。方向性を持たない空間変異素子が互いに”変換”し合い、そこに更に大量の地脈を送り込んでいるんだ。あと二つで、全てが始まる」

あと二つ。それは今現在でも暴走を続けている地脈炉の数だと、酒井は判断した。残りの地脈炉も爆発すれば、そのあとの光景は想像したくない。

かつて、重奏統合争乱が起きる前に、重奏神州の露西亞にて地脈炉が暴走自壊したことがある。そして似たようなケースとして、八年前に信長の襲名者が現れたP・A・ODAもまた、地脈炉の暴走を利用して領地内に残るムラサイ反勢力を滅ぼした。これらの陰惨な事件により、地脈炉は現在では三河とP・A・ODA以外の国では建造・所有を禁じられている。理由は暴走の際の危険性と、地脈の乱れを引き起こすという問題があるからだ。地脈炉は土地に流れる地脈を強引に吸出し、その土地の環境を悪化させることにある。三河で怪異が多発するのも、それが原因が一つだ。

しかし、今この三河を取り巻く危機の中で、本当に危惧すべきなのは、

「地脈炉暴走なんて……正気か？ 過去の事件では、たった一基で半径数キロの土地が消滅したんだぞ？ それを五つも行ったら、名古屋どころか三河が消えるぞ！！」

「だからお前は老けたって言うんだよ」

酒井の叫びに、忠勝が笑って告げる。

「見るよ、あれ。三征西班牙の武神だ。予定にない地脈炉の稼動に気付いて、偵察を行って来たんだろ？ 対空装備で上がってるたあ、運がねえ奴等だ。番屋の連中も山岳装備で纏まっている辺り、三河に乗り込んで優勢は取れねえ」

空で、十字型の翼を持った赤い巨人が三河の上空を旋回している。状況から見れば、まだ聖連は事態の深刻さに気付いていないだろう。しかしそれもまた、時間の問題だ。

「今の三河に人はいねえ。居るのは自動人形と我達だけだ。――井伊に続いて、榊原も消えたのは惜しかったがな、だがまあ、仕方ないか」

「惜しい……だと？」

「ああ、――我は殿の命令で動いているだけだからな。井伊や榊原は何か知っているようだが、我は何も聞かされていない。ただ、殿から聞いているのは……」

一息ついて、忠勝が言った。再び脈打つ、大地の鼓動と共に告げたのは、

「これが、創世計画の始まりだってことだ」

/
/

創世計画は、P・A・ODAが世界に銘打った末世解決のための国

策だ。しかし実態の掴めない末世に対して、計画の詳細と具体的な法案を提示しないP・A・ODAに、誰もがその信憑性を疑っている。勿論、酒井もまたその一人だ。理解を示さない手段は単なる口先の戯言だ。だからこそ、酒井は忠勝が告げた言葉の意味を理解しかねた。

創世計画は、P・A・ODAが打ち出したものだが、そのP・A・ODAと同盟しているのは三河だ。そして今まで、P・A・ODAは一度も計画の全容を表に出さない。それはどうしてか？ その疑問に対する答えは、実は簡単なことではなかったのか？

「創世計画は、三河が、——P・A・ODAに持ちかけた計画とでも言うのか？」

「ようやく、一つは理解出来たか。——まあ、我也知ってるくらいの話だ。気づかない方がおかしい」

満足した顔に、忠勝は踵を返した。終始無言を貫き通した鹿角を連れ、彼はこの場を去ろうとする。それを、酒井が構えのまま動いた。短刀を小さい軸運動で引き抜き、足を前に一歩踏み込んだときに、

「——」

眼前に、蜻蛉切の穂先が突きつけられた。

「やめとけ。——結ぶぞ」

「っ……、何処に行く気だよ？」

先制をかけられて事に、酒井は動かないまま問うた。その声に、忠勝は振り返らずに応える。

「我はお前に構っている暇がねえんだよ。——直ぐにでもK・P・A・Italiaと三征西班牙の部隊がやってくる。これから鹿角と迎撃にいかなきやいけねえ」

「馬鹿野郎！——その間に地脈炉が暴走したら、お前達はどうすんだよ！？」

酒井の叫びに、忠勝は僅かに視線を向けた。肩越しに伝わる武者の

眼光に、酒井は答えを予想できても、それを認めたくないと思う。

しかし、それでも、

「舐めちやいかなあ、酒井。これは殿が望んだことだ。それをただ守り抜き、そのための勝利を手にするのが我の忠義だ。——理由なんて関係ねえ、我の生き様よ」

強く、楽しく、好きに生きるとは、誰が言ったか。

そんな言葉を脳に浮かべながら、酒井は目を見開いた。視線の先では、忠勝が嬉しそうに笑みを浮かべている。

「忠次。次へ繋げるのがお前の忠義だろう？ 我は、お前が武蔵の学長で良かったと思っているよ。——次の世代を導くのがお前の役目なら、ここはもうお前の居場所じゃない。先に過去へと向かう我らの背中を、ジッと見守ってくれ」

そして、

「時が経ったら、お前もいずれ来い。そして教えてくれ、創世計画

が何なのかを。我らが為したことが、果たして世界を救う契機になれたのかを……。——もしそうだとしたら」

そのときは、我を褒めてくれ。

「ダっちゃん」

その一言と共に、忠勝は歩み出した。

ゆつくりと、しかし確かに距離を開けるその足取りを、酒井は止める術を持たない。手の届かない先へと向かう友に、酒井が出来るのは叫ぶことだけだ。

「娘、どーすんだよ!? 他にもいろいろあるだろうよ!? お前は——」

言葉が止まった。

理由は簡単だ。先ほどまで、一定の間隔を持って生じていた鼓動が変わった。

あれほどまでに大気を揺らしていた脈絡が、今度は地殻の底に蓄積され、同時に緩急をつけながら激しい勢いで浮かび上がってくる。

臨界点に達したエネルギーの波動は止まることを知らず、煮え切らない感情を発散させるかのように地表を達し、

「!？」

その瞬間。三河が砕けた。

血管が破裂するかのように空間が弾け、広大な大地がまるで薄脆い煉瓦のように？げ割れ、

「これは——」

ここから、三河最後の秒読みが始まる。

第五話　　祭り前の喧騒　（後書き）

おお、クロよ、倒れてしまうとは情けない、とリアルで言われたクロです。

次回からテンション上げるために全裸準備してたら、季節が冬であることを忘れていたぜ。いけね。

とまあ、相変わらず駄文ですね、今回。

六話からバトル一直線ですから、どうしても嵐前の静けさが静か過ぎて、グダグダな感じになってしまします。

その辺勘弁して貰いたいけど、クロの実力不足が原因なのも否定できない。

やべ。

何時の間にかライフがゼロになってきてるぜ。

では、ライフ回復に備えて、また次回御会いしましょう。

P・S：勝手に妄想してたけど、結城に声を当てるならどの声優が御似合いかな？

第六話　若姫と侍女の舞い

空を照らす光がある。

アマテラス

天壤を焦がす真夏の太陽にも似た黄金色の垂幕は、しかし天照の輝きとは真逆な意味を持つ不安を人々に植え付けた。

ざわめきと喧騒、ただただ繰り返され、増幅して止まらない猜疑と困惑の嵐。花火の噂に釣られて集まった者達は、その期待値を遥かに越える異端な空気に浸かる。

そしてその中で、大きな音が響く。

耳鳴りに似た周波動は人工的ではなく、空気を、地面を、町を、船を、木々を、川を、生き物を、心を震わせた。寄せては返り、来ては戻る揺れを伴い、圧力を纏ったそれはまるでいだいだら法師の悲鳴のよう。

光は宵闇の空を掴む懇願の手の平みたいに地面から昇り、響きと揺れは激情を孕んだ怨嗟の如く、一つの場所へとその千鳥足を向かわせる。

「三河が……」

「……割れている？」

スケール感の狂った聴覚と視覚のハーモニーに、誰かが呟いた。場所は右舷二番艦・多摩表層部。山に遮られた三河の方角を数多の人物達が見ている。これから始まる筈だった宴祭に心を踊らされた

住民達は、開かれた屋台や手に持つ土産や食べ物を思考の片隅に置いて行き、薄闇の中で自己主張に余念がない残光に見事心身を奪われた。大衆の放つ蠢きに似た雰囲気は祭とは程遠くても、確かな賑やかさを衰えさせないのは流石観光区画といったところか。

そしてそんな中、見知った影が見える。決して見晴らしが良いとは言えない甲板の片隅で、チェス盤の駒のように突っ立っているのは正純とP - 01sだ。人込みに視界を遮られた対照的な色を持つ小柄な体格は、しかしそれでも地平の先にある異変を確認することが出来た。

「……どうなっているんだ？」

既に幾人かが呟いた台詞を、正純はまた繰り返す。飽きることなく、異なる人達の口から吐き出される疑問は、ただその答えが出てくるまでの時間を享受する。そして大衆意識の一端を担った黒長髪は、無視できない懸念を思考の海に泳がせた。

「酒井学長に……、結城は戻っているのか？」

地平の先で、バラバラに引き裂かれる三河の轟音が鳴り止まない。傍にいる自動人形は終始無口で、しかしその足の裏に潜んでいる黒藻の獣は、その感覚器を震えさせては集合意識の不安を存分に表し

ている。

「正純様。――あれが、花火なのですか？」

冷性で無感情な表情のまま、首を傾げながら問うP - 01sに、正純は言葉が出ない。

花火？ あれは花火なのか？ 解らない。そうだとしても、そうではなくても、今の異状を花火や祭という文字で解釈するには無理がある。何れにせよ、これ以上ここに居てはいけない。静かな夜をざわめつかせる地殻の咆哮に、飽きることなく人々が広場や甲板に集まっている。このままでは、網に獲られた鰯イワシの大群のようになりかない。皆よろしく押し競饅頭なんてことは避けたい。

「青雷亭ブルーサンダーへ行こう。あそこには神肖筐体モニタがあるから、こちらよりは状況が解りやすいだろう」

提案に、P - 01sが頷いた。白と黒は異変と人込みから背を向け、広場から離れようとする。しかし急ぎ足である正純と違って、自動人形はマイペースだ。群集の隙間を縫うように潜り抜ける正純の後を、P - 01sがゆったりとした歩調で続く。そんな二人の足下では、黒藻の獣が、

『おそき』

という言葉と共に、路傍にある側溝に小さな身を隠した。それをP
-01sが手を振りながら見届ける。

「……急ごつ」

足の止まった自動人形を、正純が促す。焦りと戸惑いを含んだ自分の口調に、正純は歯痒い気持ちを抱いた。霧がかかった様な当惑の空気に、自分はただ、事実が確認できる場所を探るしか出来なかった。

/
/

闇の中をただ只管走る。燃え盛る木々や番屋を背後に大きく振りきり、目指すのは森の先にある三河だ。夜空は時刻に不釣り合いな色に染められ、しかしそれが逆に目的地への道標として、闇夜を駆ける

結城を誘う。

場所は三河郊外と名古屋の間にある樹林。遠くにある新名古屋城の上空を旋回する武神を確認し、彼は事態の深刻さを嫌というほど理解した。

「聖連が動き出したか……」

果たしてタイミング的には有利か？

先ほど監視用の番屋を見て来たが、その状況は余りにも宜しくない。死人や怪我人が出てないのが幸いだが、その代わりに御陀仏になつてくれた輩がある。御蔭様で少しは今の騒ぎに対する答えが見えてきた。壊滅された番屋で、警備体制が敷かれた状態で攻撃を赦された三征西班牙の学生達は、既に安全な場所へ移動してある。見晴らしのいい山道の真ん中だから、後続の部隊が来ても直ぐに対処できるだろう。

その代わり、早すぎたキャンプファイヤーには壊れた自動人形共を放り投げておいた。三河の侍女服を着た代物が聖連の番屋に現れた時点でおかしいのだが、それがこちらを攻撃してくるとなると容赦は必要ないだろう。

「三河を監視している番屋に、三河の自動人形が襲撃した。――
解りやすい事情だ」

三河自動人形は松平家当主である松平・元信の所有物だ。彼女達に命令を下せるのは彼しかおらず、それは元信が聖連に反抗したという事実を表している。先ほど感じた大きな地響きと震動も、元信が原因だということは予想出来る。個人で手に負えない事態には、物量も戦力もある聖連に向いて貰うしかない。幸い、西の空では三征西班牙の護衛艦を確認することが出来た。行動が予想よりも早いのは、流石現役の強国といったところか、非常事態にぬかりはない。

「……見えてきたか」

樹林の先に光が見えた。

身を大きく乗り出して木々の間を衝き抜け、その先に広がるのは三河とその中心部にある名古屋だ。闇色をした空とは対照的な光を発している三河に、天地が逆さまになったような倒錯感を憶える。半球状の光霧に覆われた三河は、地上にその半分を埋める太陽に似ている。しかし、それ以前に最も結城の目を引いたのは、血管の如く罅裂かれた大地と、それを花蕾のように咲かせた名古屋だった。

「無事なのは名古屋だけ？ ……これってまさか……」

地脈炉の暴走だ。爆心地である新名古屋城が無造作に地脈を吸い上

げているため、それを中心に逆流した流体が地殻を侵蝕・変換している。資料や文献で大まかの現象や特徴は知っているが、郊外近くまで影響を及ぼすなんて規模は聞いたことがない。

「新名古屋城の地脈炉は全部で五基。——その全てを暴走させる積もりか？」

冗談ではない。

現在記録されている地脈炉暴走事件の中で、最も新しいのは八年前のムラサイ反勢力掃蕩に、P・A・ODAが使ったものだ。そのの五倍という規模と威力なんて、想像したくもない。

こんなことをするという意図は掴めないが、国一つが消滅するという事態は宜しくない。考えるまでもなく、結城は地面を強く蹴った足裏に柔らかい土の感触を残しながら、出来る限りの最高速で三河の町を突き進む。

目指すは中心地・名古屋。直線距離としては目測で約4キロ。国道線に沿って走り、並みの加速系より速い自分の足なら10分足らずで辿り着くが、番屋のときと同じように、自動人形が邪魔に入るかもしれない。

郊外の坂を下り、アスファルトの地面を踏み、伝統的な長屋や木造の建物の間を抜ける。視界の隅では、聖連の武神が一定の高度を保ったまま、哨戒機動を行っている。今にでも地上に降りて来ないのは、空間に充満する、指向性を持った流体に干渉されたくないのだろう。

今現在、三河では名古屋に向けて、大気や地殻に存在する流体が凄まじい勢いで吸収されている。武神は人工駆動系や関節で動く鎧武

者であり、有人機は搭乗者を情報分解して機体の制御管理系に流し込むことで武神を操作する。そしてその操作に必要な循環系エネルギーが流体だ。三河を包む光は吸収されている流体の流れが生じたものであり、それに触れるということは武神の出力が空間の流体と共に喰われるということを意味する。対空装備と機動性を重視した十字翼の武神は防護板が薄く、地脈の干渉を受け易い。対処するには、最低でもスラスター系を保護できる装甲服が必要だ。そしてその方法に行き着いたかのように、西の空で動きがあった。先ほど、確認できた三征西班牙の護衛艦が接近して来たのだ。武神の装備と援軍を乗せた船は二隻。その巨体を確認次第、空を舞う三機の武神はその航路を護衛艦に向け、

「!？」

次の瞬間。前方の道路上で轟音が響いた。

轟音は爆発よりも短い快音を響かせ、ドップラー効果によって、風を切る鋭利な音を空の彼方に送らせた。

砲撃だ。

火薬の炸裂音とは程遠い、音の壁を突き破ったソニックブームを発するのは形式不明の対艦滑腔砲。造型が無骨で、砲身が長いそれは貫通力よりも衝撃力に重点を置いており、初速の速い砲弾は数秒間の間を置いて、西の空で破壊の業火と爆音を奏でた。

そして、護衛艦の一隻をたった今、一撃で轟沈させた存在を、結城は十メートル離れた位置で確認した。アスファルト材とコンクリート、そして鉄筋や石材で強引に固めた大砲を携えたのは侍女服姿の

自動人形。そこら辺にある量産型とは違い、一目でその独特性を見分けられる特徴に、結城は眉を顰めた。視線の先、黒い角型の感覚器を持ったのは見知った造型を持つ女性。昼間に出会った、名前を覚えただけの、心ではそれなりに評価していた人物。

「本多家の、鹿角さんか……」

三河自動人形統括。武者の力を持つ、魂から生まれた者を前に、三河最初の戦いが始まる。

/
/

「Jud、本多家御用、兼三河自動人形統括の鹿角です。こんな場所でお会つとは奇遇ですね、若様」

目の前、道端でうつかり顔を会わせちゃった、みたいなノリを淡々とした口調で言う鹿角さん。昼間と違い、オレに対する呼称が『若様』に変わったということに、オレは目を細めた。

今までそのような呼び方で呼ばれたことはなく、しかしその意味を

理解できないほど、オレは自分を忘れてはいない。

「その呼び方、やはりアンタも気付いていたか……」

「Jud.。——十二年前、酒井学長の手引きで武蔵に渡った少年のことは、当時の三河重臣ならば誰でも知っていることです。私の方は、後に忠勝様から聞いたので」

「なんだ？ それはつまり、昼間の食堂で、オレのことを知らないのは本多・二代だけということか？ —— たく、揃いに揃って器用に隠しやがる」

「その場で話しても詮無きことです……、—— 理由はお解かりですかと」

解る訳ねえだろ。と言いつ返したいところだが、ここで無駄話をして
いる暇もない。地脈炉暴走のカウントダウンが迫っている中、足を
止まらせる事態は等しく障害だ。それに目の前の女はたった今、制
式武装を積んだ聖連の戦闘艦を一撃で撃ち落したのだ。先ず敵とし
て考えた方が妥当なのかもしれない。

「時間稼ぎの問答に付き合う気はない。——率直に答える。松平・元信は何を企んでいる？ 地脈炉を暴走させた意図はなんだ？」

「Jud、それは私にも解りません」

即答された言葉に、オレはやや目を見開く。

自動人形は嘘をつかない、主の口止めがある場合は、答えられないと言うのがセオリーだ。それを解らないと言うのであれば、それは本当だ。機械式の解答方に聞こえるが、それは彼女独自の思考法に基づいて出た結論だ。残念ながら、この瞬間でこの女の利用価値は、オレにとつてはゼロとなった。

「そうか……、ならば、元信本人に聞いて確かめさせて貰おう」

足を一步前に出す。

それと同時に、鹿角さんは右手を素早く振り上げた。腕の動きに連動するように、地面の構造材が跳ね上がる。アスファルトの地面が砕け、礫石の散弾が重力制御の反動によって撃ち出された。空気と地面を大きく挟る攻撃に、オレは初動を確認した時点で、既に回避行動に移っていた。

鹿角さんが手を挙げたのと同じタイミングに、身体を射角の反対側である方向に側転した。

「見事な御手前で」

「……」

攻撃は避けた。こちらは無傷。しかしオレの背後。射線上にあった一階建ての家屋は無事では済まされなかった。

構造材の弾丸に薙ぎ払われた木造建築は、蜂の巣のように穴だらけとなり、コンマの差を置いて崩れ落ちる。情け容赦ない、確実に殺すための一撃だった。それを一瞬の迷いなく繰り出す鹿角さんに対し、オレの次の動きは早かった。

背中にある長棍を右手で引き抜き、そのまま鹿角の足下に向けて投擲する。そして同時に前へ出る。

「！」

反撃に、彼女は対艦砲を手放し、後方へと跳躍した。そして元居た地面に、二メートル長の棍棒が突き刺さる。強烈な衝撃力を纏った攻撃は地面を抉り、アスファルトの地面を爆散させるのと同時に、邪魔な対艦砲を押し折る。

そして砂埃が舞い上がり、鹿角が地面に着地したのと同じ瞬間に、オレは長棍を地面から引き抜き、折れた対艦砲の本体を蹴り飛ばし

た。

残骸と化した黒い大砲は、それでもその質量は武器として足りえる。大気を突き破り、砂埃を衝撃で吹き飛ばした砲身は鹿角目掛けて突貫し、その人工的で華奢な身体を粉碎しに行く。そして、

「剣を指運に！」

叫びと共に、目の前で鹿角は両手を掲げた。

その動きに、砲弾と化した砲身が彼女の目前で止まり、砕け、二つに割れた。そして空中で制止した鉄と礫の固まりはその形を歪ませ、原型を留めない戦術兵器はまるで粘土のように圧縮される。やがて成し遂げられるのは黒い板状の塊。鋭利な先端を持った二つのパーツは、切断力に特化した短剣そのものだ。

「器用な真似を……、その粋の良さ、惚れるじゃねえか！！」

「Jud、お褒めに預かり、光荣です！」

近接武術師を前に剣と来た。ならば出し惜しみはしない。左腰の長剣を引き抜き、こちらと同じ手数で勝負に挑む。

飛ぶように身体を前に衝き出し、リーチの長い長棍で先手を打つ。それを鹿角は肉厚な刀身で弾く、そして同時にもう一本の剣で突く。それをオレは長剣で外側に受け流し、カウンターとして右足で蹴り出す。それを鹿角は左足で踏み止め、こちらの脚力と反動を利用して後方へと跳び退る。そしてその後を、オレは全力のダッシュで追う。

そこからは、剣戟の踊りだ。

名古屋を前に、互いが併走するかのように三河の町を駆ける。足は止まることなく、武器を持つ両手は空間を薙ぎ払うように、目視できない速度で交差した。火花が、斬撃が、金属のぶつかり合う音が、余波で切り裂かれ、蹂躪される建物や器物が空を舞う。

意識を鹿角に集中し、オレは五感の全てを彼女との踊りに注いだ。そして視界の外では、また動きがあった。

西の空に残る護衛艦から、武神と歩兵が降ろされた。三河崩壊の前に、戦況は激化する。

/
/

『地脈炉暴走確定の時間は、予測であと十五分です』

顔を横に展開された表示枠から伝わる音声を耳に入れ、一人の青年が走る。その速度はまさに風そのもので、彼が持つ字名の意味を損なわない技量を表している。

青年の行き先は三河。夜の大地を混沌に塗れさせた元凶のもとに、金色の短髪を持った彼、立花・宗茂は駆け抜ける。そしてその背後では、彼の妻である立花・？が、遅れを取らない距離で共に走る。

「T e s 、こちらの速度でなら、直ぐにでも到着します。先陣が上手く切り抜けていれば良いのですがね」

司令部からの情報に、宗茂は頷く。東の空では黒い煙が大きく吹き上がり、しかしそれでも三河の発する輝きを錆付かせることはない。悪化していく状況に、不意に、後ろにいる？が言葉を作った。

「宗茂様、先に行ってください」

「？さん？」

相方が告げた台詞に、宗茂は視線を超越す。しかしそれに構わず、？は言葉を続ける。

「時間は刻一刻と迫っています。今動けるものの中で、火力と速度

を両立出来ているのは宗茂様です。——私も直ぐに追いつきますので、どうか先に三河へと急行してください」

「?さん……」

言葉に、宗茂は心の中で頷く。

確かに、術式を使い、己の字名である”神速”の力を発揮すれば、直ぐにでも三河に辿り着ける。地脈炉破壊にも、大罪武装である悲嘆の怠情を使えば成功できる。

嫁を置いていくのは宗茂としては非常に忍びないことだが、状況が状況であるがゆえに、ケチをつける暇も無い。ならば善は急げだ。

「祭があると思ったら、本当にとんでもない祭になってきましたね」

「そうですね。——しかし近所迷惑になる祭には、少しお灸を据えねばなりません。今期の三河監視は三征西班牙の担当ですから、張り切ってやっちゃって下さい」

「だとしたら花火も無しですか。——私、綺麗な花火を期待していたのですが……、仕方がありませんね」

嘆息と共に、宗茂はギアを上げる。
地面を蹴る力が増し、風となった身体が烈風に昇華する。

「?さん! 帰ったら私達で宴会を開きましょう! 三河の残念な
花火とは違う奴を用意しますよ!」

「それは楽しみですね」

返事に、宗茂は笑みを浮かべた。

同時に、彼は十字型の表示枠を展開し、術式の発動に移る。その間
にも、後方の?との距離はぐんぐん開かれていく。

「元信公。……何故、国を滅ぼすようなことを? そんなことをし
て、何になるんです?」

押さえていた疑問を口にし、宗茂は速度を上げ続けた。

徐々に近づいてくる三河の光を前に、決戦への参加者は増え続ける。

/
/

忠義は、その行為にこそ意味があるもの。

その言葉を頭の中で吟味しながら、本多・二代は居た堪れない気持ちを余していた。山岳回廊の上空に浮かぶ三河警護艦の艦橋で、二代は通神や神肖筐体が示す状況に心を悩ませている。

聖連が布いた緊急態勢に、三征西班牙の部隊が三河に突入した。地脈炉暴走の真相は未だ掴めず、非常事態内において、警護隊である自分達は三河に引き戻すべきなのだが、聖連が関るとなると迂闊に行動できない。場合によっては、自分の判断がただでさえ劣勢に陥っている極東の立場を、更に悪化させるかもしれないのだ。

……この不甲斐なさに、こつも齒痒い思いを強いられるとは……

三河の危機に対して、聖連の処置は素早く、且つ的確であるが、それ故に、その意図がはつきりと見えてくる。それは同時に、今の極東を取り巻く現状がどれだけ自分達に不利なのかを示している。

地脈炉の暴走は、最終的に被害が起きるか起きないかで、聖連としては対処に困らない。何れにせよ、今回の事件の責任を極東は背負うこととなり、そしてその中で、必ず極東は何かを失う。それが権力か、それとも物資か、或いはそれ以上の何かか、政治に疎い二代には解らない。しかしだからこそ、何かをしたい気持ちがある。

……状況的に、武蔵が危険で御座るな。手は打ってあるで御座るが、

それもその場凌ぎに過ぎないで御座る。

三河が極東代表なら、武蔵は極東の領土であり、国そのものだ。高度な貿易能力と技術力を持った航空都市艦は、松平家当主である元信公の所有物として認定されており、武蔵の全ては、その上に住む住民達を含めて、三河の財産となっている。前々から聖連は武蔵そのものを覬覦^{きぐ}しており、それが今になって、彼らに武蔵を手に入れられるかもしれないチャンスを与えてしまった。

極東の民として、武蔵が聖連の支配下におかれることは避けたい。故に二代は、聖連と武蔵の間に自分達を置くことにした。

有事の際には、自分達が聖連の代わりに動けば、被害が拡大することはない。政治的に力が無く、武力しか持たない自分達では、どんな形でも民の安全を保障しなければならない。例えそれが、本心に反する事態となるうとも。

……これが、今の拙者の限界で御座るか……

本当に心配なことは山ほどある。

父や鹿角。三河郊外に住む者達。職務に引つ張られて、二代は自分を殺さなければ冷静を保てないでいる。自分でも無理を感じる中で、不意に彼女は、昼間出会った少年の言葉を思い返した。

『自分を卑下して、私は弱いから、強い貴方の傍にいさせて下さい
的な発言は無しだ』

だから強さを願う。他の誰でもない、自分だけの強さを。

『そんな履き違えた想いに、オレとお前の人生をかける積もりは無い』

対等でいられようと、そう決心した。だからこそ、今の状況も試練として乗り越えたい。

『もっと自分を磨いてくれ。オレより強く、魅力的な男を惚れさせるほどに、自分を生きてくれ』

そうしたいのに、今の肩書きがそれを赦さない。三河警護隊総隊長の名が、二代という人物を、ただの少女として認めない。

……結城殿。今一度、二代の脆弱を見逃して下され……

彼の心強さが恋しい。

憧憬が恋慕に変わる日はまだまだ長いが、それでも二代は、一度は自分に道を示してくれた者を思わずにはいられない。

だからこそ考えた。午後に別れた少年は、その後無事に武蔵へと帰れたのだろうか。そして出来れば、もう一度彼に出会って、弱い自分を叱って欲しいと。

/
/

瓦礫と砂埃が飛散する。

突風と衝撃に運ばれた町の残骸は、踊り子の周囲で賑やかに騒ぐ観衆のように、二人の舞踏者を囲んでは地に落ち、吹き上げては宙を舞う。

建物は壊され、柱は切り裂かれ、地面は斬撃の爪痕を残して、ただただ優雅に舞う若姫と侍女を名古屋まで見送る。

「——若様はやはり、元信公の敵なのですね」

黒角を持つ侍女、鹿角は問うた。

姫は何故戻って来たのかと、何故血を流すことを厭わず、己を受け入れない場所を求めたのかと。

「敵だと？——勘違いするな。オレはハッキリしたいだけだ、あの男が何を考えているのかを！」

黒装束の姫、結城は答える。

ただ知りたいだけだと。立場ではなく、目的でもなく、昔から知りたかったことなど、そんな陳腐なものではないと。

「知って、どうする御積もりですか？——若様は、武蔵の学生であるのでしょうか？」

剣戟が交差する。

アスファルト材を圧縮した短剣は、既にその数を最初の三倍に増やしている。しかしそれに相對するのは、相も変わらない一振りの長剣と長棍。数を技量で凌ぎ、質量差を性能で補う結城に、鹿角は手詰まり感を覚えた。このままではいたちごっこだ。

斬っても、撃っても、薙ぎっても、割っても、裂いても、蹴っても、避けても、誘っても、防いでも、弾いても、どの手をとっても壊され、殺され、蹂躪される。

「知って、オレはようやくケジメをつけられるんだ！アイツを赦すのか、憎むのか、守るのか、愛するのか、諦めるのか。——どちらを選ぶにしても、先に進むためには、アイツの考えが解らなければ選びようがないだろう！？」

己が忠義を貫き通したように、向こうもまた、手放せないものがあると、鹿角は理解した。しかしそれでも、自動人形である自分は、

主の命を遂行するしかない。

他者に仕える身として、鹿角は少しだけ、運命の悪戯というものに、愚痴をこぼしたくなった。

「元信公は、若様を三河から追い出せと命じました。——今の三河の危険性を察し、どうか身を引いてください」

「そうさせたいのなら、アイツと顔を合わせろ。——でなければ時間の無駄だ」

「揃いに揃って、己を曲げない殿方ですね」

平行線のまま、両者は加速した。

手数では押し切れない結城に、鹿角は動きを変える。六本の短剣を再圧縮し、瓦礫や建物の残骸を引き寄せ、一つにする。

「押し通します!」

「!」

立体螺旋を描き、高重力で固められたのは巨大な六角柱。全長十メートル、幅三メートルを持つ巨体をハンマーのように突き出し、重力によるの連続射出によって速射砲の勢いを持った構造材が結城を弾き飛ばす。建物を薙ぎ払い、居住区を横一線に貫いた柱は勢いを殺さずに、そのまま地面へと突き刺さった。

轟音と共に粉塵を巻き上げ、区画一つを丸ごと粉碎した強撃に、鹿角は確かな手応えを感じる。質量的には軽武神の防護板を砕く攻撃だが、相手が相手であるため手段は選べない。

なのだが、

「流石ですね……」

目の前、破碎音が響いた。地響きか、或いは土砂崩れに似た音と共に、柱が砕けた。巻き上がる粉塵の中心では黒装束が立っており、上空へ掲げた長棍がその無傷の身体を守り通したと主張する。

「寸頸の応用ですか……。まさかあれ程の質量を砕くとは……」

「……」

感嘆の言葉に、結城は沈黙を保つ。時間に猶予はない、ここで勝負をつけなければ、あとが面倒だ。そしてそれは鹿角も同様であり、命令は追い出せとは言ったが、死なせていいとは言っていない。

だからこそ、

「!？」

西の方角。国道から疾走してきた武神の姿に、二人は同時に武器を握った。

来るのは三征西班牙の重武神。紅白の装甲を持ったそれは航空系でありながら、重力素子による仮想足部で、名古屋に向かう最短距離を突き進む。

背に十字型の四枚翼を持ち、右脇に三征西班牙の国营企業”サン・メルカド清らか大市”製の長銃を携えた武神は鹿角と結城を確認次第、戦闘姿勢を取る。その背後では、もう一機の武神と、更にその背後にある聖連の地上部隊が確認できる。上空では三機目の武神が援護に回っており、短時間でありながら、正規部隊としての練度を遺憾なく発揮している。

ここまでの道程では、三河の自動人形が彼らの妨害に入っているはずだが、どうやら失敗に終わっているようだ。流石に武神と渡り合える戦力は、三河には少なかった。

「予想より早かったな」

「どう致しますか？　ここから乱戦に持ち込んでも、互いの得にはなりえないと思いますが……」

結論が出るより早く、武神は速度を落とさずに突貫機動を維持し、その照準に銃口を合わせた。

撃つ。

欠片の迷いもなく、武神は弾丸をばら撒いた。敵味方の区別は必要なく、地脈炉暴走を前に、眼前に立ちはだかるのは等しく敵だ。

秒間六発の連射力を持つ長銃はマズルフラッシュを輝かせ、射撃加速用の大型聖術契約書の破片を宙に噴出す。そして砲撃に匹敵する威力を持つて飛来する弾丸に、結城と鹿角は同時に動いた。動く方向は真逆、その対処方もまた逆だ。

「——盾を視線に！」

「春先の御見上げに、鉛弾は遠慮させて貰う！」

二人の、拳を振り下ろす、顎を上げる動きに応じて、地面が跳ね上

がった。

小型の山だ。

路面の構造材ではなく、その下にある岩盤と土を衝き上がらせるかのように、武神大の山が斜め上に盛上った。

柔軟性と硬度を持った壁は貫通弾を難なく受け止め、同時にその質量を持って武神の行く先を止める。

『!?!』

目の前の障害に対し、武神はスラスターを展開し、急制動をかけた。十字型の四枚翼を開き、武神は山の斜面を足場として空に跳んだ。同時に長銃を背のハードポイントへ接続し、開いた腕で腰に差していた短剣を引き抜く。

そしてスラスターを点火し、急降下の勢いの中で更に加速した武神は短剣の切っ先を鹿角に向ける。

「お先に失礼させて貰おう！」

「！」

同時に、結城が走り出した。

上空から襲撃をかける武神を余所に、彼は鹿角を置いて名古屋へと駆け出そうとする。その動きに、鹿角は武神と結城の両者を見渡し、次の瞬間、

「不作法、失礼致します！」

掛け声と共に、両手を振り下ろす。

路面の構造材が膨れ上がり、圧縮され、作り出されたのは四本の楔。それを手繰りながら、鹿角は後方に跳躍すると同時に、楔を武神の短剣と激突させる。

足場の無い空中で衝撃を作り、武神の質量と加速に押し負けた鹿角は大きく弾き飛ばされる。そして先は名古屋へ向かう結城の頭上。鹿角は彼の行く手を阻むように、楔を彼の眼前にある地面に打ち込んだ。

「席を立つには早すぎます。——若様には、乙女に対する気遣いを学んでいただきます」

「さりとて自分が乙女であると褒めてね？」

足を止められ、結城は武器を構える。

目の前に着地した鹿角を見据え、そして背後から武神が殺到する。右手に短剣、左手に長銃を持った武神は、既にその銃口をこちらに向けていおり、次の瞬間、武神はその手に握る短剣を投擲した。下方向からの、手首のスナップを用いたのはアンダースロー。流体光を纏った尖端が路面スレスレを切り裂き、その質量の十分の一にも満たない人型を貫こうとする。更にその背後で、長銃のトリガーが振り絞られ、秒間六連射の弾丸が横殴りの軌道を描く。そして嵐のような面攻撃に、二人は動く。片方は重力操作では楔を引き抜き、それを再圧縮する。もう片方は武器を両手に握っては、飛来する短剣に自ら突き進んだ。

「——おお、！！」

吼えるような雄叫びを上げ、空気抵抗を減らすための低姿勢疾走を結城はとった。飛来してくる短剣との相対速度と距離を目測し、十二メートルを切った瞬間に結城は跳んだ。低空での助走跳びを行い、身体を縮ませることで飛距離と体面積を確保し、上半身より先に両足を前に出した。その前では、短剣が結城との間に僅かな高度差を持って交差する。その瞬間、地面と水平になるスライディング姿勢によって、結城は短剣の側面を滑走した。足裏で刀面を削り、流体光を飛沫のように吹き上がらせる。そして一瞬の末に、その両足が短剣の鰐に当たる。

「——っ！！」

声に出ない掛け声を上げ、結城の上半身が浮かぶ。短剣の鍔に足裏を強く踏み込み、確かな感触と共に、結城は身体を強引に捻る。

接触面を支点に強い回転を施され、空中で結城に踏まれた短剣が釣られて回転した。斜角90度の動きを無理矢理に実現させられた短剣は突き進むことなくその刀身を地面に突き刺され、結城はそれを盾として後続する弾丸を防いだ。

一発目は刀身に当たり、側面へと弾かれ、二発目と三発目は後方に弾かれ、同時に短剣に罅を作る。四発目は当たることなく結城の横を掠めるように素通りし、五発目は短剣に弾かれるのと同時に刀身を砕いた。そして最後の六発目を、結城は長棍で弾く。棍棒の末端を握り、両足と腰軸の回転によって遠心力をつけ、体重を上乘せした状態でのフルスイング。全ての打撃力を合計三回転の内に二メートル先の先端に増幅・集中させ、翳むことが赦されない一撃を弾丸の正面に合わせる。

「！」

そしてぶつかり合う弾丸と金属棒は衝撃波と炸裂音を爆散させ、刹那の拮抗の果てに勝負は人間の方に傾いた。弾丸は街の反対側へと飛び、大きく武器を振りかぶった結城の前では、武神が次の弾倉にマカジン手を伸ばす。

そして、

「続けていきます！」

背後、鹿角の声がしたのと同時に、結城の両側から黒い大筒が伸び出た。大筒は砲身で、その末端に覗かせるのは三征西班牙の護衛艦を撃ち落とした対艦砲そのもの。

結城が銃撃を凌いでいる間に、鹿角は二門の大砲を重力圧縮で作り上げ、その照準を武神に向ける。そして、作り上げた大砲に使う砲弾は、既に敵がくれてある。先ほど背後に弾かれた二発目と三発目の弾丸を、鹿角は重力制御で回収し、そのまま装填していたのだ。

「物は大切に致しますので！」

そして両手が振り下ろされる。

重力制御による加速を連続作動させ、一瞬の間に砲弾の初速を限界まで高める。それに対して、武神が弾倉を交換するより早く、

「——視線にて穿ちなさい！！」

二つの砲撃が炸裂した。

/ /

視線の先で、結城は武神が倒れて行くのを確認した。

放たれた砲撃は見事に命中し、武神の脇腹と右胸を抉ることその機能を完全に殺しきる。装甲の破壊と骨格系、一部神経系への深刻なダメージは無視できるものではなく、武神は膝を落しながら、破損した部分から潤滑油を血のように噴出している。

……決まったか……

一時の勝利を確信したが、それは予想にないものだ。聖連を交えた戦闘を結城は望んでおらず、本来は聖連が事態に対処しているところに、自分が別働で名古屋に乗り込む手筈だった。

鹿角に遭遇し、聖連が思っていたより有能なのが不味かった。此れでは結城の介入が聖連にバレてしまい、状況によっては武蔵と聖連の政治的駆け引きに持ち出されることもある。——幸いなのは、自分は弾丸を弾いただけで、止めを与えたのは自動人形だということか。

……ちっ、面倒だ。

しかし、心中で舌打ちしている結城を余所に、隕落した紅白の巨体の背後でまた動きがあった。

崩れ行く武神の後ろで、立ち上がるように長銃を構えたもう一機の武神がいた。それは後続の突撃部隊を先導していた機体で、何時の間にか、それは短い戦闘の合間を狙って、こちらへと接近していた。距離的には結城が対処できる訳が無く、鹿角の対艦砲も弾切れだ。対して、向こうは三十二発の弾丸を装填した長銃をこちらに向け、既にトリガーを引き絞る動きに入った。

次の瞬間、六連射の猛襲が自動人形と少年の身体を粉碎し、その肉塊と生態部品を地面にばら撒かせる光景が浮かぶ。仮想を現実に変換する手順は引き金を引くだけであり、それを武神が実行しようとした、そのときだ。

「三征西班牙製重武神”エル・アソウル猛鷲”に後続の陸上部隊か、——若、鹿角、動くなよ？ —— 結ぶ」

背後、男性の声が響いたのと同時に、結城は見た。空を切るという快音に伴い、武神の動きが止まったのを。そして、

『——！？』

直後。遠くで、武神の右腕と右足が割裂した。

正面から横一線という走りを見せた斬撃は、まるでバターを切るかのように武神を引き裂き、その戦闘能力を完全に奪った。しかし、結城が見る先で倒れたのは、何も武神だけではない。先の武神に続いて膝を落した二機目の向こう、国道道路の上に、多くの人影が倒れていた。

三征西班牙の制式突撃装備を身に纏い、地面に蹲っているのは、後から追って来た陸上部隊の計七十一名だ。その何れも、誰一人として例外なく、片方の膝を切り割られている。

その異様な光景に、結城はそれを成し遂げた元凶に視線を向けた。自分の背後、自動人形・鹿角の更に後ろにいるのは、三河警護隊の装備一式を着た本多・忠勝だ。その腕には一本の長槍が握られており、横に振りぬかれた槍の先端には、穂先を囲むように展開された円環型の表示枠が見える。

特徴的な笹穂型の槍身は流体光を纏っており、機能性を重視したそれが噂に聞く代物であることを、結城は瞬時に悟った。

「神格武装・蜻蛉切か……」

「Jud・」

言葉に、忠勝が頷く。

蜻蛉切。

聖譜記述において、松平家家臣、東国無双と謳われていた本多・忠勝が持つと記されていた武装だ。穂先に止まった蜻蛉が、そのまま切断されたという逸話から名付けられた武器を、今の忠勝が持つそれにも同様の力がある。

「穂先に載せた名称を割断する。——どんな物事にも必ず名前があり、それを断ち切ることで、本体を割断するのがこれの能力だ」

忠勝の言葉に、結城は目を細めた。大雑把な説明だが、理解できない話でもない。

”名は体を表す”と言う。

名前は個体や該当するそのものを示す単語であるため、名は決め付けられたそのときから、そのものの一部として、その存在の全てを記録する。

林檎と言えば人は赤い果物を思い浮かべるように、言葉や文字一つで、我々は一つの存在とそれに関する情報を無意識に”結びつける”ことが出来る。それは物質的にも、現象的にも同じ理屈であり、だからこそ、名を斬ると言う事はそれだけで強力な攻撃手段となりえる。

「阻止臨界時間まで残り六分つてところか、随分と余裕がある状態で終わったな」

「随分と遅かったですね。色々と迷惑になりました」

「しょうがねえだろー。殿がようやく最後の準備を終えて中央に入ったからな。——ここからは殿だ、我一人で十分だが、お前はど
しんがり
うする？——今の内に仲間の魂を拾って逃げるなら、これが最後の機会になるぞ？」

視線の先、忠勝と鹿角の遣り取りに、結城は動かない。

一見、何事もないかのように振舞ってはいるが。肩に槍を担いだ忠勝の気配は緩んではない。こちらが隙を突こうとするならば、容赦なくカウンターを入れられる状態になっている。東国無双としての
キャリア
の年季が表す迫力に、結城は目に見えない技量を確認した。

此処に来て、経験の差に足を引っ張られることに、結城は眉を顰める。

そして、

「で、まあ、鹿角は上手くやってくれたが、若がここまで来られるとは流石だな」

「申し訳ありません。——若様が予想以上に手強かったので」

「まあ、武蔵の臨時相談役は年鑑資料でも有名人だしなあ、……物

理的に。——で？ 若はこれからどうするんだ？ やっぱり我と一戦交えるか？」

質問に、結城は視線だけを寄越した。

彼は直ぐに答えず、少し間を置いてから、一息し、

「元信と話がしたい」

そう答えた。

決して変わりはない。たった一つの望みを。

そしてその願いに、忠勝は息を小さく吐いた。蜻蛉切を地面に突き立て、間に鹿角を挟んだ両者は睨み合うかのように視線を合わせる。そしてさらなる沈黙の果てに、忠勝が言う。

「若……、どうか、御引取り願いたい。——我は殿に忠義を誓った身、その命令が我にとって絶対である以上、どのような事があったも、我は若を此処から先に通す訳にはいかない」

「くっ……例えそれが、——お前の本心に背いてもか！？ 本多・忠勝……！」

拒否の言葉に、結城が叫んだ。
それでも、忠勝は引かない。
巖のように佇むその姿は番人そのもので、その意思の固さに、結城は武器を握る力を強めた。
そして、

「……Jud。」

審判を受け入れる返答に、結城の腹の底に炎が燦った。
三河崩壊を目前に、最大の障害を前に、結城は、嘗て壊れた自我が蘇る感覚を憶える。

終焉への残り時間は、既に五分を切ろうとした……。

第六話　若姫と侍女の舞い　（後書き）

自分で書いてて、原作のボリューム感に改めて絶望を感じたクロです。

そして心理描写はやっぱりムズイね。

アサマチ以外にもヒロインが増えてきたとこだし、でもあと二三人は増やしたい気分。次は麗しい”武蔵”さんでいいかな？

P・S：タグにハーレム付けといたよ。あと声優ネタは個人的に中村悠一か細谷佳正が似合ってると思うけど、やっぱり主人公にイケメンボイスはお約束だな（笑

第七話　葵三葉紋の下で

炎上する新名古屋城を背景に、三河の町は未だ光に包まれている。そんな中、破損した国道の上で、オレはただ佇むことしか出来ない状況に囚われていた。

地脈炉暴走の時間が目前に迫っている中で、目の前に立ちふさがる本多・忠勝と鹿角を見据えることしか出来ない。話し合いは平行線であり、強行突破しようとも、東国最強とその相方を前に、流石に勝てる自信は無い。

本多・二代には偉そうなことを言ったが、正直に申して、オレも自分の実戦能力には不安がある。未知の戦況や危険に対処するために、学べる武芸は片っ端から身体に叩き込んでおいたが、それでは足りない。

脊髄反射レベルに修得した動きも、経験したことのない事態には硬直するものだ。

戦闘能力はあっても、戦争手段がない武蔵では、実戦経験を積むための場が限られている。それでも、オレはこの十年近い時間の中で、自分なりに良くやって来たと思う。魑魅魍魎や妖獣魔獣程度の相手なら嫌というほど被って来たが、人間相手の実戦は今日が初めてだ。真喜子の授業と違って、本当に色々と容赦が無い。――人を斬る感触は獣の血肉を絶つようで別に忌避感はないが、その根本である『命を消す』という行為は流石に憚れる。戦争だから仕方が無いというのは体のいい言い訳だ。神や聖人の行いを助力として体現し、その神託や奇跡を力として振舞うのが術式を用いた今の戦争の主体なら、オレ達は神聖の名を背負うその意味に基づいて、『殺す』という行為に対して安易に妥協してはいけない。

――とはいえ、格上の相手に、一々そんな手加減をするような舐めた考えを持ち込んでいい訳でもない。殺したくは無いが、殺す気

でかからないと詰む。……まったく、このジレンマ、何時か解消したい。

「まったく、置き土産としては最悪だな」

「Jud、忠勝様は駄目駄目で周りに迷惑をかける駄々っ子ですから、こんな緊迫した状況の中でも相変わらずというのは、流石に空気を読んで欲しいものです」

「違いねえ」

「おいおい！ 何本人を前に好き勝手話てんだ！？ つーか鹿角！ お前一体どっちの味方だよ！？」

「Jud、ヒエラルキー的に見れば、若様が忠勝様より上なのは決定事項ですので、忠勝様を弄り倒すくらいは問題ありません」

「答えになってねえよ！！」

暢気な会話流れる。こんな命懸けの修羅場じゃなければ、結城も軽口の一つや二つを追加していたところだが、そうにもいかない。

心の中の焦りが、早く前へ進めとオレを促す。しかし越えられない絶壁の前に、理性が先に白旗を上げようとしている。

——どうする？

ふとここで、オレはあることに気付いた。

きっとそれは、これから先、オレという存在を動かすために必要不可欠な要素だ。

そのことについて結論を出す前に、何やら目の前では何時の間にか不毛な争いが展開されている。

「だいたい忠勝様は甘いのです、外に出かけると酒や焼肉屋や大人買い、猫や犬を見境なく拾って気きて屋敷は動物園、その果てに今は地脈炉ドカンの前に殿を務めるなど、人間はおるか、自動人形ですら全く理解できない思考です。忠勝様、貴方人間ですか？」

「鹿角は解つてねえな、焼肉や酒は中年男のロマンだぜ、猫や犬とか、可哀想だから助けてあげるのは当たり前だろ？ それに此処に残るのは我の忠義の証よ、男の最後の生き様を示す戦場、格好良くな？」

「ハイハイJud・Jud。——今の、忠勝様が私によく使う返答ですが、どうでしょうか？」

「てめえ……」

オレを置いて口喧嘩を始めた二人。

緊張感の無い空気に、しかしオレは武器を握る力を緩めない。

まさかこっちの気を紛らわすための作戦ではないか、と思ってしまうが、困ったことに、極東人は如何なる状況でもマイペースなのが素である。

「なあ、若も何か言ってやれよ。この女マジで面倒臭い」

「何でオレに話を振るんだ？……、まあ、この場合は大抵が男の自業自得って相場が決まっているから、諦める」

「Jud、流石若様。こちらの駄目親父と違って、物分りが良くて大変宜しい。空気読める律儀なところは、忠勝様にも見習って欲しいものです」

「空気読めたら律儀なのかよ……」

とまあ、何やら非常に進み難い状況になってきた。

最初に感じた苛立ちも大分収まってきたが、時間が少ないことには変わらない。

そろそろ、腹を括るか。

「おい、お前等……」

と、二人を呼び止めようとした、そのときだった。

半径1・5キロメートルに展開していた気配察知能力の範囲内を、何かが貫通した。

それは無規則で、しかし指向性を持っており、元ある気配を食い潰しながら、凄まじい速度で突き進むそれは、こちらに向かっている。

「！」

その瞬間、オレの判断は素早かったが、果たしてそれが救いになったかどうかは解らない。

武器を納め、地面を蹴る反動を最大限に利用して、目の前に立つ鹿角の懷に潜り、掌底を一閃。そのまま彼女を庄内川の下りへと突き飛ばす。

そして足を止めずに、忠勝の方へと突き進み、

「砲撃だ！ 避ける！！」

手が届く前に、オレは叫んだ。

同時に、右肩に熱い感触が刺さる。――何かが、オレの肩を穿った。

指先大の穴から、赤い滴がこぼれ出す。そのことに、忠勝は目を見開くも、既に足を動かしていた。

二人同時に川の方へと下がり、下り坂を遮蔽物として身を隠す。

直後。オレ達の背後で轟音が鳴り響く。

三河の大地が、破滅を呼ぶ悲鳴と共に削ぎ落とされた。

/
/

直線射程3キロ、横幅百メートルの砲撃による地表の蹂躪。

全てを削ぎ落とす掻き篁りの力は群を持って数秒の持続を経過し、物理空間内に存在するあらゆる要素を引き裂き、破裂させる。

町は粉々に吹き飛ばされ、大気は巨大な風船が破裂したかのような快音を鳴り爆ぜる。弾けた空気は不純物を広範囲に渡って外側へと押し除け、僅かな一瞬の中で真空を作り出す。そして大気は気圧のバランスを保つために真空を埋め、刹那の中で大量の空気を三河に充満させた。夜の大地に颯爽と流れ込むそれは冷気を運び、霧氷に近いダイヤモンドダストを形成する。

そして、肌寒い、薄い霧のような大地の上では、砲撃の風鳴りが未

だに鳴り響く中で、四つの影が対峙していた。

一つは、結城。

右肩を貫かれた彼は左手で傷口を塞ぎながら、砲撃の元にある人物を見据える。

もう一つは、本多・忠勝。

頬に一筋の削ぎ痕を走らせ、そこから滴る血を無視し、彼は自分達がいる川の反対側を見た。そこには、結城に突き飛ばされた鹿角が倒れており、見たところ、状況は宜しくない様だ。

視線の先、削ぎ落としの余波によって、鹿角の右半身は壊滅した。どうやら、結城の瀬戸際の判断は、彼女を即死させずに済んだだけのようにだ。本来の”運命”と違って、機能停止には陥っていないが、戦力から外されたのは間違いない。彼女は仰向けに倒れたまま、残った左手を軽く振る。自分のことは気にしなくて良いというジェスチャーだが、忠勝は最初から気にしていない。そして、

「お初にお目にかかります」

高らかに響く青年の声に、結城と忠勝が視線を前に向ける。

その先にいるのは、長身の金髪。三征西班牙主教導院アルカラ・デ・エナレスの校章が刺繍された赤白の制服を身に纏い、右腕に一つの武器を携えているのは、

「——三征西班牙所属”神速”ガルシア・デ・セヴァリヨスを襲

ヴェロシタート・デ・ディオス

名しました、立花・宗茂、戦種は近接武術師です。そして――」

黒と白の金属で出来た剣砲を持ち、彼は高らかに名乗る。

告げられた名前に、結城と忠勝は目をやや見開くが、青年の名乗りはまだ終わっていない。

「三征西班牙に預けられた大罪武装の一つ”リヒ・カクスリフシ悲嘆の怠惰”を預かる者、八大竜王と呼ばれる者の一人でもあります」

言葉に、おお、と結城と忠勝が感心した頷きを見せる。

しかし次の瞬間、二人は面倒くさそうな、顰めた表情を浮かべて答えた。

「ノリノリだなお前!!」

/

現れた人物に、結城は怪訝そうな表情を浮かべた。

立花・宗茂。

神速のガルシアとの二重襲名を果たした、本多・忠勝と肩を並べる西国無双と謳われていた男。自分と同年代で、しかし既に数多の戦場を歩き渡り歩いてきた歴戦の猛者。

大罪武装を預かり、三征西班牙の切り札でもある人物を前に、しかし結城は強者が発する威圧感を感じない。寧ろ風のように柔らかく波のような穏やかさが強い。

青臭い二枚目な印象を持つ生真面目な青年に、結城は警戒心を維持しながら、しかし悪くないという評価を下した。腕の立つ武芸者は、一目で相手の力量を見定める眼力を持つのだ。故に、今の結城は失笑したい気分にもなる。

——あれでは駄目だと。奇襲を掛けたにも関わらず、正面から名乗り出る時点で戦術として終わっている。甘い部分が抜け切れていないのに、それで西国無双とは片腹痛いと、冷徹な自分が吐き捨てる。

——嫌いじゃないな。砲撃で己の存在をアピールさせ、正々堂々と勝負を申し込む粋の良さは侍の鑑だ。こそこそしない果敢さは賞賛に値するもので、解り易い喧嘩の売り方は気に入っていると、感情的な自分は評価する。

異なる自分が相手を見定め、そしてどれも正解ということに頷く自分に、結城は失笑したのだ。——存外、自分も暢気なものだなと思う。

「——参じるのが遅れて申し訳御座いません」

「申し訳ないと思うならすぐ帰れ、こっちは大事な話をしているところだ」

忠勝の言葉に、宗茂がT e s ・と答える。

彼は結城と忠勝を交互に見て、こう言った。

「武蔵アリアダスト教導院生徒会所属、臨時相談役の結城・秀康君に、松平四天王の一人である東国無双、本多・忠勝。——極東代表生の中でも聖連が認定した重要人物が地脈炉暴走を前に大事な話とは、見過ごせない事態ですね。……状況によっては」

途切れた言葉に、結城と忠勝は目を見開いた。

視線の先、10メートルの距離を離れた位置にいた宗茂が、その姿を消した。

そして同時に、二人の背後で気配があつた。

視線を振り返るより早く、一瞬の移動に伴う風の動きと共に、声がした。

声は、先ほどまで自分達の前に立っていた宗茂のものだ。

「——武蔵が三河と結託して、聖連に反抗しているものと看做せるのです——」

よ、という最後の一字が出ることは無い。

言葉が言い終わる前に、宗茂の眉間に蜻蛉切と長棍の切っ先が向けられているからだ。

槍は既に表示枠を展開しており、跳ね上がる長棍は勢いを殺さずに宗茂の頭蓋へと殺到する。

そして、

「—— 結べ、蜻蛉切」

忠勝の声と共に、立花・宗茂へと、割断と打撃の力が同時に炸裂した。

/
/

頭上から聞こえる音に、半身が碎かれた鹿角はゆっくりと目を開ける。

身体は上手く動かないが、対話や重力制御機能は生きている。思っていたより問題は無い。

流体抽出機能を持つ心臓部分が無事なため、ちゃんとした修理を受

ければいいのだが、元々殉死覚悟で三河に残っている身としては、贅沢を言っていられない。寧ろ、本来仕えるべき二人目の主君に助けられたことで、申し訳なさがある。

そう思いながら、鹿角は先ほどの破砕音が起きた場所に、目を向けた。

武器を振り抜いた結城と忠勝は川を横断する橋の上に佇んでおり、しかし彼等の前、距離五メートルの位置に、宗茂が肩膝を地面については、大罪武装を構えている。

身体は無傷で、しかし眉を顰めている。息は荒く、無傷な割には無事とは言えない状態だ。

「速度か」

「うむ。——若もなかなか早いが、同じ土俵ではやはり神速が一枚上手か」

視界の中心では、三人が睨みあっている。

気のせいではないのだろう、完璧なカウンターを前に、打撃はおろか、蜻蛉切の切断能力が効いてないことに、鹿角は信じ難い表情を浮かべる。

そして、

「神格武装である蜻蛉切の起動システムは、蜻蛉切の刃に対象が映

ることで名を取得し、割断がなされます。そしてその有効射程距離は約三十メートル。――ならば刃に映らぬ位置、またはその距離まで一瞬で退避すればいいのですよ」

宗茂の説明に、鹿角は眉を顰めた。

どうしてそれを知っている？ という彼女の戸惑いを余所に、宗茂の言葉は続く。

「なかなか見事なカウンターでしたが、今は御二人が協働関係にあることの証明として御見受け頂きまして構いませんね？」

判決を下そうとする問い掛けに、しかし結城と忠勝は答えない。二人は互いに視線を向け、次に宗茂へと向き直ってから、手の平を横に振った。

「いや、オレ／＼我達が仲間だなんてとんでも御座いません」

軽く否定する老若の言葉に、宗茂は眉間に皺を寄せた。息は荒いままだが、彼は構わず問い返す。

「では、先ほどの息の合った攻撃は？」

質問に、先に答えたのは結城だ。

彼はコートの裾を破り、その破片を右肩に巻きついて応急処置を取る。

「オレは右肩のツケだ。大罪武装”悲嘆の怠惰”の超過駆動とは、人間相手にエグい真似をしてくれるじゃないか。西国無双」

発せられた言葉から、苛立ちや不機嫌さが感じ取れる。
あちゃー、これはマジで怒らせてしまいましたね、と鹿角が心中で断定する。

しかし体が動かない自分では仲裁に入ることも出来ないため、素直に状況を見送る。

「T e s、私の適応力では、一度に50%が限界です。――にしても、よくあの距離からの奇襲に気付きましたね」

「勘に自信があるからな。——まあ、信じるかはそちらの自由だが、武蔵はこの事件に関与していないぞ。オレが此処にいるのは個人の独断で、どっちかと言うと、聖連とは目的が同じだ」
おまえら

「……成程、参考として保留させて頂きます。そしてその上で言わせて貰います。武装放棄して、投降を御願ひ致します」

荒れた息を整えながら、宗茂はゆっくりと立ち上がる。
その動きに、忠勝は目を細め、口端を吊り上げながら言う。

「お前、それだけ息を切らしておいてよく言えるなあ」

「今のは、準備が甘かっただけです。かわすことが出来るのは解りました」

その上で、宗茂は武器を構えた。
見せ付けるように切っ先を向け、宣言する。

「投降を御願ひします。そして御二人には、地脈炉暴走の停止に御助力を。そうでなければ、次には私もこれを使います。そうすれば、

勝負は付きます」

/ /

降服という意味に、オレは抵抗感を抱えた。

聖連に迫害されてきた人間が、例え正しいと思ってしても、それに容易く頷ける筈が無い。

そして再確認した。

オレはやはり、連中が嫌いだと。

何故なら、

……あの船以外の人間が、馴れ馴れしくオレのファーストネームを呼ぶんじゃないよ！

自分で律した、名を名乗らない誓約の前に、結城・秀康というフルネームを他人に語られるのは我慢なら無い。事情を知る者ならば既に塵芥にしていたところだが、事情が知らない相手に癩癩を起こすほど、自分は子供ではない。

オーケーオーケー、落ち着け、クールになろう。

元信といい、聖連といい、地脈炉暴走といい、馬鹿三条は何時になつても心労の種だ。今日一日で余りにも多くのことが起きている、御蔭様でオレのキャラが疑われそうになっているな。

「降服はしない。しかし手は貸してやろう。武蔵の臨時相談役ではなく、一個人としての判断だ」

「T e s 、御協力、感謝します」

「若……」

忠勝の呟きに、オレは目を合わせない。

話すべき言葉は、全て元信に向けると決めてある。

だからこそ、オレが忠勝に語れるのは、平行線の言葉だけだ。

「オレは敵だ。敵で構わない。——お前達が何を思ってこんなことをしたのはオレには解らないが、国一つを消すことが正しい筈が無い」

だから、

「オレはアイツの考えが知りたいのさ。——オレ達に何一つ伝わらうとしなかった、あの男の考えを……」

故に、刃を交えてくれ。

お前達が正しいと、オレもまた正しいと、そしてその果てに、本当は両方とも間違っている、誰かが弾劾してくれるまで、オレは平行情で有り続けることに妥協しない。

一度は妥協して、それで苦い後悔を飲んだのだから、もうあんな思いはしたくない。

「戦ってくれるよな？ 本多・忠勝。——お前の忠義には、最初からオレは含まれていないのだから」

言葉に、オレは宗茂の方へと足を踏み入れる。

男として、決して広くない背を忠勝に向け、本当は彼の表情を見るのが不安で、オレは視線を振り向かないでいた。

どうしてだろうか？

今日知り合ったばかりで、鹿角さんを含めて、本当は付き合いの良人達なのに、オレ達は、一人の男が起こした訳の解らない騒動に、殺し合いを始めなければならない。

否、違う、そうじゃない。

解っている。オレにも、選択肢があつたことを。こんな処に寄らずに、黙って武蔵に帰っていれば、騒ぎに心を揺らされても、まだ平穏を掴めた筈なのだ。帰って皆と幽霊探しをして、麻呂に怒られて、

明日のトーリの告白に頭を悩ませるだけの余裕を得た筈だ。

しかし、それをよしとしないのは。

……オレの身勝手な我儘だ。トーリと約束を交わしたときと同じように、逃げたくないオレ自身の、勝手な都合だ。

幼稚で甘い考え。だが手放すことが出来ないのは、それが間違っていたとしても、大切なことに変わりないから。

放って置いたら、事件が自然と解決出来ました、みたいな楽観視は出来ない。

もし聖連が失敗したら、三河が滅びたら、あの男が死んだら、オレはもう二度と、この心にある葛藤の行く末を掴むことが出来ない。そして今では、姿形が何もかも違う彼女に、本当の事を教えてあげることも出来ない。真実を掴めないあの子の為に、オレが本当の自分達を探し出さなければいけないのだ。

だから、

「だったら、……名古屋の方を見てくれ」

忠勝のその言葉に、オレは光を見た。

/ /

光は、新名古屋城から発せられたものだ。

西側正面入り口。それを含む内部の多重隔壁扉が全開され、今まで不動だった新名古屋城が、自分からその姿を顕にした。

そして、数キロという距離に渡って開かれた入り口の先にあるのは地脈統括炉。

直系一キロ、硬質な金属内殻と弾力のある木製外殻に覆われたそれは、既に暴走が完成した他の地脈炉から供給された流体を蓄積している。

そして、変化はそれだけではない。

今まで、指向性を持って名古屋に流れ込んでいた流体の動きが止まった。

流体は霧状の光に変異し、統括炉を中心に循環するように三河の大地で回る。矛盾を許容する流体は侵蝕の中でも秩序を見出し、それは天球図を描くような線円を作り出している。そして止まることを知らない円運動の中心では、新名古屋城から天に向かって一条の光塔が立っていた。

逆漏斗状に起立しているそれは、統括炉の発する光と鼓動に呼応し、徐々にその高度を上げつつ、しかし同時に崩れて行く。

最上部から光の内側へと零れ落ちる塔に、誰もが言葉を失い、しかし把握した。

……逆流しているのか！？

光の正体は、三河を覆う線円と同じ物質で出来ていると、結城は推

測した。

変異した流体は統括炉に蓄積され、しかし許容量をオーバーした流体は逃げ場を求めて空へと上がる。

しかし無駄だ。

積み重なれた流体は、放出と蓄積のバランスがつり合わず、光の塔はその自重に抗えられずに、母胎の元へと崩れ落ちる。

放出された流体が、その経路を逆流したことで循環性が保てずに、最終的には統括炉ですら処理しきれない流体が一斉にオーバーロードを引き起こす。

簡単な道理だ。

水を流し出す蛇口から、逆に水を叩き込むのと同じだ。

そしてその考えを肯定するかのように、空に声が響いた。

それは、遠くにある新名古屋城の外部拡声器から発せられた。

『やあ、諸君。何とかここまで来たよ。タイムリミットまであと五分。そして先ほどの対話も聞かせて貰ったよ。はてさて、そこにいる立花君と結城君はどうするつもりかな？ 時間は有効に使っていかないとな』

聞き覚えのある声に、結城は心臓が止まるような気持ちを抱いた。そして叫ぶ、思い焦がれていた、その者の名を。

「松平・元信……！！」

頷き、ああと応える姿があった。

それは人影、学帽付きの痩躯の男性はボロボロの白衣を纏い、右手にマイクを握っている。

彼は統括炉の前に立ち、後光に照らされたその者の全貌を確認できる人はいない。

しかし誰も彼もが、それが誰なのかを知っている。
そして、

『ようし、じゃあ全国の皆！　こんばんはあー！！』

ポーズを取り、マイクに向けて言葉を紡ぐ学帽、元信の行動に、結城と宗茂は僅かに構えた。

だがそれを余所に、忠勝は止めず、鹿角は動かず、そして元信の声もまた止まない。

『この放送！　共通通神帯で全国に放送中だからね！　よい子の皆、これから先生の一挙手一投足を見逃しちゃいけないよ！　ではでは

』

息を吸い、高らかに叫ぶ宣告が、世界中に届いた。

『今日、先生は、地脈炉がいい感じに暴走しつつある三河に来ていまあ——す！——！』

/
/

専用陸港に停泊してある武蔵全艦では、誰もが宙に出現した表示枠から、元信の嬉々とした表情と声を見聞きしていた。

しかしそんな中で、主役である元信以外の人物を注意している者達がある。

それは、

「結城……君？」

教導院前の橋にいる梅組の面々は、長年過してきた級友が画面の先にいることに、言葉を失った。

そんな中で、浅間は信じられないかのように、彼の名前を紡ぐ。そして理解した。どうして今まで、彼と連絡が取れないのかを。

共通通神帯での放送。その準備のために、三河は一度、地脈通神機

能を停止させたのだ。個人通神を使用するにしても、流体濃度が高すぎる三河ではジャミングが激しいため、正常な通神手段は通用しない。

しかし、そんな冷静な分析を行っている中で、浅間の心拍数は限界まで上がっていた。

……どうして？ どうして、結城君があそこに……？

番屋の方で爆発が起きた。三河の方から、得体の知れない光と震動が起きた。何かが起こっているのは推測できる、そして今の放送で、それがとても良くないのも解っている。

解っているからこそ、浅間は目の前にある現実を受け入れたくない。

画面の中で、結城は元信を見ている。

その表情は当惑か、哀愁か、憤りか、歓喜か。いずれにしても、それは今まで、一度も見なかったことの無い結城の表情だ。手には武器が握られており、見間違いじゃなければ、右肩に赤い沁みが出来ている。

怪我だ。

知らないところで危険な場に足を踏み入れ、あまつさえ傷を負っている。そしてそのことに、幼馴染である自分は何も知らずに、暢気に安全地帯に立っている。

そして何よりも、運命の名古屋に、結城を一人置いてきたという状況に、浅間の不安は恐怖となった。

「どうして……、——どうして一人で背負うとしたんですか！！」

「ちよつ、浅間？！」

浅間の叫びに、傍にいる喜美が振り返る。

しかし、彼女の慟哭は止まらない。両手は立ち竦む己を守るように身体を抱きしめ、しかし心が求める存在は薄っぺらな画面の向こうにある。

「……怪我までして、追い求めなければならない過去なのですか？
！——どうして、私達を……、私を置いて其処にいるんですか
！！」

気付いたときには、涙が止まらない。

それが我儘に似た単なる依存でも、浅間は、大事なときに一人で先を進もうとする彼に、悲哀を感じられずにはいらなかった。
そしてそんな彼女に、誰も投げかける言葉が見つからない。

「御願いです……帰って来てください、——秀君」

それは、幼い頃に使っていた、彼への愛称。
今では何もかも置いてきた、過ぎ去りし日の思い出に、浅間もまた、
一人後悔していた。

/
/

ふざけ過ぎた悪戯だと、結城は思った。

しかし自分を含めて、現場では誰一人、元信の動きに反応できる者
はいない。

そしてそれはきっと、世界中の誰もが同じなのだろう。

同時に思う。

彼が目の前にいる。

目測距離は三キロメートルはくだらないが、それでも今までよりは、
もっとも近い距離に、自分は立っている。

薄っぺらな表示枠や、面会謝絶という軽い文字でもなければ、放送
越しの虚像に満ちた声でもない。——本物の、自分が会いたくて
仕方がない男が、其処にいる。
なのに、

……今まで以上に遠く感じるのは、どうしてだ！？

困惑は身体を突き動かさない。

冷静になれ、空気に毒されるな、お前の為すべき事を思い浮かべろ。理性が檄を入れる。

そつだ、向こうから出向いて、ようやくチャンスが目の前に現れたのだ。立ち止まっている場合じゃない。

そして足を動かし、一歩前に踏み出そうとした瞬間だった。

新名古屋城の方で、また動きがあった。

「あれは――」

逆光に満たされた城の中から、多くの人影が現れた。

数百を越えるそれは自動人形。

開かれた無数の隔壁扉の陰から、手に様々な楽器を構えた侍女服達
が、身体をシェイクしつつ歩き出す元信の背後に並んで、続く。

そして、

「――」

高く鳴り響く音色に、結城の動きが止まった。

調律され。音圧と音色を変えながら奏でられるそれは、元信の手の動きに合わせて変化し、

「これは……」

やがて、楽器を持たない、無手の自動人形が唄を口ずさむ。
決して忘れられることのない、あの蜉蝣のような儚い拍子を伴った
のは、

『——通りませ——』

通し道歌だ。

通りませ 通りませ

行かば 何処が細道なれば

天神元へと 至る細道

御意見御無用 通れぬとても

この子の十の 御祝いに

両のお札を納めに参ず

行きはよいなぎ 帰りはこわき

我が中こわきの 通しかな――

歌に、結城は両の膝を地面についた。

激しい嘔吐感と共に、腹の底から込み上げる異物を押し戻すように、結城は手の平で口を塞いだ。

視界は真っ赤に染まり、その先に見えるのは最早三河の土地でもなければ、光り輝く新名古屋城でもない。

身体を赤い滴で染めた、黒髪の少女^{げんえい}が先に立つ。

涙が、感情が、痛みが、後悔が追い縋る。

そして呪のように、現実の音が響く。

それはマイクを握った、自分が追い詰めるべき者であり、

『おやあ？ 何やら体調が優れない子が一名いるようだが、構わず続けるよ！！ さーて皆！ 今唄っていたこの歌、これから末世を掛けた全てのテストに出ます（配点：世界の命運）。じゃあ、皆さん。先生に何か質問はありますかあー？』

暢気なその声に、齒を食い縛りながら、結城が叫んだ。

彼は長棍を握る右腕を突き出し、その切っ先を上に掲げながらも、元信の方を指す。

「元信……！！！」

息は荒い。酸素が必要だ。

しかし嘔吐感は引かない、少女もまだ前にいる。げんえい

悲しいような、嬉しいような微笑を浮かべた小さな影を前に、結城はありつたけの感情を剥き出しに叫ぶ。

何故ならこの日のために、自分は無様な己を晒し続けてきたのだから。

「お前に聞きたい事は山ほどある！——だがその前に、教える……お前は どうして、自分の国を滅ぼそうとするようなことをした！？」

この期に及んで、素直になれない自分に苦笑する。

ああ、オレは馬鹿な男、だと。

しかしこれだけはハッキリさせなければならぬ。この問題の答えは、世界中の誰もが欲しているのだから。個人の我侭で、長引かせていいことじゃない。

そしてその質問に満足したように、赤い視界の先で、元信は頷きと共に応えた。

同時に、結城は少女を見た。

……もう少しだけ待ってくれ。——お前に報える答えは、必ず見つけてやる。

そんな考えと共に、結城は聞いた。
誰もが待ち侘びていた、その言葉は、

『いい質問だね、結城君。——遠路はるばる、課外授業に来た君に、先生は褒美を与える前に逆に一つ問うよ?』

それは、

『危機って、面白いよね?』

/
/

「先生、よく言うよね? 考えることは面白いって。じゃあ、やっぱり、どう考えたって、——危機って、面白いよね?」

両手でマイクを持ち、私は思っていたことを、迷い無く口にする。
世界中の人々が私の声を聞いて、動きを確認して、行方を思っているのだ。真摯な気持ちで授業に参加する生徒達に、私は教員として無様な姿を晒してはいけない。
そしてなにより、

「考えないと、死んじゃったり、滅びちゃったりするんだもんなあ。
——— すぐごくすぐ考えないと解決出来ないと思うんだけど、
それってつまり、——— 最大級の面白さだよね？」

初めて出会った、掛替えの無い人の思いに、私は目を背けたくない。
地面に膝き、這い蹲って、うつ伏せになろうとも、その目は決して足下ではなく、前を見ている。

絶望の最中でも、考えることを止めず、諦めることを選ばないのは、
喜ばしい限りだ。

だから見てくれ、聞いてくれ、感じてくれ。

そしてぶつけてくれ、世界を前にした、君の思いを。

「危機つてのはとても面白いものだ。だけど、もっと面白いものがあるよね？ ハイ、じゃあ結城君。もっともって考える必要があるもの、それはなーんだ？」

『……言葉遊びか……、良いだろう』

ああ、そうだ。素晴らしい目だ。

この瞬間でも、君は考えることを止めない。

それでいい、こういう遣り取りでなければ、面白くない。

私の質問に君が考えて、その答えを予測するように、私が考える。
だから言ってくれ、その言葉を。

『危機以上にお前がほざくという面白いこと、それは——』

それは、

『末世だ』

末世。

そうだ、そうなのだよ、素晴らしい！

うんうん、実にいい答えだ。

こうまで君が成長出来たことを、私は素直に嬉しいよ！

でも悲しいかな、そんな気持ちを私が君に伝えてあげることが出来ないんだ。だから恨んでくれたまえ、それでこの至福の時間が少しでも続けられるのなら。それも本望だ。

「ああ、君は優秀な生徒だよ、結城君」

私からではない、他の誰かが与えた名でしか君を呼べない私を赦さないでくれ。

「末世。——この世の滅びでもある、予見された運命。それは全世界の生徒に対する最高のエンターテインメントだ」

大切な絆より先に、教師として君の前に立つことしか出来ない私を罵ってくれ。

『余興とは、また不謹慎な発言だな……』

「これは真面目な話だよ、結城君。これから君達が立つべき舞台がそれなのだから——」

だからこれから君の行く道の礎に、私はなろう。

さあ！　始めようか！　最初で最後の、私からの授業を！！

/
/

『末世は、以後の未来を持たないという”卒業”だ。――それを前にした君達にとって、そこまでの道程の全てが授業時間となる。この貴重な時間が終わり、末世が来たら、君達は今や昔みたいに教導院に戻ることは出来ず、友達や家族と話をすることも出来なくなる』

元信の言葉を、オレは静かに聞いていた。

理屈は解る、共感できる部分もある。しかしオレにはどうしても、それが元信の言う最高のエンターテインメントとは領けないでいた。

「確定された絶望の前に、お前はこの騒ぎが末世を解決するために必要なものか？　地脈炉を暴走させて、三河を消滅させることが、世界の破滅を救済することに繋がるとは思えない！」

『素晴らしいね。その否定は”正しさ”から生まれた合理的な論点だよ、結城君。そして答えを求めようとする疑問もまた、君が自分を納得させる真実を追い求める証拠だ。君みたいな行動力のある人間には、きっと大勢の人達が祝福を与えている筈だよね?』

「それは……」

どうだろうか。

オレは他人のことばかり考えて、何時も自分の問題を後回しにしていた。

己を謹みないエゴの塊に、果たして本当の意味で、皆はオレを肯定してくれたのか?

『地脈炉暴走は末世に対する対策のほんの一部だ。過激な方法だが、何もしないよりはマシだろう? —— 何せ末世という卒業を迎えるのだとしたら、もはや限られた貴重な時間を必死に過さなければ損だ。結城君。君は現状に甘んじて停滞する人間ではない。世界をより面白くするために、自分から劇を演じることの出来る役者だ』

そうではない。

オレは我慢できなかったただけだ。

あの日の後悔を見たくないから、オレは自分勝手に誰かを幸せにしたいだけなんだ。

御節介で、傍迷惑で、見境無く、誰もが拒絶できない幸福を麻薬のように撒き散らそうとしている自惚れた道化だ。

『世界を揶揄して喜ぶ批評家。世界という舞台で踊って楽しむ者。世界を礎に、世界を作りに行く者。何れも結構だ。等しく素晴らしい。その誰もが自分が足立つ世界を理解し、考慮し、動かしていくんだよ。だから——』

だから？

『ここまで先生の問答に付き合ってくれた結城君と、必死に答えを考えた者。そしてたいへんよく出来ました的な人には御褒美をあげよう。それは末世を覆せるかもしれないものだ』

言葉が紡がれる。

少女が俯く。

儚い赤が黒く淀む。

今まで、オレが否定してきたオレ自身を肯定していた男から作られた言葉に、オレの心臓は驚揺みされた。
それは、

『——大罪武装だ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5444y/>

夜月下の枝垂桜

2011年12月14日04時48分発行